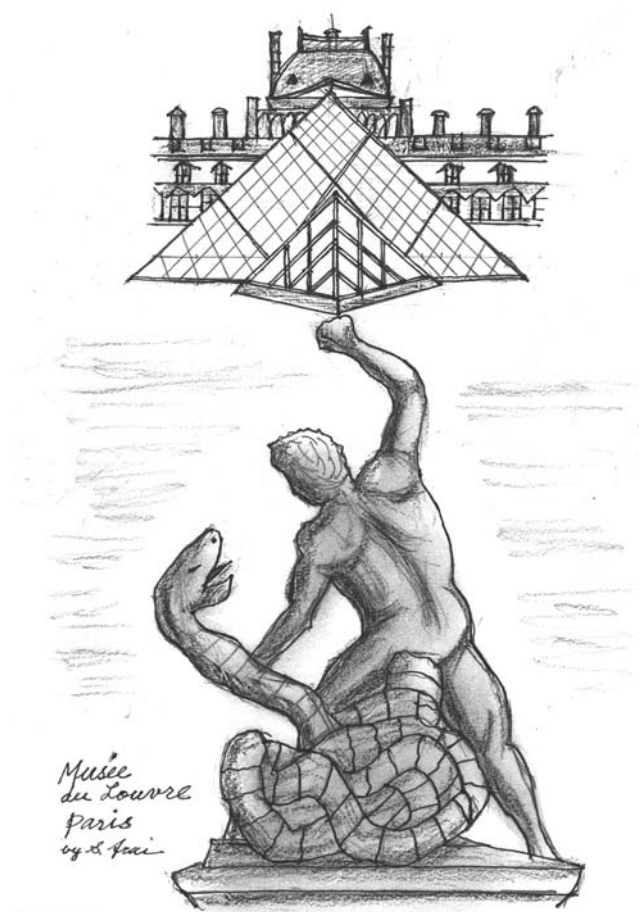


悠遊

第八号



企業OBペンクラブ

企業OBペンクラブ同人誌

《第八号》

目次

Ⅱ特集・IT革命の世紀Ⅱ

◇世界共通語雑感……………	西川 武彦	4
◇情報革命 その表と裏……………	岩崎洋一郎	6
◇IT文化人……………	北田 純一	7
◇IT革命に揺れ動く二十一世紀を迎えて……………	野村 嘉彦	9
◇二十一世紀とIT革命……………	新井 進	11
◇わが国に未来はあるのか……………	大野 晃	14
◇日本企業とIT革命……………	玉山 和夫	16
◇IT革命の世紀にふさわしい思想を……………	本田 克夫	18
◇誰が一番あわてるのか……………	金京 法一	19
◇ITとコカイン……………	村田孝四郎	22
◇IT革命の潮流……………	高橋 孝蔵	24
◇ITを道具に、個性的な生活へ……………	多田 修	27
◇IT時代の夜明け前……………	中川路 明	29
◇心の触れ合い……………	藤岡 豊	31
◇IT時代の受益と受難 米ドライブ旅行から……………	上原 利夫	34

Ⅱ自由テーマⅡ

◇IT先輩国、フィンランド……………	今村 亮	36
◇鰯(ごまめ) 横町余聞……………	吉井米三郎	38
◇情報通信技術の潮流と提言……………	杉浦 右蔵	41
◇IT革命と高齢化社会におけるビジネス・モデル……………	櫻井 清治	43
◇新世紀によせて 科学技術論考……………	上澤 準一	45
◇「IT革命の世紀」と言うけれど……………	衛藤甲子郎	47
◇IT革命は何を狙っているか……………	松浦 武弘	49
◇忠犬ハチ公のつぶやき……………	石川 正達	52
◇神も仏も靈魂も無い……………	榎本喜三郎	55
◇セカンド・ムーンと大絶滅……………	山辺 武磨	57
◇医療受給証(平成十二年)……………	正木 豊	59
◇市民権……………	岸本 義生	62
◇湖東三山……………	遠藤 俊也	64
◇中国への技術ボランティア……………	古畠 清巳	67
◇M君の生き甲斐……………	折戸 常司	69

◇シベリア鉄道と日本(三)……………	大塚 滋	72
◇アメリカの憲政―大統領選挙に思う…	岡 政昭	74
◇我がルーツは大湊……………	黒崎 昭二	76
◇名刺……………	都甲 昌利	78
◇熟年離婚の火種……………	新山章一郎	81
◇コーチがすべて……………	八木 大介	83
◇六十四年ぶりの金メダル……………	西島 力	85
◇小雨にけむる京都での集い……………	中洲 靖雄	87
◇交換日記……………	西川 永幹	90
◇ほおけた事件……………	藤井 長治	92
◇ロング・ロング・ステイ……………	荘司 忠志	94
◇私的文化的をつくる旅……………	宇野 存	97
◇年頭空談……………	水谷 汎	99
◇日本も森林不足の国……………	森田 茂	102
◇タクシー料金に物申す……………	亀井 弘次	103
◇自分史づくりの楽しみ方……………	竹内 京一	105
◇イタリアでの入院、手術の体験……………	今川 確郎	108
◇アイヌの貞操帯……………	斉藤 勁	110
◇瞬時に夫を語る妻百態……………	吉葉 芳彦	113
◇名曲「箱根の山」替歌の巻……………	関谷 裕彦	115
◇二〇〇〇年十二月二十六日……………	アブドルガーダー榮子	118

◇「共に生きる物語」を家族で作ろう…	芦刈 克	120
◇大至急ですよ……………	木下 洋介	123
◇ベル・バラの日々……………	児玉 忠雄	125
◇愛犬タロの死……………	中村 爽	128
◇十年ひと昔……………	刀祢館正久	130
◇二十世紀最後の年を振り返って……………	三宅 劭	132
◇葦の髄からアメリカのぞく……………	小島 博志	135
◇短歌会この一年……………	細川 謙三	138
◇ペン俳句この一年、その佳句鑑賞……………	平間真木子	141
◇深尾榮助さんを偲ぶ……………		145
学究肌の知識人(追悼)……………	岩崎洋一郎	145
感動を与えてくれた人(追悼)……………	宇野 存	146
◇企業OBペンクラブのあゆみ(年表・年史)……………	中村 爽	149
◇執筆者名簿……………		156
◇編集後記、事務局から……………		158
表紙の絵……………	新井 進	
カット……………	古井米三郎	

特集・ＩＴ革命の世紀

世界共通語雑感

西川 武彦

世界中がＩＴ革命に巻き込まれているといっても過言ではなからうが、このＩＴ、発祥地は米国、つまり英語圏である。歴史を振り返れば、ラテン語、フランス語、スペイン語等々、時代の覇者の言語がそれなりの支配力を持っていた。第二次大戦後、西側では英米両国の公用語である英語が、東側では当然の事ながらロシア語が支配力を誇示してきたが、東が西に屈し、米国を発祥の地とするＩＴ革命が本格化した今日、どうやら英語が世界共通語としての基盤を固めたようである。

コレボンも最近、大学ではＥメールで行われているが、そのほとんどが英語で書かれている。といっても、使われているのは堅苦しい教科書英語とは限らない。従来の

ビジネス英語の形式は限りなく簡略化されつつあるようだ。

例えば、パラグラフの最初は一文字分のスペースをあけて始めるべし、と教わっていたが、私が知る限りでも、その慣行はかなり崩れている。「敬具」に相当する「Sincerely」は、最後のパラグラフから二行空けて、中央から右寄りにタイプしていたし、発信人の名前はさらに数行下げて、右端に叩いていたが、今では、いずれも効率的にスペースを詰めて、左端に寄せて打っている。本家本元の英国人からのコレボン・メールがそのようなことから、それでよいのだろうと、こちらもそれに倣っている。簡略化であり、ＩＴ時代における様式の変化である。

文章自体も簡略化され、テレタイプ時代の通信用語紛いが頻繁に現れる。For your information (参考までに) はFYIと略され、By the way (ふつて) はBTW、As soon as possible (できるだけ早く) はASAPとなる。

You too は U2。なんともドライだが、日本語でも、どこぞをモミモミするというのをモミ2と表しているから、世界共通の今様簡略語法なのかもしれない。

英語といっても、シンガポール人がしゃべるのは、同国の高官が嘆いておられるように、English ならぬ Singlish であり、インド人のは “Indlish” とでもいえるのか。メールで使われる文章にもそれぞれの訛りが出て、音声飛び出してきそう。メールの登場で、コレボーンが口語調、会話調に変わっているのだろう。先日、知人が英国人宛に発信したメールの写しを頂戴したが、イラストレーター Irrasutator となっていた。先方からは预期的な返事が来ていたから、日本訛りと言おうか、「日本」弁が充分通じたのであろう。

航空会社でアジア・オセアニア地区の広報渉外マネージャーとして四年半、香港に駐在したことがある。各地からの広報担当者が集まった社内の国際会議で、ニュージーランドの S 君がオーストラリアから来た M 君に、君の国では I am going there today ぞ、I am going there to die ぞ発音する、と茶化していたが、何のことはない

我々の耳には全く同じに聞こえていた。

航空機の運行・整備、航空管制、予約・発券、手荷物の扱い等々、業務上のニーズから、グローバル化が進んでいた航空業界では、英語を語源にした世界共通の略語は三桁を数えたらうか。FYI、ASAP などは朝飯前である。航空マンとしてその習得に苦労したもののだが、IT 革命時代に入ってそれらの多くが IT 英語として使用されているのだから、苦あれば楽あり、である。

英語第二公用語論も巷を賑わす昨今だが、なに、心配することはない、海外とのやりとりで IT 用語を駆使してネット、メールに励むうちに、五年もすれば IT の最先進国となったジャパンの若きレディが “……maybe (かも)” を連発して、外国人と渡り合う日が来るであろうから。

(二十一世紀の初夢より)

情報革命 その表と裏

岩 崎 洋一郎

シドニー・オリンピックで日本女子が初めて陸上競技で金メダルに輝いた。その裏に、もう一つ世界新の金メダルがあった。超小型のチップを靴に組み込むことで、マラソンランナー一人一人の足跡を追っていたのである。数キロ毎に受信機を置き、ランナーが通過すると、自動的に本部にその旨が通報され、各人が今何処にいるのか正確にリアルタイムに把握されていた。

アメリカの雑誌を読むと、この技術の延長線上には、「カーナビ」ならぬ「人ナビ」が開発されつつあるらしい。つまり、自動車に積むのではなく、小型化して、人間一人一人があたかも個人用ナビ機械を携帯しているような機能を得る。そして、受信は音声で耳から聞くか、腕時計の画面か、または軽い折畳式のフィルム・スクリーンを広げて、衛星から送られてくる地図や情報を見ることが出来る。もちろん、位置を知らせるだけでなく、

ニュースやら各種の情報もその画面で読み取ることが可能となる模様。何処にいても自由にアクセス出来るので、アイモード電話などははや時代遅れとなる。

もつとも、シドニーでは、失敗もあった。選手の一人が倒れて靴が脱げてしまった。選手は慌てて靴をはきなおしたので、せっかく靴の裏につけてあったチップが取れてしまい、その選手の動向だけは記録されなかったという。もつと技術が進むと、そのチップは超小型になり、着脱自由な靴でなく人体そのものに埋め込むことが出来るようになる。その記事は予想する。動力源は人間の体温やその他の生物的な力を高度なバイオ技術で取り出して無限に作動できるようになり、電池などの消耗品は不要となる。幼児の迷子は根絶され、目の不自由な方にも大きな朗報となる。犯罪があったときには、無実な人は、アリバイをこのチップに記録された行動の履歴が難なく証明してくれる。

結構尽くめの礼賛記事を読むうちに、むらむらと猜疑心が頭をもたげてきた。ある個人の行動がすべて記録され、それが第三者または当局に送られるということは、

I T 文化人

北 田 純 一

果たして良いことなのであろうか。しかもそれが、本人の承諾も、いや自覚も無しに国・官僚などが知り得ることが、果たして良いこと、否、許されるべき行為か、大きな疑問となって心を揺さぶる。

脳裏に、昔、読んだオーウェルの「一九八四年」という空想小説が浮かんでくる。それは、国民が、ビッグブラザーなる国家機関に四六時中監視されて、自由もプライバシーも奪われてしまう空想独裁国家の話。確か、その小説では自由を求めて活動した主人公は、監視網を通じて自分の最大の弱点（鼠に対する恐怖）を握られ、そこを責められて屈服してしまう結末である。情報は力なり。国、当局、官僚に余り力を与えると、アイ・テイはアイデンティ・テイクト、人間の尊厳までも収奪されかねないと、心配になってきた。杞憂に終われば良いと願うばかりである。

（平成十二年十二月四日）

「おーい、横山くん、たいへんだ。とうとう大儲けできそうだ」

「へーっ、またいつもの誇大妄想じゃないの」

「今度は多分、大丈夫だ。なにしろ投資相手が実の息子だもの」

「なに、親子そろって妄想狂か。盾岡家の遺伝性体質だね」

「まー聞いてくれよ、横山くん。三年前に息子が独立したと言ったろう。あの時、泣く泣く五百万ほど出してやったんだ。そうしたらね、息子が当てたんだよ。それで株式を上場するっていうの。五百万が五百億に化けるんだよ」

「へーっ、キミの息子がねー。それでいったい何の会社やってんだい」

「ITだよ、ソフトだよ。アメリカの研究所と組んでね、

なんでも世界中の遺伝情報がコンピュータ処理してあって、依頼者の髪の毛一本あれば何でも分かるんだと。何時ごろどんな病気にかかるかなどは朝飯前、どんな事業をしたらどれぐらい成功するか、相性の良い結婚相手はどんなタイプで、現在は世界のどこでどうしているか、アプローチするにはどうすればよいか、全部分かってしまうんだ」

「なんだ、恋占いか、そんなもので株式相場だなんて、大風呂敷もいいところだ」

「馬鹿にするなよ。キミ、恋だけじゃないよ。ビジネス相手の頭の中身が読めるんだ。乗った方がよいか悪いか、髪の毛一本頂戴すればバッチリさ。ビジネスも成功疑いなしという寸法さ」

「そりゃー魔法だな。いくらITだといっても信じられない。いったいどんな仕掛けで分かるんだい」

「それは企業秘密だそうだよ。第一、聞いても難しくってわからないさ。ブラックボックスだよ。取得特許は申請中を含めて百八十、うち八十はビジネス・モデルというのだそうだ。コンサル料は企業の場合だと、一件一億。

恋占いや人生占い、疾病予告だけだったら一千万。それでも千客万来で、昨年の売り上げは三百億だったそうだが、今年は十か月目で一千億を突破したそうだ。それに、利益率はなんと八〇%、つまり純利益八百億、だって原価はないに等しいんだから」

「凄いな、でも、盾岡くん。そんなに何でも分かってしまつては人生、味も素っ気もないね。ところで、あなたの将来は分析してもらったの。あの可愛い子ちゃんとの一件はどうなるの」

「それがネ、余命はあと十年らしいよ。あの子のことか、うーん、この世の名残にもう一花と言いたところだが、心臓が悪いからネ、バイアグラは使用禁止なんだよ。それに、迂闊に結婚なんて言い出したら保険金殺人がこわいからネ」

「しかし、そのソフト、ほんとうとすると面白いネ。政治家なんかどうするだろうネ。何でも分かっちゃったら政争なんかなくなるらないかネ」

「日本の政治家なんてどうでもいいよ。それより、世界の指導者を分析したら二十一世紀が見通せるかも…」

「うん、国家の覇権争いより地球がどうなるかのほうが大問題だ。そのへんどうなんだい」

「そうだよ。横山くん、今ね、ソフトの開発中だそうだよ。あんまりファクターが多過ぎて難しいらしい。それにネ、思うんだが、そんなソフトが特許になるかネー」
「いやー、無理してるね。あんたの息子さん、調子に乗ってはしゃぎ過ぎだよ」

「おっしゃる通りだ。ボクも危ないと思うよ。いい加減に開発を止めたらどうだと言ってるんだが、若い者は聞こうとしない。困ったもんだ」。

明治維新のころには文明開化が大流行した。散切り頭を叩いてみたら文明開化の音がしたらしい。その文明開化を縮めると「文化」になる。半世紀たって戦後の復興期には「文化」が大流行した。文化人、文化国家、文化教室、文化住宅、文化鍋、文化包丁に文化鋏、とにかく頭に文化をつけた安物がむやみやたらと横行した。

そのまた半世紀後、奇しくも世紀の変わり目に、IT

が大流行しようとしている。呪文のようにITを唱えれば景気は回復し、日本国は名誉ある地位を保てるという。神の国の首相がIT国家の建設に政治生命をかけると張り切っている。

きつと、二十一世紀には、IT国家、IT教室、IT住宅、IT鍋、IT包丁にIT鋏がIT文化人の国にのさばることになるだろう。

(二〇〇〇・一一・七)

IT革命に揺れ動く二十一世紀を迎えて

野村 嘉彦

二十世紀の比較的早い時代、すなわち一九一七年に生まれた私はや八十三歳。

その大半を激動の世紀に生きてきた。二十世紀は小さまざまな戦争で多くの人命が失われた。環境も破壊された。わが国も建国以来初めての完全な敗戦を味わった。

現御神あきつみかみである天皇を戴いた神国は常に世界を支配する

不滅不敗の国であるとの基本理念に従って拡張政策を突き進んだ。そして果ては世界の強国を相手にした無謀な戦争をしかけた。その結果無残な完敗を喫した。

1 日本の敗戦―天皇の玉音放送。一九四五年八月十五日、天皇がポツダム宣言を受諾されて日本は連合国に降伏した。私は会社の事務所の一隅でこの玉音放送を聞いた。不敗の国が負けた。悔しい。何かしら涙がとめどもなく流れた。何のためか、何故かわからない。敗戦後日本は見事に再生してすばらしい近代国家となった。お陰で老人も福祉関係の充実によって余生を楽しむ余裕ができた。

2 新日本建設に関する詔書（いわゆる天皇の人間宣言）一九四六年一月一日、敗戦から半年のちにこの詔書が発表された。この詔書は天皇の言葉として我々日本人にとって重要なことが示されている。ここに採録する。

天皇は語る。『朕と爾等国民との間の紐帯は終始相互の信頼と敬愛とによりて結ばれ、単なる神話と伝説によりて生ぜるものに非ず。天皇を以て現御神とし、且日本

国民を以て他の民族に優越せる民族にして、延ひて世界を支配すべき運命を有すとの架空なる觀念に基くものにも非ず』見事な卓見である。その後日本は国民の努力もさることながら環境に恵まれて素晴らしい発展を遂げ、世界の平和に寄与した。多くの発展途上国の経済建設に協力して多大の感謝を受けてきた。

われわれ日本人はそれを自らの努力の成果と過信している恐れがある。一方、米国は二十世紀を支配して世界の国々をリードしてきた。だがまた間違いも犯した。米国はその間違いや負の部分をも二十世紀中に清算することに全力を傾倒している。その勇氣と努力には心から敬意を払いたい。

わが国はすでに天皇の人間宣言で国民の反省と将来進むべき道が明確に示された。これは当時として優れた見識であった。だが今日、日本人の誰もがこれを忘れている。したがって過去の間違いに対する公式の謝罪をしない。そののみならず特に近隣諸国と地域に対して戦前さながらの優越心を持ち続けているのは何ともはや情けない。果たしてこれで二十一世紀を生き抜けるのだろうか。

3 I T革命の二十一世紀

I T革命の進展はとどまるところを知らない。日本政府もI T革命の推進を国是とすることを宣言している。

我々の日常生活のありようも日々大きく変化進展している。グローバル化によってI T革命は国際的に発展し国際宇宙ステーションの開発、月や火星基地建設への挑戦など人類のエネルギーの爆発は大きく前進するだろう。

地球上では世界的規模のバリアフリー社会の建設が進められている。国家、民族、国境を超えた人類の勝利が期待されるのも二十一世紀であろう。

だが、一方ではヒトゲノムの発展はやがて人間の無限の思考と有限の肉体の間の矛盾にぶつかるとであろう。また人間支配の地球が天体の異変で、その存在自体が危ぶまれることも想像される。

われわれ老人は現在科学の進歩により戦前には考えも及ばなかった楽しい余生を過ごしている。有り難いことである。戦争の犠牲者に申し訳ないと思う。I T革命の二十一世紀は若い世代に任せて老人は引つ込むのが幸せかもしれない。

駄弁の多い生き過ぎた老人の寝言である。

(平成十二年十二月十日)

二十一世紀とI T革命

新井 進

(1) 二十世紀とI T技術の進歩

一七八一年にジェームス・ワットが蒸気機関を発明し第一次産業革命の端緒となった。それから四十年後に蒸気機関車が出現し、紡績工場をはじめ動力源を必要とする各種工場において、人力に代わり蒸気機関が産業の原動力になった。その後、四半世紀で第一次産業革命はほぼ完了し、先進国にその技術は行き渡ったといわれる。

第二次産業革命ともいわれるI T技術の進歩を年代的にみよう(第二次大戦中に発明された核技術開発を第二次産業革命と称するむきもあるが、ここではI T革命を第二次革命とする)。

一九四六年——世界で初めてコンピューター(ENIAC)が市場に出る。大型から小型、そして演算のスピードアップなどの改良。

一九七四年——掌の上にある小型パーソナル・コンピュータ(パソコン)が開発。

一九八〇年代——新たにインターネットが開発される。

最近発表された米国商務省の「デジタル・エコノミー二〇〇〇」によると、米国ではこの十年間でIT革命が定着し、二十一世紀にむけて力強く発展することが記されている。

その特徴を列記しよう。

(一) IT産業の有利性——コンピュータ製造技術とソフト開発の両面よりなるIT産業が他のどの産業より生産性が高くコストが低廉である。

(二) 一般家庭への普及——すべての産業にコンピュータやソフトを低廉かつ大量に供給することに成功し、それはさらに消費者である

一般家庭に普及していった。

(三) 高度多岐にわたる情報の提供——想像もしなかった広汎な情報を低価格で瞬時に提供した。

(四) 産業界の具体例——

※ 情報流通の主体である通信業

※ 商取引または金融取引のための金融業

※ 財貨物品の流通にかかる商業

※ 物流本体にかかわる運送業

※ その他

その結果、資本主義経済の宿命である好況と不況のサイクルから脱脚して十年以上の好景気を謳歌している。

(2) 二十一世紀の日本におけるIT革命

日本は米国のIT革命に数年遅れをとり、目下、森政権はその主要な政策の一つとして、日本版IT革命の推進を挙げている。二十一世紀を迎えて色々な分野でのIT革命が想定されるが、変貌する具体例を検証してみよう。

(a) モバイル・インターネットの実現

多種機能を備えた携帯電話を中心として、インターネットを通じて新しいビジネスチャンスが生まれてきた。近い将来、現金なしの自動決済機能、自分の居場所を瞬時に表示する位置情報、音楽をダウンロードする機能、自分の血圧心拍数を必要に応じてチェックするヘルスケア機能などが予想される。

(b) インターネット・バンキング

駅前支店や出張所を数多く所有する従来型の銀行から、家庭にしながら銀行口座を操作するネット銀行の出現。すでに住友銀行のWebダイレクト、三和銀行のECダイレクトがその例である。他行も追随するであろう。その他、他業種からの参入も想定される。すでにソニー、イトーヨーカ堂は計画を発表している。

(c) 株式、商品取引のオンライン・トレード

野村、大和、日興などの大手証券会社に対して、日本オンライン、DLJダイレクトなどが一切の営業店舗を持たずに、インターネットのみの取引を開始している。委託手数料の大幅割引、二十四時間営業時間の提供と相俟って、今後はその業容が拡大しよう。

(d) 委託手数料取引の消滅と新たな取引形態の出現
メーカーと問屋との間にはいり単なる中間マージンのみを稼いでいた商社取引は排除(商社無用論)。日産自動車部品が部品の供給に当たり、過去のしがらみを切りインターネットによる低価格、良品質の部品を国内外から求めた例は記憶に新しい。

(e) 放送と通信の融合化

放送のデジタル化によりTVやラジオ放送がインターネットとの連動により双方向サービスが提供される。一説によると、この分野での規模は一兆円を超えるといわれる。

(f) デジタル情報家電

従来家電と異なりすべての家庭内家電がインターネットに接続され一元的にネットワーク化される。すなわち家電がITと結ばれてデジタル情報家電となる。この分野で松下、ソニーは世界をリードして大変革を興す可能性を秘めている。

わが国に未来はあるのか

大野 暉

私は今、二十世紀も終わろうとする師走の街角に立っている。

東京でもやや場末と思っている秋葉原から岩本町へ向かって、神田川にかかる和泉橋の上から、街行く人の流れを眺めている。

背後の川には大きな鯉が群をなして泳いでいる。

まず目につくのは、歩きながらタバコをふかす人。吸殻が道端に散らばっている。電車から降りてほっと一息ついて、タバコを一服という人々だろうか。

のろのろと歩く人をよく見ると、耳に携帯電話をあてて何やら話している。中にはタバコを吸いながら電話で話している人もいる。

二〇〇〇年の夏、ドイツを旅した時、こんな体験をした。ペンションや民宿を観光案内所で予約して、大急ぎでその場所へ直行する。相手が留守で待たされるケース

が二度あった。後で考えると、予約を受けた人は携帯で話していて、家には居なかった。今までは、「これから出掛けるところだから、直ぐ来てくれ」ということになっていたが、今後は「三十分後に戻るから」という返事になる。しかし、観光案内所の人も私にそこまでのニュアンスは教えてくれない。そこで、戸口で待たされることになった。電話が通じれば、誰か人が家にいる、という考えが通じなくなった。電話は家にあるものではなくなった。これが私にとつての身近なIT革命である。

一方、インターネットの普及も私の生活を一変させた。もう五、六年も前のことだが、それまで三か月毎に送られてきた「新チューリッヒ新聞」の請求書が突然来なくなった。この新聞のホームページが開かれた直後であった。二、三日遅れて届く新聞を読むよりも、オンラインでその日のホームページを見て欲しいということだろう。

ドイツの代表的な週刊誌「シュピーゲル」はロイターと提携して毎日新しいニュースをホームページ上に流している。インターネットの世界では、いつの間にか月刊、

週刊、日刊といった雑誌や新聞の時間の垣根さえも取り払われようとしている。

情報が瞬時に世界を駆け巡る時代になった。

経済の世界も大きく変わっている。例えば為替相場は、我々が寝ている間にも、世界のどこかで、何かの新しい情報によって変動を続けている。今から振り返ると、日本経済のバブル崩壊後の停滞には、このIT革命が大きく影響しているように思われる。日本の失われた十年は、一九八九年のコメコン経済の崩壊と冷戦構造の終結に端を発している。当時日本は「もの作り大国」として、集中豪雨的な輸出政策によって、世界市場を席捲していた。この日本株式会社の攻勢に対抗するために、米国では、サンタフェ研究所が作られ、「複雑系」の研究が進められた。また、国家予算を傾斜配分してスーパーハイウェイが作られ、全米にインターネット網を張る準備が整えられた。IT革命を進めるためのソフトとハードの整備が政府と民間の協力で、同時進行の形で行われていた。

他方、日本はこの間何をしていたのか。

バブル崩壊の真只中にあった。そして「省あって国な

し」という縦割り行政の弊害が情報すらもゆがめていた。これは本当の話であるが、五、六年ほど前に建設省が派遣した訪米ミッションは「道路は整備されず、橋は老朽化している。米国経済は予想以上に弱体化している」といった趣旨の報告をしている。この削られた予算でスーパーハイウェイが作られていたが、建設省のミッションには見えない。むしろ「見る意志さえない」といった方が適切だろう。

最近の政府の政策を見ても、IT、ITと言いながら、整備新幹線に予算がつけられている。これは予算の傾斜配分ではなく、バラマキである。今や世界最悪といわれる財政をどう建て直すつもりなのか。

IT革命によって何が変わったのか。それは経済学を例にとると、均衡理論というネガティブフィードバックから、複雑系の理論、つまり自己組織的ダイナミズムというポジティブフィードバックの世界に大きく転換したことだろう。

分かり易い例を挙げると、大企業間的大型合併。精々一、二位までの企業しか生き残れない、というすさまじ

いまでの生存競争社会の出現である。「もの作り」の分野では、生産力の向上によって失業者が街にあふれるだろう。自己増殖型のウインドウズのようなソフトを作る能力のみが生き残る時代になる。なぜなら資源は有限で、サステイナブル・デベロップメント（持続可能な開発）のみが許される世紀が到来するからである。ソフトの開発には原材料は必要としない。それが人類の生き残る道である。

日本企業とIT革命

玉山 和夫

最近、家電各社がデジタル・テレビを売り出しているが、その宣伝の割には売り上げは上がっていないようである。今のところ価格が高いせいもあるが、画面が細かいハイビジョンが低調だったことなどを考えると、今後爆発的に売れるかどうか、予測することは難しい。

今後情報技術（IT）がどのように進歩し、どのように実用化されるかは未知の面も多く、しかも相互に関連することが多く、経営に何処まで影響するか判断することは極めて難しい。このことは今日の企業経営者に至難とも言える決断を要求しているのである。

情報関連などに特長ある技術を持っている製造業はITを取り入れ社内を合理化し需要動向にあう製品を出して行けば生き残れる可能性は高い。しかし、例えば総合商社のように企業間取引を主としている非製造業は、大変革を行わなければ生き残るのは難しいといえる。これからはIT革命の将来に深い洞察力がありかつ経営能力のある社長がいるかどうかで会社の将来が決まるのは当然である。

残念なことには日本の大会社には、専門家を遇するシステムがあまりなく、専門的なことばかりやっていると偉くなれなかったから、経営者にエキスパートが極めて少ない。大会社の社長に、人事畑の出身者が多いことに見られるように、社内政治に長けたジェネラリストが多く、IT時代に適した人材は少ないようである。

現状では取締役の多くは旧体制において成績を上げ昇進したが、ITについては素人である。このような人が集まって意思決定しても効率がよくなく、えてして自己の過去の成功例に固執したり、優秀なトップがいたとしてもその足を引っ張ることにのみなりかねない。優秀な人を社長にするには、社内から人材を発掘するか、あるいは社外からリクルートするほかない。しかし、社内から登用されて社長になっても、実力会長が強力に支持するのでなければ、今までの上司などをリストラして思いきった変革を行うのは、しがらみの多い会社では容易なことではない。社外から専門家としてすぐれた人を採用しようとしても、日本ではこのような人材は少なく、しかもその少ない人材は外資系会社に高給で引き抜かれていることも多い。このように日本の非製造業の大企業がIT時代に生き残るのは容易ではない。

小企業は身が軽いので、経営者が動向に敏感であり決断が早ければ生き残る可能性はある。しかし、将来の判らない世界にあつて良い仕事をするのは難しい。

これに加え、学問技術の進歩は著しいものがあり、I

T革命に続いて次々と大革命が起こる可能性が高い。例えば、すでに日本でもごく一部に成果をあげていることだが、人間個人のES細胞などから希望する臓器を作り、これを悪い臓器と交換することが近い将来に可能らしい。そうだとすると、心臓病やがんで死ぬ人は無くなり、人間の平均寿命が百二十歳になるのも夢ではない。革命的と言うべき高齢化社会の到来である。こうなると、わずかの勤労世代が数倍の高齢者を扶養することは到底出来なくなる。二十年以内にこのように社会的な大変革が次々と起こる可能性も充分ある。その時のビジネスのあり方はどうなるであろうか。経営者は将来の判らない世界にあつてもなお、企業が生き延びるための決断を迫られるのである。

このような先の見えない社会において経営者が夢として求めるものは、高度の知能・判断力を持った経営ガイドシステム（超高度電算系）である。株式投資において二、三の制限があつても損をしないガイドシステムが出来ているといわれるが、会社経営に對しても、莫大な労力と時間をかければ同様なシステムが構築される可能性

がある。

例えば日本の強力な組織が全力を傾注してこのようなシステムを完成させれば、このサービスを受ける会社の経営者は予想しない革命が進行しても何とか利益を確保できるであろう。今後は高度の経営ガイドなしには個人の判断・カンだけで企業を順当に経営することは不可能といえよう。

IT革命の世紀にふさわしい思想を

本田 克夫

電話会社が潰れそうだ——と昨年暮れ、テレビが解説していた。情報社会の花形と思っていた電話会社が何故？と一瞬、耳を疑ったが、IP（インターネット電話）の拡大がその原因らしい。電話会社は「石炭産業」に転落する運命とも言っていた。あらためてIT革命のすごさを知る思いがした。

二十一世紀は、IT革命の世紀といわれる。しかし、まだ新世紀の入口に立ったばかり。これからITの技術やサービスがどれくらい進歩し、社会にどんな大変革を与えるのか、まだ誰も想像がつかない。

いまは、インターネットによる企業や個人のさまざまな利用が取り沙汰されているが、今後は社会の情報化が急速に進むだろう。たとえば、高速道路の料金自動徴収システムとか一般道路の車両安全運行システム、それに医療の遠隔診断などがお目見えすることだろう。

確かに便利な世の中になるようだが、いいことばかりあるわけではない。

ITの解説書を読むと、ドッグイヤーだの、デジタル・デバイドといった言葉が出てくる。ドッグイヤーとは犬の寿命のように、ビジネスモデルの寿命が非常に短いという意味。IT時代の企業が絶えずモデルチェンジをしたり、M&Aを繰り返し、生き残りを図らなければならないことをいう。企業にとってもサラリーマンにとっても非常に不安定な世界である。

デジタル・デバイドは情報格差のことで、IT情報の

有無で貧富の差が拡大するという。情報を巧く利用して大金持ちになる人が少数いる半面、大多数は雇用不安定でギリギリの生活しかできない二極化した社会になるという見方もある。階級社会への逆戻りである。

さらにITは、国家にも影響を与える。ITは世界中の垣根を取り払ってしまうから、国境を越えた取引がひんぱんに展開される。その結果、一つの国で課税するのが難しいケースが現に出始めている。それは徴税権を持つ主権国家の足元を揺るがしかねない事態である。

このように見てくると、二十一世紀の生活が、IT革命によって便利になる半面、政治・経済・社会の全般にわたって不安定になり、混乱が続けることが予想される。

フランスのアラン・マンクという学者は、国民国家はもう限界に來たとして、「二十一世紀は新たな中世の幕開け」と言っているそうだし、日本のある著名な経済人によると「二十一世紀はアメリカ経済とイスラム・テロの戦い」と物騒な予言をしている。まさかと思う半面、文明の衝突は避けられないかもしれない……という悲觀的な気がしないでもない。

それは、いま時代の転換点に差ししかっているのに、新時代に対応する規範や思想が、まだ生み出されていないからに違いない。科学の発達に精神文化が追いつけない悩みでもある。

IT革命の世紀にふさわしい思想よ、出でよ——と心から願わずにいられない。

誰が一番あわてるのか

金 京 法 一

大方の懸念もどこ吹く風とばかり、森首相は就任早々“IT革命”を連発し、当の本人がどれほど理解しているかはなほだ怪しいが、これが一種の流行語となり、時流に遅れてはならじと焦る向きがある反面、これにちやっかり便乗して一儲けを企む輩等（外にろくなことが

見当たらずぬせいもあつてか）世はまさにIT革命一色の観がある。誠に結構なことではある。しかし、人類が無限に進歩発展すると言う神話は科学・技術の予想外の発展に幻惑され、ヘーゲルの言う人間精神の弁証法的発展理論に触発された近代人が抱いた幻想であつて、今や人類が無限に進歩発展して限りなく神に近づくなどと信じる向きはあるまい。つまり人類は変化するが進歩はしないのである。

一つを得れば一つを失うのがこの世の公理ではないかというのが筆者のドグマである。IT革命で未来はバラ色との論説が多いなかで、その負の面を強調するつむじ曲がりもちらはら散見される。筆者としてもせつかくの機会なので、少数意見の後者のグループに便乗して床屋談義を試みてみたい。

およそ五万年前に現在の人類が地球上に登場したといわれるが、人類が他の動物と決定的に異なる点が三つある。すなわち二本足で立ち、体毛が薄く、言葉を使用することである。つまり人類は極めてひ弱な存在であるが、

両手で自然物を加工し、言葉（共通の記号）で他とのコミュニケーションを図ることによって社会を作り、苛酷な自然環境を克服して今や地球の覇者になったわけである。

社会的動物といわれる人間は種々な形態の国家なるものを作り出したが、国家にとつてコミュニケーション手段は何時の時代においても最重要項目であつた。文字を知っている神官や官僚が支配した古代エジプトの奴隸制国家、印刷術の登場で聖職者以外の大衆も聖書に接するようになり教会で行われる説教の欺瞞性が暴露されて宗教改革に至つたこと、その他ナチスによる芸術統制、ソ連におけるイデオロギー教育、毛沢東語録の朗読などコミュニケーションが演じた役割は枚挙に暇が無い。新しいコミュニケーションの手段が登場する度に国家はあらゆる術策を弄してこれが管理統制を図つて来た。新聞、書籍の検閲は何れの国何れの時代においても日常茶飯事であつたし、郵便、電話電信やラジオ、テレビも公共性の名目でまず国家独占で始まり、その後あらゆる規制付きで一般民間に開放されているのが現実である。

現在多くの国で言論の自由が法的に保証され、また民間のマスメディアは知る権利をしきりと主張するが、知らせる義務となると、社会秩序や社会道徳の維持とか、私権の擁護とかで何かと歯切れが悪い。端的にいつてしまえば、天下のマスメディアといえども国家統制の網に掬め捕られ、身動きが出来ないのが実情ではあるまいか。毒にも薬にもならないテレビのワイドショーに勢力を注ぐか、政府発表をそのまま報道するかということになるのであろう。

さてIT革命なるものの最も革命的な分野は恐らくインターネットの情報ウェブであろう。世界中の端末保有者が受信者であると同時に発信者であるという、まさに前代未聞の世界が広がるかとしている。そのコミュニケーション性はこれまで登場した書籍、新聞、電信、電話、ラジオ、テレビの比ではない。かかる手段を、いったん手にした以上人類はそれを絶対に手放さぬばかりか、あらゆる知恵を絞って発展させるであろう。すべての政府当局者は表向きにはIT革命の到来でいかに他国

との競争に勝ち抜くか、あらゆる方策を講じると称しているが、それだけであろうか。どんどん変化して行くウェブが引き起こす予想不可能に近い状態に対処する自信があるであろうか。恐らく考えたくないというのが本音ではあるまいか。

近代の国民国家が生まれたとき、国民はその経済活動や安全の保護を国家に求め、その対価として納税、兵役、教育の義務を果たすという契約関係があったはずである。契約である以上そこには等価交換の原則が貫かれる筈であろう。また本来いずれの国家の国民になるかは原則論として個人の自由であつたはずである。しかるに国家成立と同時に国家を生活の場とする政治家、官僚、軍人、教師その他諸々の非生産者が生み出され、その割合は増えることはあつても減ることは極めてまれである。国民の負担割合は増えることはあつても減ることは皆無に近い。ほとんどの国民は国家に対するバランスシートは債務超過、損益計算書は万年赤字との実感を持つてゐるであらう。

では好きな国にどの程度移住可能であろうか。答えは

ITとコカイン

村田 孝四郎

ネガティブではなからうか。こういう状態のところに、世にいうIT革命なるものが登場するのである。国民は玉石混交ではあるが、あらゆる生情報に接することが可能となり、また自ら無数の人々に語りかけることが可能となる。国家はとかくよらしむべし知らしむべからず的発想を持ちたがるが、これからは一歩対応を誤ると、国民の国家軽視や国家不信を招きかねない。徐々にはあるが、国家対国民という古くて新しい問題が登場し深刻さを増すであらう。IT革命の時代の国家の役割やありようが国家にとって極めて重要な検討課題となるであらう。浮かれている時ではないのである。

森喜郎（しんきろう）さん貴方が見ている蜃気楼（しんきろう）が消える前によく確かめておきましょう、日本国内閣総理大臣の椅子がそこにはまだあるでしょうか。

世の中、IT一色である。異常というほかない。便利なものは必ずマイナス面を伴う。しかも、便利さの度合いが大きければ大きいほどマイナス面も大きくなる。

もし、ダイナマイトの発明がなかったら、爆弾で多くの命が奪われることはなかっただろう。原子力が開発されなかったら、広島、長崎やチェルノブイリの惨劇はなかっただろう。自動車があれば、自然破壊も環境汚染も騒音公害も交通事故死もなかっただろう。テレビがなければ、一億総白痴化も少年の重大犯罪もなかっただろう。あらゆる文明の利器はマイナス面を予想して予め十全の対策を講じておかなければ、人類は大きな損失を蒙ることになるだろう。

携帯電話、遺伝子操作、人工臓器、クローンなどが今後人類にどんな害悪をもたらすか、門外漢には想像もできないだけに却って空恐ろしい。便利なものは算盤、タ

イブ、自転車、時計、電話ぐらいまでよかったのではあるまいか。そして、余暇には書や絵画や詩作を楽しみ、花鳥草木を愛で、音楽やスポーツに親しむ。交友を大切に、暖かな家庭を築く。平和に生き子孫を残して平和に死んでいく。それで十分なのではないか。IT、ITと騒ぎ立てる必要がどこにあるのか。

現今のIT狂騒曲を聞いていると、私はコカインの歴史を思い出す。今から百四十五年前、ドイツの科学者がコカの葉からコカインの抽出に成功し、コカインは夢の薬ともてはやされた。局所麻酔剤、鎮痛剤、血管収縮剤としてあらゆる外科手術に利用されただけでなく、喘息、消化不良、抑鬱症、アルコール中毒、モルヒネ中毒などの治療にも威力を発揮し、多くの医師から熱狂的に迎えられる。そればかりか、上流階級ではワインに入れて「シャンペン・ドラッグ」として愛飲され、一般にも、コカインとカフェインを含む飲み物が頭痛薬、気付け薬として広く使用された。この飲み物が今日のソフトドリンクの始祖となったコココーラである。当時これは健康飲料として空前の人気を博した。ITの広範な利便性の

なんとコカインに似ていることか。

米二十五代大統領マッキンリーから始まって、ローマ法王レオ十三世、発明王エジソン、精神分析の父フロイトに至るまで、多くの指導者、文化人、学者がコカインを愛用し、こぞってその利点を喧伝した。森首相、堺屋経企庁長官らがITを喧伝している様は、これになんと似ていることか。

ところが、コカインはとんでもない中毒性を持っていたのである。安易にコカインを使用したため、中毒者が急増し、病氣、死亡、犯罪が激増したのである。このため、二十世紀に入ると、コカインの使用は法律で厳しく禁じられ、阿片と同一視されて、これを密取引する国は「犯罪国」とされるまでに至った。だが、いったん広まってしまった薬物中毒は簡単には根絶できない。かくして、アメリカはいまその対策で大苦戦を強いられているのである。

さて、ITのマイナス面としては、どんなことが考えられるだろうか。電磁波による脳への障害、目に対する悪影響、人間の孤立化、運動不足、新種の犯罪。いやい

IT革命の潮流

高橋 孝蔵

や、もつと恐ろしいことがある。ITによるグローバル化で世界が均一同質の社会になってしまうことである。しかも、そのような社会はアメリカに牛耳られること必至である。同質化した社会はただ一つの原因でもろくも崩れ去ってしまうだろう。世界にはいくつかの異なる文明社会があったほうがいい。IT社会だけでなく、算盤社会や自転車社会があったほうがいい。IT社会が崩れ去っても他の社会が生き残る可能性があるからだ。

世界中のみんながITで人に先んじようと、あるいは一儲けしようと、一日中部屋に閉じこもってパソコンをにらみながら一人黙々とキーボードを叩いている姿は、想像するだに身の毛がよだつ。そんな社会はもう半分崩れ去ったも同然である。

はてさて、そうはいうものの、その私自身がIT中毒にはまりそう。南無阿弥陀仏。

IT革命の進行は日々に実感されるようにはなったが、全貌はとも判るものではない。

しかし、私たちがどんな時代にいるのかは業界のオピニオンリーダーがたとえ話で語ってくれる。米ゼロックス・パロアルト研究所の学者マーク・ステフィックは、現在の激しい技術革新と変化の時代をカンブリア紀になぞらえる。五億年前のカンブリア紀に、今では想像もできないような奇妙きつてつな「種」も含め、多くは絶滅した無数の生物が爆発的に登場した。それと同じように、インターネット・カンブリア紀ではハードやソフトの新開発や新しい事業プロセスやビジネスモデルが次から次へと考え出される。だが果たして、幾つの「種」が進化を続け、生き残るのだろうか。

そうしたIT革命にも幾つかの潮流が見え始めた。こ

ここでは、先発米国の圧倒的な優位性や「個」の時代到来の二つの潮流を取り上げる。

もし、ローマ帝国アウグストゥス初代皇帝がタイムマシンに乗り、現代に現れたとするなら、ネット経済・社会での米国の強さに舌を巻いたに違いない。

先ず「全ての幹線道路は米国に通ず」と聴かされただろう。データはいささか古いが、米調査会社の九七年末の統計によれば、インターネットの頭脳であるホストコンピュータの設置台数は米国千七百二十四万台。全世界の五八％を占める。カナダ、独、英、日本は米のそれぞれ十分の一以下。大容量のネット用国際回線は大量の頭脳を抱える米国を中心に結ばれる。つまり各国からの幹線道路は米国に集中する。その結果、日韓の連絡は直結せず、日本から米国、米国から韓国へという流れにさえなる。英独間も然り。

さらに英語は地球語でもある。ウェブサイトの八〇％が英語を使用。国境を越える郵便やテレックス、電報の四分の三、技術・科学分野の定期刊行物の半分が英語で書かれている。

アウグストゥス大帝時代、富裕階級に最も人気があった留学先はギリシャ・ロードス島である。大帝の養父ジュリアス・シーザーも、知識人キケロも、シーザー暗殺者のブルータスも等しくロードス島で教育を受けた。現代の留学先は米国に集まる。米国では多数のノーベル受賞者（科学部門では四〇％以上、経済部門では六五％以上）が輩出し、IT先進国として、世界各国から留学生を惹き付けている。彼らが帰国し、母国で枢要な地位を占めることにでもなれば、米国の影響力が一層強まる。

海外企業も知識労働者も米国に足が向く。九八年度の諸外国の対米直接投資は米国GDP（国内総生産）の八・六％に相当する。九七年度の外資系企業の生産高はGDPの約六％に達する。さらには、企業の誘致だけでなく、IT熟練労働者を確保するため、九九年から二〇〇一年まで非移民ビザを大幅に増やした。日本と比較するとその差は歴然たるものがある。九八年度諸外国の日本への直接投資はGDPの〇・二七％、外資系企業の生産高のGDPに占める割合は〇・六％。

米国にはもう一つ強力な武器がある。アイデアを含め

た事業手法そのものに権利を認めるビジネスモデル特許。先発の企業が事業アイデアの特許を続々と取得し、後発企業を押さえれば、その弊害は計り知れないものがある。日本や欧州の企業がこれからのし上がろうとするとき、米企業によるビジネス特許で頭を押さえられ、多額のライセンス料を払わされ、米企業の実質的支配下に入るか懸念が強い。

こうしたことに加え、大半の国でマーケットシェア八〇%を超えるハリウッド映画やマクドナルドをはじめとするファーストフードなどの米国文化の浸透がある。統治体制作りに苦心したアウグストゥス帝から見れば、これはパクス・アメリカーナと呼べるだろう。

ネット時代では「個」の創造性や独自性が価値の源になる。米国株式時価総額一位を争うマイクロソフトとシスコ・システムズ、それからヤフー、eベイ、デル・コンピュータなど錚々たるIT企業は、創業者の創意が推進力となり、躍進してきた。

ネット社会では「個」が消費者の立場においても力を

発揮する。逆オークションを掛ける。ネット上で同じ商品を注文する仲間を集め、メーカーに数量割引をさせる。さらには、希望する仕様で生産させることも可能だ。また、東芝ビデオデッキ事件では、東芝担当者の暴言をホームページに公開し、六〇〇万件以上のアクセスを背景に一消費者が東芝副社長に陳謝させた。個人でも大組織に立ち向かえる。

ネット上では、世界中から容易に同好の士を集めることが出来る。一九九一年にわずか三人でスタートした地雷禁止キャンペーンはネットの力を借り、ついには五十カ国の非政府組織を動かし、対人地雷全面禁止条約を発効させ、ノーベル平和賞を獲得するに至った。

IT革命を理解するためにも大きな潮流をもっと読みとりたいものだが、未来学者アルヴィン・トフラーなどは革命は始まったばかり、今後の展開は全く予測できないとしている。

I Tを道具に、個性的な生活へ

多田 修

二十世紀はペンクラブのホームページ作りで暮れました。二十一世紀は元旦の朝、悠遊の原稿が真っ白いのに驚いて目が覚めました。しかし、I Tが知的生産性をあげてくれるから締め切りに間に合うでしょう。I T革命のイメージに相応しい年越しでした。

ホームページには、

「常識」と言い伝えられているモノの中には、時代のキャッチ・フレーズに反応して固定観念が生まれ、パラダイムになって居残り、やがて神話のように消え去る運命のモノも多いようです。

そのような神話は、時代の変化を遅らせてしまうマイナスの部分があるので注意しなければなりません。バブル経済のときも、後になって気付いてみると、たくさんの神話があったらしく、バブルが弾けてから『あれは神話だった』といわれても、文字通り『後の祭り』でしか

なかった覚えがあります。

これから、いたずらものの神話探しに焦点を当てて、少し視点を変えてもう一度見直してみたら、今までと別な明るい将来が生まれてくるかもしれません」と書きました。

話は少しそれますが、週刊誌を見ているとソツがないというのでしょうか。ある話題を往復二度利用して記事にしています。安易に二倍稼ぐうまい手口に違いありません。もてはやされたI T革命も、少し経つとI Tバブルと決め付けられています。いまでは、I Tはすべてバブルのように受け取れる記事も多いようです。

何事にも、光の部分と影の部分があるものです。しかし、初めは意図して光の部分だけを強調し、十分アクセントをつけてから、後になって影だけをクローズアップしてコントラストをつけているように見えます。この時間差が社会に及ぼすマイナスは見逃せません。初めからプラスとマイナスの両面を分析して比較する親切な解説が欲しいと感じています。

バブル経済のときも、始まったときからマイナス面を

比較対照して強調すれば、バブルはずっと小さい浪で治まったでしょう。資産デフレも起きずに済んだかもしれません。しかし、それでは記事は小さく扱われるので、マスコミから見れば好ましくありません。

情報公開とは、いいことも悪いことも、時間差をつけずに公開することだと思えます。ここでは、デジタル・デバイドについて考えてみようと思います。

市場メカニズムが発達していれば、買い手が市場の主導権を握ることは明らかです。お金を出す側が買うかどうか意志を決定するからです。

しかし、今日まで規制というベールをかけて市場の情報を曖昧にしか見せず、薬害エイズの問題のように犠牲者を多く出した例もあります。

その記憶が喉もとを過ぎないうちに、市場メカニズムに疑問の声がしきりです。市場の影の部分を恐れる余り、規制が市場を目隠しするようなことは許されません。市場に透明性がましてくると、IT革命もずいぶん素直に進みだすことでしょう。

その一つとして、コンピュータの素人がパソコンやパ

ソコンを中に仕込んだ家電製品を使う時代がきます。そうなると、コンピュータを知らないと損をするのと勘違いして、デジタル・デバイドという言葉が一人歩きしています。

市場には、コンピュータを知らない人があふれています。その人たちに買ってもらうには、売り手はどんな工夫をするでしょうか。売り手は、コンピュータを知らない人でも手軽に使える便利なものにするに違いありません。

小説作家は小説を書く専門家であっても、コンピュータの専門家ではありません。電子出版に必要なソフトのメーカーは、作家が使えないものを制作しても売れません。

このように考えてくると、視点さえ変えればデジタル・デバイドを気にする必要のない明るいIT革命が見えてくると思います。

市場メカニズムは、買い手の望む方向に、売り手を誘う強い力を持っています。買い手の困る方向のデジタル・デバイドが一人歩きして進むはずはありません。素

人が使い出すと、市場に大きい変化が現れます。買い手からくる質問や苦情が殺到して市場全体の改善が急激に進みます。

これからは便利で器用なITを道具に使って、個性を活かせる世紀になると思います。

IT時代の夜明け前

中川路 明

“タッチパネル”——ご存知だろうか。

銀行で現金を出し入れたり、駅で切符を買ったりするときに、画面を直接指で触れて金額などを操作する器械である。透明で目には見えないが、画面に重ねて付いているのが“タッチパネル”で、私たちが一九八一年日本ではじめて作った。いまや、コンビニでも、図書館でも街中で使われている。

私の会社生活の後半生は“人真似をしないこと”をモ

ットーにした新製品開発に終始した。当時、アメリカで見た軍用品にヒントを得て、研究所であの手この手と徹夜に近い工夫を繰り返しながら、透明導電フィルムを組み合わせてタッチパネルの手作り見本を仕上げた。元気な若者を集め、電気メーカーの扉を叩いて回る毎日だった。パソコンショーでピンクの法被を着せて漫才で宣伝した。古風な会社内では響きを買った。

当たり前のことだが、だれも作っていなかった品物には客がいなかった。しかも化学会社の作った電気部品に、電気会社は見向きもしない。自分で画面を直接見て押すのだから間違いがない。その特長が認められて、二年後に現金出入機(ATM)メーカーと話が進んだ。

「ATM最大メーカーとしてトラブルは困る。どう保証するか」と、問い詰められた。

「機器全体としての保証は貴方の責任だ。当社のスイッチ機構は保証する」と、言い切った。携帯パソコンの開発に、フランスのベンチャーのヒッピーたちが、私たちの製品を一年以上連続使用している実績を信じた。

ATMの採用で信頼性が認められると、だんだんと使

われるようになった。それにつれて、安い値段で真似をする者が出てきて、値を崩すからほとんど儲からない。

本来の狙いは、コンピュータの画面に直接入力することだった。日本人の不慣れなキーボードが要らないし、だれでも、どこでも簡単に使えると期待した。ところが日本のパソコンがちつとも伸びない。開発を始めて六年目の一九八七年、当時コンピュータ技術者を自負する連中がタッチパネルは将来性がないと反対し、会社は儲からない開発の中止を決めた。社長だけが応援してくれて別会社に分離してもらい、命が繋がった。

そのうちに、シリコンバレーのアメリカの友人が、ガラス一枚だけのタッチパネルの新技术を發明したから買わないかと言ってきた。彼の起こしたガレージカンパニーの發明した軽い材料は、かつてソ連に立ち遅れていた人工衛星の開発で、アメリカに逆転をもたらした。ほかにも素晴らしい技術を持っており、訪米のたびに彼らと付き合っていたのだ。

当時のベンチャー企業の常として、埒外な高額を要求してきた。直ちに断る一方、逆に我々の優れた製品化技

術を応用して、日本で共同開発しないかともちかける。半年間の厳しい交渉の末、一九八九年共同出資開発会社の設立を決めた。先方のオーナーは、人間尊重を唱えている日本人的な男で、よく気が合った。従業員へのボナスは、ストックオプションを与えていた。しかし一番重要視しているのは、年二回の社内祭りという。ぜひ見に来いと誘われた。

当日は従業員家族に会社全体を開放し、玉ころがし、玉入れ、玉蹴り競争と日本の町内運動会と全く変わらない行事に参加させる。仮装行列が練り歩き、屋台は食べ放題ですべて無料である。オーナーも、社長もピエロ姿で陽気に全員と交歓していた。

新会社の創立パーティーでオーナーが、「我々の新会社は三年で利益を出そう。そのときは、ナパ・バレーでカリフォルニア・ワインの呑み放題のパーティーをやるう」と約束した。サンフランシスコの近郊にあるナパ・バレーは、入植した日本人がブドウとブドウ酒の事業化に成功した町である。

「ナパとはその地の原住民のことをいうが、日本人が長

心の触れ合い

藤岡 豊

い苦勞の間野菜で生活を凌いだから、葉っ葉バレーと呼ばれたとも言われている」と、彼はその日本人たちよりもっと早く儲けようと発破を掛けた。

その後も日本のパソコン時代の夜明けが遅れ、タッチパネル共同事業の利益が出たのは五年後であった。そのときオーナーはすでに引退しており、楽しみにしていたワインは飲めなかった。しかし、はじめはすしにも、刺し身にも身震いしていた先方の社長は大の日本食ファンになり、足繁く来訪した技術部長は息子を日本に留学させ、ともに来日を楽しむようになった。遅くまで仕事をしたあと、ワインの代わりにサケを飲み交わした。マルチメディア・ブームで、数年前から日本でもようやくパソコンが売れはじめ、十数億円ずつ溜まった開発会社の赤字と借金は二年で消し飛んだ。太平洋の東西から、現役の全員がグアム島に集まり、世界ナンバーワンとなった事業を祝ったのは、私が引退した後だった。

(二〇〇〇・一一・三二)

今年もクリスマスカードを何通か受け取った。その中に、毎年欠かさず送ってくれるリチャードからの大きなカードがあった。知り合ってから二十三年にもなろうとしているが、サンフランシスコで結ばれた彼との絆が損なわれることはない。

その頃現地で、私はある大変なことに巻き込まれていた。日本の某大手鉱山会社、その役員のお嬢さんの行方を探してほしい、との依頼が舞い込んだのである。

このお嬢さんは夏休みの間だけ、シスコのサマースクールに一か月ほど短期入学していた。ところが終わっても日本へ帰ってこない、住んでいたアパートにもいないという。その役員は個人的なことなので表に出せない。そこで私の本社の、ある社員と相談したところ、シスコに友人がいるから頼んでみよう、ということになったの

が経緯である。内密ということなので私は会社には話わけにもいかず、やむなく週末とか昼の休み、あるいは夜を利用して探すしかなかった。その学校やアパートなどを手始めに調べてみたが、手掛かりは全く掴めない。遂方にくれた私はある日リチャードにこれを打ち明けたところ、よし俺が見つけてやる、任しとけ、と言って行動を開始した。何をどうやって調べたか知るよしもないが、大変な作業であったのは想像に難くない。彼は当時五十歳近くの中年で、あるフェリーの会社に籍を置いており、それほど時間的余裕があったとは思えない。私も余り期待はしていなかった。

ところが十日余りが過ぎた頃、驚いたことにリチャードは彼女を見付け出したのである。そして早速私と会う手筈を整えてくれた。彼女はほとんど何も語らなかつたが、日本には帰りたくない面持ち。私は懸命に口説いて、やっと帰国に同意させるまでに漕ぎつけた。すぐに父親が日本から迎えにやってきた。私に頭を下げて礼を言われたが、実際に探し出してくれたのはリチャードなので、面映い思いをしたのを覚えている。それ以来、私とリチ

ャードとの関係は、さらに親密の度を加えることとなった。仕事上の関係はなかつたが、引っぱりだしてはバーボンを呑み、遅くまで話し込んだものである。太平洋の両側にいて、今ではクリスマスカードを交わすに留まっではいるが、二人の友情は今も変わることはない。

彼は生まれた時からシリコンバレーにほど近い街に住んでいた。今では通信技術の最先端を走っているシリコンバレーだが、リチャードの子供の頃は果樹園の多い、自然に恵まれた美しい街だったそうである。彼によれば、スタンフォード大学の学生二人が、自宅のガレージでコンピュータの会社を創り出し、これがヒューレット・パッカーとなる会社になった。そしてこれがきっかけとなって、シリコンバレーがIT革命の発祥の地になったという。

しかし自宅の環境を変えられたせいかどうかは知らないが、リチャードはコンピュータに対する抵抗感が強かった。彼によれば、技術は人間を互いに孤立させるといふ。つまりパソコンにしろケータイにしろ、コミュニケーションの手段を進歩させる半面、実際には人間同士

の接触が減ってしまうというのである。

「人と人との心や人間と世界の繋がりがなくなるとい
のは、なんと悲しいことだろう」と彼はこぼしていたが、
私も全く同感である。この日本でも、IT革命は着実に
進行している。早い話が今の若者たちは、ケータイを耳
に押しつけて街を歩くのが当たり前となっている。とこ
ろが話に夢中になって周りのことには目が向かない。大
声を出して他人の迷惑など考えもしない。こちらが道を
譲らなければ、突き当たってしまう。他人の存在を視野
から取り除いてしまっているのである。

確かに便利な世のなかになったのは間違いないが、そ
の半面で礼儀やマナー、倫理や道徳などがどこかに押し
やられてしまったようである。これからも世界各国で高
度な技術を追求し続けていくことだろう。しかしその余
り、人間の心にある美しいものが破壊されていくのは、
実に悲しいことである。二十一世紀に入って数十年後に、
華やかな情報技術を駆使した社会が実現したとしても、
本当に豊かな社会は訪れないに違いない。

二十世紀の情報先端技術といえど、世界に先駆けてト

ップを走ったのがアメリカである。そのアメリカで世紀
最後の大統領選挙が行われた。ところが決戦の州フロリ
ダで、人間の手作業を機械より優先させるという面白い
事態が生じたのである。管理委員たちが、投票用紙の一
枚一枚を電灯にかざして調べている姿を見て、思わず頬
をゆるめたのは私だけではないだろう。

思えば年賀状の宛て先が手書きでなされ、長いこと逢
っていない友人との気持ちの触れ合い、ほのぼのとした
感じをその下手な文字に感じたものだった。それがワー
プロだかパソコンだか知らないが、宛先が印刷されてく
るようになったとき、商品の宣伝メールでも受け取った
ような味気ない気持ちになる。ところが、年を追うごと
に宛て先のプリントされた賀状が増えてくるにつれ、な
んとも思わなくなってしまった。それどころか、何だ、
まだ手で書いているのかとバカにされかねない今日のこ
頃である。もつとも、いずれは年賀状に限らず手紙はい
っさい来なくなり、受信はEメール、発信もEメールと
いうことになってくるだろう。通信・伝達が速くなって
便利この上ないであろうが、味わいのない気持ちがしな

いでもない。

IT時代の受益と受難

米ドライブ旅行から

上原 利夫

記念すべきミレニアムの二〇〇〇年三月に、わたしは三人の六十五歳男の一人として、アメリカ大陸の横断ドライブをした。このメンバーがあつという間にそろつたのは、八十人が参加する大学同期の電子メール「ミニネット」の威力であつた。東海岸のフィラデルフィアから西海岸のロサンゼルスへ引越すことになったSからの誘いが、その年の二月五日ミニネットに流れ、早くも三月十七日には、Yとわたしは成田を飛び立った。ちなみに、運転好きなYは、外国も飛行機も初めてだった。

多分珍道中になろう。行く先々から電子メールを送れとネット仲間が言う。アメリカのどの町にもKindosがあ

るから、そこから発信できるよ、とニューヨークのHが教えてくれた。それならローマ字で発信すればよいのだ。使ったことのないノート・パソコンを買うことはない。昔取った杵づかでテレックスの要領でやればよい。ところがその必要はなくなった。Hが日本との連絡拠点になつてくれたのだ。

実際には到着した町で、Kindosを探す時間も、発信する時間もなかった。みんなで夕食をつくり、ビールを飲んだあと、Hに電話するのがやつの毎日を思うと、発信は荷が重かった。さらに、アメリカといえども田舎では、電子メールを使えないモーターがある。携帯電話を持つアイデアもあつたが、日本で使ったことがないので、持たなかった。使い慣れたものでないと、海外旅行では役に立たない。デジタル・カメラすら、うまく使えなかったのだから。

ドライブ中は毎日モーターに着くと、Hへ電話をかけ、留守宅からの連絡の有無を尋ねる。同時にその日の行動を報告するので、それを聞いたHがミニネットへ発信し

てくれる。ホットな旅行記だし、筆の立つ日の面白くおかしい解説で、ライブの味を楽しめたという。そりゃそうだ。ちょっとした事件や事故もすんでしまえば、面白さを倍加させるが、旅行中は明日が分からないから、緊張感があつた。地図を開いてフォロワーした人もいた。レスポンスや質問も飛んでくる。これらをモータールのファックスで受け取った。アメリカ大陸の東岸と西岸では三時間の時差がある。西へ向かうドライブ組は一日二十五時間の日を三回エンジョイしたが、その都度ニューヨークへの報告が一時間ずつ遅れ。Hが寝てしまったときは翌朝になった。こんな楽しみもした、IT活用の旅行記は成功だった。

チェイン展開のモーターで、次の宿泊予約をフロント係のおばさんに頼んだ。おばさんは宿泊場所を間違えて、コンピューターで予約した。誤りをSに指摘されて、あわてて修正しようとしたが、二十四時間以内の解約はできない。そこで本部へ電話をかけ、わたしがインプットを間違えたのだ、お客に迷惑はかけられない、と一時間

あまり掛けあつた。ようやく修正を勝ち取ったおばさんはすっかり疲れ果て、フロントから引っ込んでしまった。

もしSがこの誤りに気付かなかつたら、行った先で予約はなく、かつ、泊まりもしない他所の宿代がクレジットカードで決済されたであろう。こうなると、円満解決できたかどうか疑わしい。ITの背後にはシステムがある。そのシステムは人間が設計する。設計者は人間の限られた行動にしか目を止めない。だから、どんなミスを犯すか分からない消費者としては、IT時代は恐しい。

大型小売店で電気製品を買った。品物は倉庫で受け取る。探しながら倉庫へ来てみると、コンピューターだけが待ち構えていた。しかも画面の指示がよく分からず、何回かやり直す。買い物をしてきた客への対応としては、礼儀がなさ過ぎる。伝わったのかどうかも分からず、十五分間不安な気持ちで待った。ようやく作業員が商品を持ってきた。ほっとした。作業員は人

間だから、事務処理しかできない機械とは違って、客の表情が分かり、融通はきくのだ。

IT革命は事業者に収益をもたらし、客にも便利なものではないと、本物とは言えない。クロネコやFedexは、利用者がサービスをエンジョイしている。また、ホテルのカード式ルーム・キーも便利で合理的だ。IT革命の影響は、釣り銭の出し方にも現れてきた。金額の大きな紙幣から数え出す場面があった。日本人は歓迎である。

グローバル・スタンダードは、実はアメリカン・スタンダードであるという。これは世界をアメリカ色に染めるという意図でなく、多種多様な人種・民族・文化が共存できるアメリカ基準をモデルにする、という意味であろう。この典型的な事例はクレジットカードである。外国で発行されようと、素性のわからぬ外国人に保有されようと、カードの与信が人柄を示す。もともと、カードにまつわるトラブルやリスクも多いが、これがIT時代の受益と受難でもある。

(二〇〇〇・一二・三一)

IT先輩国、フィンランド

今村 亮

1 ヘルシンキから

コンピューターソフトのリナックスが、フィンランド人、リナス・トーバルズの贈り物であるところ存じだろうか？ 今、彼はシリコンバレーで働いている。リナックスを無償開放したことで同国神話カレワラの英雄ワイナモイネンの再来と称えられている。フィンランドといえばサウナ、オーロラ、ムーミン、シベリウスがあるが、紙屋から急変のノキアが同国民を冬眠から目醒めさせた。

ノキアケータイの世界市場占拠率は実に三〇%で、一五%の二位モトローラを圧倒する。欧州がデイズニールンドなら、フィンランドは時代を先取りした未来ランド、ケータイですべてを賄う国と聞き、現金が通用するか、心配しながらヘルシンキに飛んだ。空港、駅はOK、港のカウッパリ青空市場では、ケータイの片鱗も見えず安心して買い物した。話題のノキア本社はヘルシンキから

エスポに向かう湖畔に立つ総ガラスの近代ビルであった。私は退職者としてわかって communication の人ならどなたでもと面会を求めた。マネジャー自らが応対に出してくれた。外は拡張工事の真っ最中、訪問客がひっきりなしだった。

2 サンディエゴから

福岡空港のカウンターで受け取った米国内外使用可能なレンタル・ケータイがノキア 8860 であった。本機は欧州 GSM 方式で認証カード SIM を装填する。どつしりと重厚な黒光りのケータイ、高齢者にも使いやすく、私は 8860 にぞっこ惚れた。偶然にも旅先サンディエゴで新築された白亜のノキアビルを見た。当地には、CDMA、HDR で世界を席巻したクワコム本社がある。

これにソニー、京セラの日本勢、シーメンス、ノキアの欧州勢が加わり、モバイル・バレーが生まれようとしている。かつては、セラミック・バレー、またメキシコ国境沿いのマキラドーラ工場と連携したテレビの一大産地であった。今回の訪問目的の一つ、会社 OB 会では、

会社新製品ケータイの即売会があり、モバイル技術の洗礼を受けた。

3 横須賀 YRP パークから

十二月忘年会や、クリスマスパーティー等が重なり東京に数泊した。思い立って新生の情報通信研究施設が並ぶ YRP パークを訪ねた。友人が現地にドライブしてくれた。京浜東北線野比駅から長沢に入る。最初に現れたのが威風堂々の NTT 通研、マレーヒルでベル（今は ATT）研究所を初めて見た感激が蘇る。通研を右折すると建設の進むパークが見える。先ずはドコモ。バスから降りた大勢の若者が急ぎ足で横切る。ノキアは #3 ビルのなかで見つけた。

4 世界企業のノキア

米国テレビ番組「60分」で現代シンデレラ物語、ノキアが紹介され、会長のヨルマ・オリラが出演した。同氏は、昨年春、東京で開催の「IMT2000」（次世代ケータイ）世界情報通信サミットの基調講演者として来日、前述横須賀でのドコモ i モード端末参入を発表した。見向きもされなかった一小企業が数年にして、隣国

古舗のエリクソン、米国のモトローラを抜いた。ケータイ売上額五ドル中の一ドルが利益という。オリラ会長のインタビュー記事に（１）経営ユニットの細分化（２）従業員各自の攻撃守備範囲の自由裁量がある。（１）は日本企業もやっている。（２）は会長が使ったドイツ語「lebensraum」、辞書にナチス用語とある。（２）も日本企業が最も得意とするところだ。何が違うのか？社員数の半分が外国人なので、経営哲学に「共通の文化を分かち、共通の言語を話すことで、社内のcommunicationを活性化し世界競争に打ち勝つ」があった。前述のノキア訪問は、そのあたりを知るためであった。マネジャーからは通り一遍の回答しかなかった。幸い、友人の息子に日本企業からのノキア出向技師がいて、お会いできなかったものの電話、Ｅメールでいろいろ教わった。同氏の話を紹介したい。

「世界中に会社が広がると、製品の開発から生産まで行う一つのチームが数か国にまたがるが多々ある。このような国際環境にあつて共通言語の奨励など、消極的なモチベーションでは、ビジネスは成立たない。部門に

よってレベルは異なるが最初から英語で仕事ができる人を探る。一応社内には英語研修制度はあるし、全面的な補助もある。欧州諸国は言語体系が違っても国境を接していたり、国境を超えた付き合いが盛んで、国際化は日本よりはるかに進んでいる」

日本では英語を第二公用語にするか否かが問われているが、外圧とか、一部のエリートにまかせよとか論じているうちに列強国や隣国にどんどん追い抜かれていく。正解はノキアの例から明らかである。大いに学ぼう。

鱒じまめ横町余聞

古井 米三郎

熊・八 「明けましてお芽出度うございます」

隠居 「やあ、おめでとうさん。ご兩人には二十一世紀が本番、大いに活躍してよ。わしにとつては天から授かったおまけの世紀、毎日をしっかりと踏みしめ見据えて

過ごしたい」

熊 「ところでご隠居、あの神の国の森さんが今度は
イット革命と来たけど、いかがなものでしょう。景気回
復優先で公共事業中心のバラ蒔き予算。国が破産しちゃ
ったら一体どうなるんですかね」

八 「借金の話は節分のあとにしよう。日本では昨春
ぐらいからIT革命が急にはやりだしたけど、もとはア
メリカ商務省、一九九八年公表の「EコマースとITの
経済への影響・分析」のデジタル・レポリユーションな
る用語がきっかけとか、政策貧困の森さん飛びついた
ってわけさ」

隠居 「IT革命なんてデマゴグ染みたフレーズだ
けど、確かに蒸気機関の出現による産業革命に較べて、
その範囲・規模・質に大幅な違いがある。つまり、IT
はほとんどの産業・経済活動、医療・教育等社会活動、
これらを支えている個人生活と市民活動そして関係行
政・政治活動、さらに個人・社会の風俗・文化等に大き
な変革をもたらす。産業革命が限定された二次元的な広
がりだったのに対し、IT革命はグローバル規模での三

次元的なものとなるんだな。

ここでIT革命の原動力の一つはコンピュータで、世
界最初といわれているのが一九四六年にアメリカで弾道
計算用としてつくられたコンピュータだ。一万八千本の
真空管、百四十キロワットの電力消費、長さ三十メー
トル、三十トンの重量と、まさに大恐龍で、演算能力は十
桁を三秒と現在の二、三千円の電卓にも及ばぬ能力だっ
た。半世紀を経た今日のコンピュータとの価格・性能の
比較をロールス・ロイスにあてはめてみると、その価格
は三セント、一ガロンで地球百周ぐらいすることになる
とか。

わが国の情報技術展開の画期的なのは一九六四年の東
京オリンピック。東海道新幹線開通でのオンライン・リ
アルタイム処理システム導入。オリンピックでは大会運
営・記録・報道等、新幹線ではダイヤ・コントロール、
座席予約に利用され、まさに革命だったんだよ。これが
銀行預金の受け払い窓口業務に一齐に広がった。この頃
になると「情報化社会に向けて」のフレーズが喧伝され
始めたんだね。このフレーズは抽象的ではあるけど、I

IT革命はすでに包含ずみなんだがね。

……酒がはこばれ、しばらくあいさつと献酬が続く……

八 「ところでアメリカの景気の八〇年代の停滞から九〇年代は一転、高成長・好景気の長期持続、株価のバブル水準到達へと様変わり、その原動力はIT革命による生産性向上をベースとするニューエコノミーへの構造変化などと、やや自己陶醉さみでした。ところが、昨年は秋風とともに景気停滞の予兆が出てくるは、十一、十二月の大統領選では、大雑把・ABO UT・ポーカー風といったカウボーイ文化がアメリカ民主主義政治の底流にあることがわかり、大変勉強になりました」

熊 「あちらはカウボーイ風なら、こちらはヤクザ風だな。大体派閥を組に読み替えると、することなすこと、考え方、まさにヤクザ・テキヤびったり。この間の内閣不信任案採決の風景、先生方が肅々と壇上に登り下足番に札を渡すような投票、天下太平だね。一体手前ら、実働時・分当たり税金をいくら食らつていやがるんで……

うむ……」

隠居 「熊さん、寝ちゃったね。カウボーイとヤクザの取り合わせなんて面白いね。そろそろ締めくくろうか。

日本も米国も政治分野のデジタル化の計画・実行を政党・政府に公約させる。そのインフラはタッチ・パネルによるe—VOTEから。代議士、大臣の金銭授受は電子マネーに法制化する。

産業・経済界は放って置いてもIT革命にならざるを得ず、この過程で構造改革も進むはず。

気掛かりなことは

・IT革命により金融分野のカジノ化が加速し、つまり資本主義の不安定化が恒常化する。

・非対面コミュニケーション文化は個人・社会・国・人類のデジタル化と無機質化をもたらす。臓器のパーツ化、DNA利用技術の拡散とともに二十一世紀の人類の課題となる。

ということである」

情報通信技術の潮流と提言

杉 浦 右 蔵

昭和六十年代初めマルチメディア万能社会が到来するかと話題になったことがある。その時話題になった技術の背景はコンピュータの小型化・高性能化・オンライン化などによる情報処理技術の向上であった。しかし目の目を見なかった。原因は総合技術の不足だったと思う。十年後の現在またブームが来た。今回は情報通信技術（IT）という武器でマルチメディア化に向けてネットワーク技術と組み合わせて身近な形で到来した。

米国インテル社の名誉会長であるゴードン・ムーアが三十五年前に唱えた「チップの能力は一年半で二倍になる」という経験則は現実の形となり、ムーアの法則と呼ばれるようになった。特にここ五年間の発達は目を見張るものがある。発展した各分野の技術がバランスよく総合的に融合して昔の夢物語が実現する形となって現れて

きた。

ITとは情報通信技術と訳す。I情報、C通信、T技術が融合した意味である。融合デバイス化の近年の動きは、第一波が一九七〇年代のメインフレーム世代、第二波が九〇年代のPC時代、第三波が二〇〇〇年代のインターネット世代の三つの波で表せる。パソコンの価格性能比やネットワークの性能は、ムーアの法則どおり正に百倍、千倍の速度で進歩しつつある。近未来のテーマは、移動体通信、デジタル放送、高度道路交通システムなどが脚光を浴びるだろう。一般家電分野では、あらゆる製品にコンピュータが組み込まれ、かつ通信制御の仕掛けによりどこからでもコントロール出来るユビキタス社会が来る。

端末機器を接続する配線をスマートに纏めたい願望は昔からの課題であった。ブルートゥースと呼ばれる規格の話し合いが纏まれば半径十メートル以内の機器は電波で結ばれて動作するようになる。複雑で見苦しい配線は無くなってしまふ。

さて、IT革命の時代が到来したといわれるが、日本

は米国に十年は遅れている。八〇年代の米国、英国の不況時代に日本はかなりの分野で世界をリードし盛況を極めた。そのとき、米英はＩＴこそ次世代の主役と読んでシリコンバレーの助成、ハイウエーネットワークの整備、運用枠組み計画、ネット枠組みの整備などに努めた。大衆が軌道に乗ったところでアメリカ商務省はデジタルエコノミー、デジタルエコノミーⅡ、デジタルエコノミー二〇〇〇というＩＴ教書を九八年から連続して発表し、国民に国家の姿勢を示した。

このころ日本はバブルが弾け、以降景気は下降局面が続いた。借金財政に頼る日本の景気浮揚策は、この十年足らずに前代未聞の六百六十兆円という国家負債を背負うこととなった。現在もこの借金は雪達磨式に増えている。この時期にきて二〇〇〇年の沖縄サミットで、日本政府はＩＴによる世界景気浮揚と日本再生を謳ったが、米欧諸国は冷やかな反応を示したに過ぎない。要はすでにＩＴ分野で世界制覇を成し遂げた米英には、犬の遠吠えにしか聞こえなかったのだ。

このように、すでに自分の枠組みの中に日本と関係諸

国を取り込んでしまった米欧に、日本はどう対処したらよいのだろうか。この枠組みの中でいくらか建議を出しても、もう無駄なのだというのを早く悟るべきだ。米英は自分たちより前に出ることを望んでいない。追従してくれることを望んでいる。出る杭は打たれる。

このような愚の手に出ることは無い。筆者も賢人ではないから直ぐには妙案は出ない。日本国民は優秀な国民だと確信している。妙案の方向として、米国が作ったインターネットを主力としない日本独自のネットを考案して既存ネットと相互接続出来るような方式を考えればよいと思う。しかし、非常に難しい技である。例えばドコモのiモード等はとてもよい例だ。東洋的センスのアイデアは潜在していると思う。このような未開発の脇役を主流として押し上げていく手法がよいと考える。米英の作ったネットは利用しないわけにはいかないから、できるだけ利用してやればよいと思う。従って主流となるべき脇役には開発費用を惜しまず出していかねばならない。ここが大切なポイントだ。日本政府の「ケチの銭失い」を改めて欲しい。

最後に、日本国の為政者は年を取り過ぎている。頭が硬い。この辺で宰相及び主たるリーダーを四十代に譲ったらい。今年の参議院選挙でも終わったら早速実行して欲しい。

IT革命と高齢化社会における ビジネス・モデル

櫻井 清治

IT革命とビジネス・モデル

ビジネスとは、財（モノやサービス）の供給者（売り手）が、対価と引き換えに財の消費者（買い手）にこれを提供することである。その成果は財の交換の場である市場の効率性により異なる。また市場の効率性は取引の基本となる情報・通信コストの高いか安いにより大きく左右される。

IT革命とは情報の収集、蓄積、分析にかかるコストが劇的に安くなり、かつ従来の一方的伝達が双方向的な

ことである。これにより今まで顔の見えなかった顧客それぞれの具体的要望が距離と時間の壁を超えて瞬時に伝わり、グローバル化した市場経済に多大なインパクトを与えることとなる。

IT革命によるビジネス・モデルの変化は、第一にビジネスの個人化であり、ビジネスは「企業主導」より「個人主導」になる。企業による多額の費用を投じての新聞、テレビ広告やダイレクトメール等に対する顧客の反応は微々たるもので無駄が多い。IT革命により顧客が欲するものを具体的に直接供給者に伝えるONE TO ONEのモデルが主流になる。第二に企業と消費者が直結し(B TO C)、企業と企業が国の内外をとわず直結できるためB TO B系列、問屋、販売店などの中間業者の機能は大きく低下し排除される。これによる商品コストの低下は大で、企業の収益と消費者の購買余力は増大する。第三は、顧客主導により、ビジネスの内容はモノよりも顧客それぞれの欲するサービスを提供することに重点が変わる。社会が成熟すると人々のニーズは教育

や自己啓発、生活安定のためのサービスに傾斜する。特に高齢者にその傾向が強くなる。

高齢化社会でのビジネス・モデル

日本における六十五歳以上の人口は一九八〇年には一千六十五万人で、高齢化率は九・一%だった。国立社会保障・人口問題研究所の推定では、二〇〇〇年には二百八十七万人（二七・二%）、団魂の世代（一九四七―四九年生まれ）が全部高齢者になる二〇一五年には三百八十八万人（二五・二%）と、高齢者化は急速に進む。同時に高齢者のイメージも変わってくる。かつては六十歳を超えると文句なしに老人であったが、今は六十歳では本人もまわりも老人とみなさない。特に団魂の世代では、短大を含む大学生は三〇%を超え、豊かな社会の消費をリードしている。パソコンなどを扱う高齢者も多い。以前の高齢者の楽しみはゲートボール、温泉、カラオケに代表されていたが、これからは自己の楽しみのみならず、活動的で社会に積極的に関わる者が多くなり、その内容も多様化が進むことになる。これら高齢者の欲する

サービス商品は、

健康維持システムと介護、看護サービス

機能的かつ安全な住宅設計

個人生活財政プラン

生涯学習、趣味の発見、同好交流やボランティアなどであろう。これら高齢者個々の多様な需給をミートさせるには情報コストが高すぎては対応しきれない。IT革命により、顧客それぞれの要望に内容の濃いサービス商品を提供できることになる。

高齢化ビジネスとなると、どうしても介護や医療ということになるが、医療、介護、健康などの機器の紹介や顧客の容態や要望はネットで双方向的に対応できるし、健康相談や専門医や病院も距離や時間を超えて連絡し、情報提供できる。家屋の構造もふる場や玄関、階段のリフトや情報機能の完備した書斎や娯楽室など、時間をかけることなく安いコストで、多様な業者より商品提供を受けることができる。自動車運転に対する欲求は若者より高齢者に強いといわれるが、体はまだ元気で車の運転に大事な目の弱化や反射神経の鈍化がある。メーター

類やカーナビの画面が運転中に見えにくくなる。

余談ではあるが、私は五年間の運転免許の更新のため義務付けられている「高齢者講習・適性検査」を最近受け、以前に比べ視力の弱化をしみじみと感じた。日本の技術力は優れている。メーターにかわって音声で走行状況を伝えるシステム、シート振動で曲がる方向を伝えるカーナビ、握ることで心拍数や血圧がわかるハンドルなどのオプションをネットでメーカに注文することが普通のこととなり、車体そのものは無料で提供されることになる。スポーツにおいても高齢者に適した用具や場所ではウェブサイトで選択できることになる。かなり以前に学業を終えた高齢者が興味ある分野の学識を修めることも、ネットでの大学や研究所の選択で容易になる。

高齢者対象のマーケットは広くて深い。高齢者のニーズはそれぞれの経験、生活慣習の違い、体力の違いなどから極めて多様化している。企業主導の画一的な商品やサービスの提供では対応できないが、IT革命によるONE TO ONE、かゝ個人主導の商品のサービス化に

より、高齢者対象のビジネスはこれから大きく伸びることになる。

新世紀によせて

科学技術論考

上 澤 準 一

一、科学技術の足跡

二十世紀は戦争と民族紛争にあけくれた。しかしその間、人類が歴史に残したもう一つの流れが「科学技術の進歩」ではなかったか。戦争や紛争が科学技術の進歩を促進した面は否定出来ない。軍備としての軍艦、航空機、戦車、重火器、通信機、電波兵器、原子力兵器、化学兵器、光学兵器など、どれ一つをとっても「科学技術」の固まりである。しかし「不幸」の固まりでもあった。

だが、軍備と直接関わりのないところでも科学技術は目覚ましい足跡を残している。パソコンとIT（情報技術）、天文学／宇宙物理と宇宙開発、分子生物学と遺伝

子操作、医学と医療機器、病院と医療システム、抗生物質と抗がん剤／輸血製剤／保温保冷剤／その他新薬、原子物理学と発電用原子炉、石油科学とプラスチック、ジェット・エンジンと発電タービン、太陽電池、燃料電池等々、ざっとならべてこれだけ出てくる。

二、負の遺産

だが、これらの輝かしい「科学技術の進歩」が、いっしか多くの「負の遺産」を残したのも二十世紀である。

その第一は大量生産／大量消費／大量廃棄から派生する環境問題／社会問題、地球温暖化と環境破壊。その連鎖性、波及性から、問題はすでに全地球規模である。

第二は、人間能力を補い高めることにより科学技術が権威を持つに至ったことである。

権威は周囲の依存心を呼び集めると同時に自らの欠点や怠慢にうとくなる。権威を損なうようなことは取り繕って隠そうとする。過信は怠慢を呼び偽善につながる。

権威は絶えざる競争によって錬磨されてこそ意味あるものになるはずが、依存心や怠慢をふくらませては社会的

モラルの低下を引き出す副作用を生む。

相次ぐ原発事故や医療ミス、航空機／自動車／船舶／ケーブルカーなどの交通事故、高層ビル火災や地震時の都市災害など、技術レベルの怠慢が社会の安全に及ぼす脅威は計り知れない。

第三は銃砲、爆発物などの武器類が手近なものになったこと。これで民族／宗教間の血で血を洗う地域紛争がゲリラ的に続発し、国連も諸大国も安全を保障しきれなくなっていること。

第四はIT革命の裏に潜むハッカー犯罪。ひいてはサイバー戦争の兆しである。

三、人類の課題

以上四つの「負の遺産」は新世紀を迎える人類にとって「死活」に関わる重要課題である。原発一つをとっても、「安全性」に一〇〇%の信頼性がおけるのかと問われてチェルノブイリを忘れるわけには行かない。スリールマイル島や日本で続発した原子力施設の事故を忘れるわけに行かない。

人類の死活に関わる重要課題について科学技術の残した「負の遺産」を観るとき、もはや科学技術に一〇〇%の信頼を置いてはならないことに気が付く。

科学技術から権威を取り払って、ありのままの不完全な実態を捉え、「不確実性」を少しでも補完するシステムを構築しなければならない。まして不完全さの「隠し立て」は人類存続に関わる「反逆」である。

四、科学の原点に立ち返ろう

特に技術の信頼性については「科学」の原点に立ち返って、「実験による実証」「エラーの排除」「検査検証の繰り返し」「測定器具や安全装置の整備と点検校正」「技術者の養成／訓練」「一般科学教育の強化」「公正な記録保持と情報の共有化」「反社会行為（医療ミスを含む）の予防と処分」などの地道な努力を積み重ねなければならない。

さらに、人類諸活動それぞれの現場で、個人／企業／行政の各階層で、上記努力が着実に積み重ねられて初めて、人類の「安全と発展」が保証されるのだということ

このことを新世紀のはじめにあたり銘記したい。

「IT革命の世紀」と言うけれど

衛 藤 甲子郎

新世紀は政治も「IT革命」と共に始まった。パソコンのマウスに手をかけて微笑んでいる総理大臣の広報写真がメディアに頻繁に現れると、『一犬虚に吠えて…』の諺のごとく、国を挙げて「革命」で夜も日も明けぬ状態らしい。

マルクス思想を金科玉条として頑なに信奉し続けている某政党でさえ、その綱領から革命の二文字を削除しようとしているのに、今に及んで日本政府がこの古色蒼然たる単語を使い出したのは理解に苦しむ。いやしくも一国の宰相たる者が自らの施策を「革命」に擬するとは、その軽薄さに呆れるばかりだ。しかも日ごろは総理の片言隻句を捉えて「失言妄言」と鬼の首を取ったように大

騒ぎするメディアも、今回は競って同調しているではないか。彼らは恐らく「革命」という進歩的な音感に酔っていた青年時代に郷愁を感じているのだろう。これこそ日本のマスコミの恥部といわれても仕方あるまい。

風にそよぐ葦のようにほんやりと毎日を過ごしているうちに、馬齢を重ねて傘寿も間近となった。よろめきながら通ってきた過去をふり返ってみると、新しい技術が産まれるたびに世間はその新鮮さに驚き、影響力を過大評価することが多かった。

例えばコンピュータによってピアノの自動演奏ができるようになると、ピアニストは職を失うだろうと囁き立て、テレビやビデオが市場に出回ると、気の早い人々は野球や相撲などは観客が減り劇場や映画館もつぶれてしまうだろうと真剣に心配したものだ。

だから今回も『大山鳴動して嵐一匹』だろうとタカを括っていたのだが、ITの初歩も知らぬ老人が賢しげに講釈していることが暴露すれば、それこそ恍惚の痴呆症にされてしまいかねないので、遅まきながら先日来パソコンに取り組み、インターネットとEメールだけはなん

とか人並みに操作できるようになった。その結果、インターネットの検索を活用することによって百科事典を引くよりも早く未知の知識を習得できただけでなく、多年探していた中国の古典もたちどころに発見し得たのは望外の喜びであった。Eメールも友人から写真入りの連絡が届いたり会話調のメッセージが次々に到着するなど、情報伝達の便利さは身をもって体験した。

しかし、だからといってこれからの生活において「革命」と呼ぶほどの大変化が起きるとは考え難い。インターネットによって世界の知識を一瞬のうちに集めることも、Eメールによって世界中の人と自由に交信することも、その指向するところは要するに地球上の距離と時間差とを無くそうとしていると思えるのだが、果たしてこれが人間の成功に合致して真の幸福に結びつくものだろうか。

そもそも人間が万物の霊長たる所以は五感のすべてを活用することにあるのだから、その中の一つが欠けても完全な人間たり得ないだろう。ましてITのように視るだけ、もしくは視ると聴くことだけが重視される社会は、

決して健全な人間が育つのに適した社会ではあるまい。

特に日本人はこれまで欧米人よりも情緒的に豊かな感性を持つとされていた。もし現在政府与党が標榜しているような「IT革命」が無批判に推進されていくと、遠からず視覚と聴覚だけが発達した人間が巷に溢れて、殺伐たる日本国になってしまうのではないだろうか。

もちろん私としてITが人類文化の向上に極めて有効であることを否定するものではないが、それは人間生活上におけるツールとしての価値であって、設備や技術そのものが主役であってはならないと思う。次世代のケータイを含むITの先端器具は社会的弱者に対して、彼らが日常生活を送る上での手足となったり、財布や手紙の役を果たすこともできるはずだから、新世紀にはEメールやインターネットを内蔵したパソコンが医療補助器具として位置付けられ、眼鏡・義歯・補聴器・車椅子などと共に健康保険で購入可能となることを期待したい。

ITの新鮮さに浮かれて人類がみな無機質な画像と音声だけの世界にのめりこんでしまうと、今から何万年か

後には地球上の全人類の顔は目と耳だけが大きくて他の機能が退化した生物になっているかもしれない、と危惧するのは私一人だろうか。

IT革命は何を狙っているか

松浦 武弘

ITとは通信技術のことであり、政治・経済・社会・生活・産業・国土構造、もちろん政府・企業・個人・世の中 of the すべてを変える手段である。

従ってIT革命は一万年前の農業革命、十八世紀以降の産業革命にも匹敵する大革命といわれている。

農業革命・産業革命が自然発生的に起こったのに反してIT革命は戦略的に策定されたものと考ええる。

アメリカは一九八〇年代、知的財産権の保護・強化を経済的覇権確立の重要な戦略とした。

一九八二年のおとり捜査でやられたIBM産業スパイ

事件（日立製作所、三菱電機）一九八七年の光ファイバー製法特許で住友電工の敗訴等はアメリカによるプロパテント戦略の流れの中で起こった事件である。

続いて一九八八年には包括通商法が成立したが、それが「スーパージョー」一条「スペシャルジョー」一条である。

一九九二年ゴア上院議員は「アース・イン・ザ・バランス」の中で、アメリカの最重要戦略として「情報」と「環境」の二つを掲げた。

一九九三年クリントン政権となって、NII構想、即ち「情報スーパーハイウェイ構想」を打ち出すと同時に、GII戦略と称して国内向けNII戦略をそのまま地球規模にまで拡大して世界戦略とした。

またアメリカは二〇〇一年春から高度暗号システム（AES）を採用し（ベルギーのラインドル方式に二〇〇一年一〇月決定）、これを標準化し世界の貿易管理を狙っている。第二次世界大戦を境に英国と米国とを、国というカテゴリーで経済力を比較すれば、英国は「日没する国」であり、米国は「腐っても鯛の国」である。

しかし国という概念を捨象し歴史を長いスパンで俯瞰

すると、米国とヨーロッパ各国が全く一体であり、世界中で起こっている事象・事件の本当の意味が理解できにくる。戦略としてのIT革命を、誰がどのように策定したかを考えれば、TC（トラリテラル・コミッション）

CFR（カウンスル・オブ・フォーレイン・リレーション）アスペン研究所が浮かび上がる。TCとはロックフエラーが主催する日米欧三極委員会であり、CFRは外交問題評議会で、英国のRIIA（ロイヤル・インスティテュート・オブ・インターナショナル・アフェアーズ）のアメリカ支部であり、アスペン研究所の生みの親は、英国のタビストック研究所である。タビストックは、戦中戦後を通じて悪の限りの戦略・戦術を展開したが、ドレスデン爆撃、ビートルズの創作・演出までやっている。ヨーロッパとアメリカが一体である事象として、左記の事実がある。

*アメリカ独立宣言に署名したワシントン・ジェファソン等五十六名のほとんどがフリーメイソンまたはイルミナティーのメンバーであった。

自由の女神はフランスのフリーメイソンからアメリカ

のフリーメイソンに送られた。(ラファイエット侯爵からジョージ・ワシントンに送られた)

* 一九三三年以降に印刷された一ドル紙幣の裏に初めて国璽が印刷された。

国璽の裏には「ルシファアの眼」といわれる「万物を見通す眼」が印刷されており、フリーメイソンのシンボルマークである。フランクフルトのロスチャイルド・ビルの上階にはピラミッドが作られており、夜はルシファアの眼の如く輝いている。

* 毎年欧米各国の政財界著名人がビルダーバーク・ソサエティーに集い世界戦略を決定する。

最初の会議が一九六九年オランダのビルダーバーク・ホテルで開催され、その時の重大決定事項が一九七一年のニクソン・シヨックの決定であった。

この時の議長がベルンハルト殿下(オランダ女王の夫)である。

* FRB (連邦準備制度理事会) がプライベート銀行であることは余り知られていないが、イングランド銀行はじめヨーロッパの中央銀行はすべてプライベートで

ある。

* 国際決済銀行は各国中央銀行総裁で構成されているが、マネジメントはスイスのバーゼルにある「バーゼル・クラブ」(一九三〇年にロスチャイルドによって設立された)が行っている。

フリーメイソン・イルミナティを統括しているのが三百人委員会(クラブ・オブ・アイルス)でありその上に君臨するのがベネチアの黒い貴族たちであり(現在のヨーロッパの王家) その頂点にはエリザベス女王(ガーター騎士団総長)が燦然と輝いている。

戦後五十年、三百人委員会は「三S政策」即ちセックス・スポーツ・シネマで世界の大衆を白痴化してきたが、二十一世紀に向けてIT革命により英語と暗号で世界の情報管理を達成し、白痴化の徹底を目論んでいるものと思われる。今後ITを抜きにした生活は考えられないが、あくまでも、これは手段である。

情報過多の二十一世紀、我々一人一人がしっかりした価値観の枠組みのフィルターを通して、無用の情報を捨てて真実のみを受け入れねばならない。

忠犬ハチ公のつばやき

石川 正 達

企業OBペンクラブの会合場所が代々木の新日鉄研修センターに変わって、渋谷からバスで行くことにした。久しぶりの渋谷。駅前広場は若者が溢れ、バス停前には、でっかいビルが出現している。何もかも様変わりしてしまった。変わらないのは忠犬ハチ公ぐらいだろう。銅像前に立つと、ハチ公のつばやきが聞こえてきた。

やあ、暫らく。お前さんが小学校四、五年生だったかな。東横デパートが開店した一九三一年（昭和六年）ころのことを覚えているぞ。須田町行きの都電、いや当時は市電が走っていて、停留所前にキンツバを焼いている店があった。温かい甘いかおりに惹かれて、お前さんはぼんやり眺めていたな。

僕はお前より二年若い一九二三年（大正十二年）生ま

れた。飼い主の東大農学部上野英三郎教授に松濤の屋敷で可愛がってもらい、大学の行き帰り、渋谷駅改札口まで送迎に行ったもんだ。ところが、二年も経たぬある日、先生は教授会で脳出血を起こして亡くなられた。そうとは知らず、僕は毎日、夕方になると渋谷駅改札口まで出掛け、それを十数年も続けたよ。若者たちが、日の丸を振られて代々木の連隊に入営したり、出征する兵士を見送ったこともあるな。

当時は尽忠報国なんて忠義がもて囃された時代でね。「帰らぬ主人を待つ忠義な犬」にされてしまった。ここだけの話だけれど、本当はお前さんと同じように、あのキンツバを焼く匂いが恋しくて通ったんだ。いまの渋谷には、あのころの街の温かさが無くなったね。

お前が見上げていた井の頭線渋谷駅の入っている二十五階建て「マークシティ」は昨年四月にオープンしたIT時代を象徴するようなビルだ。二十一世紀は情報技術、コンピューターが支配する世の中になるんだな。広場には「入営」という言葉も知らない若者たちが群れ、その手にしているケータイはIT時代の尖兵だ。やがてほと

などの家庭にパソコンが備わるようになり、インターネットがその主役をつとめるんだな。

いまの社会は農らの時代と違って、男女平等の社会と言われている。電器洗濯機や掃除機などの登場で女性が家事労働から解放されて実現したんだ。IT革命の世紀ともなると、男女の立場が逆転するかもしれないぞ。

頭で考えるべきところをコンピューターがやってくれる。大抵のことはコンピューター任せ、指先一本で動かせる社会になるんじゃないかな。その点、指先が器用でパンチ能力の優れた女性の方が優位だ。やがて女性の首相が出現し、天皇も女帝の時代が到来するかもね。大相撲の土俵にだってあがれるぞ。

インターネットはアメリカがベトナム戦争のころ仕上げた通信ネットを世界に開放したものだ。アメリカが世界に覇権を確立する道具にしているんじゃないかな。僕はIT音痴なんだが、アメリカが「インターネット開放やめろ」と言い出したらどうなるんだ。アメリカがくしゃみすると世界中が風邪を引くことになっては困るね。日本独自のIT革命を実現してほしいもんだ。

お前も最近パソコンを買ったそうじゃないか。お前が使う前に三人の孫たちに占領されてしまったようだな。小学生の子はお絵描き、高校生の子はeメールか。最近の子の、パソコンの扱いは手慣れたもんだ。メンコやベীগマなど友達と屋外で遊ぶこともなくなり、一人部屋にこもって孤独なパソコン遊びに耽っている。

最近、高校生の間で流行っている遊びがある。「出会い系サイト」を利用して、男の子が女言葉で女の子とメールを交換、いつ男とばれるか楽しみにしているそうだが、そんな遊びが犯罪と結びつく。男女のメール交換から殺人事件に発展したケースが報道されている。「メル友に会ってみたら我が亭主」なんて川柳があった。バーチャルな世界が現実となると恐ろしい。顔が見えないインターネット犯罪は増える一方だ。

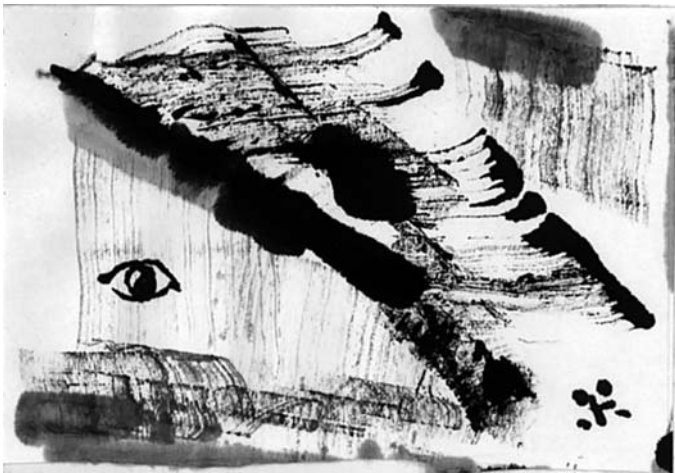
ところで、アイコン、ダウンロード、タスクトレイなどの、パソコンのカタカナ言葉は日本語で表現できないものかな。昔、西洋の文物が日本に入ってきたとき、先輩たちは巧みに日本語に翻訳した。カタログを型録、フィロソフィーを哲学としたなど感心するね。

翻訳なんて考えるのは時代遅れかな。公用語として英語が認められ、小学校でも英語を教える時代だ。日本語もやがて横書きが主流となって、お前さんたちの作っている「悠遊」も横書きにする時代がやってくるぞ。

それにしても昔、薪の燃える暖炉の側で先生と過ごした日の温もりが忘れられない。IT革命といっても道具改新に過ぎない。道具が支配する冷たい世の中になっては困る。肌で感じ合う温もりを失わないでほしいね。

そろそろ参宮橋に行く時間だぞ。お前さんもパソコンをよく勉強してIT時代に遅れをとらないようにしてくれ。頭が若返るよ。また会おう。元気でな。

(注) ハチ公Ⅱ一九三五年三月老衰死。十二歳。秋田生まれの日本犬。銅像は生存中の一九三四年建立、戦時中金属供出のため撤収されたが、戦後再建。



自由テーマ

神も仏も靈魂も無い

榎本 喜三郎

かなり以前から考えてきたテーマである。しかしそのうちに自分の考えが変わることもあろうかと、今日まで書くのを躊躇^{ため}って来た。もうすぐ八十七歳になる。ここまで来れば、これから自分の考えが変わることもあるまいと思つて書くことにした。

私が生まれたのは東京の下町で、家は乾物屋、卸と小売りをやっていた。毎朝広い間口の表戸をあけて正面に飾った神棚に父が灯明をあげ、柏手を打ち、合掌していた姿が臍氣な記憶のなかにある。大正初期の不景氣に、店をたたんで父は職業を替え、家も移った。

父も母も日蓮宗で、法華經を唱えていた。家の菩提寺は徳川家の尾張から江戸への引越と共に東京へ来たらしく、下谷にあるその寺は今でも東京百名刹の中に数

えられている。家の墓碑には「尾張屋代々の墓」と刻まれている。尾張屋は乾物屋の屋号だった。私の弟二人も同じ墓地の一隅にそれぞれ家族の墓を設けている。言わば父母と一族共に日蓮宗を奉じているわけである。今でも私たち三軒は盆には寺参りを欠かさない。寺への折々の寄進もする。

今の私の家にはかつてのような神棚はないが仏壇はある。その中には明治以前に逝った祖先の位牌もある。今では私が一番上なので、父母やすでに物故した兄や姉の位牌も預かっている。関東大震災は本所緑町で遇ったが、仏壇の位牌は風呂敷に包んで、九歳の私が背負わされて逃げたので、今の仏壇の中には古い位牌がある。毎朝仏壇に水を供し、線香を灯し、折に触れ花を供え供物を供するのは私の家内の役目で、かなりこまめに努めている（彼女の実家は浄土真宗である）。私もたまには彼岸に家内と一緒に寺へ詣でる。

さて、こうしたわが家の仏壇といい、菩提寺といい、

私が生活の中で仏教とかなり密度の濃い係わり方をして
いるのは、「神も仏も靈魂もない」と考えていることと
は整合しないのではないかと思われるに違いない。そこ
でこれから答えを書く。

第一私は日本の多くの神々も、キリスト教のGODの
存在も信じていない。尤もこの大宇宙の天然自然の運行
を捉えて、これをしも神と言うなら私も納得する。しか
しこれはキリスト教のGODではないし、日本の神々で
もない。それでは私の仏教徒として行っていることと
「神も仏も靈魂もない」と考えていることとの整合性は
何処に求めるのか、私は神や仏がいるとは考えていない。
靈魂の存在も信じていない。人間を含んではすべての生物が死
んだあとには何も残らない。私という個体は父と母との
接合によって偶然に生まれた。そして今日まで生存を続
けてきた。私も一男一女をもうけ、彼らもまた今では夫
となり、妻となって既にそれぞれ二人ずつの子を得てい
る。こうして血縁の繋がりをもった人間が代を重ねてい
る。そのリングに節目を作っているそれぞれ代々の人間
は、生まれて来た以上死ぬことが定めである。そして死

んだら役目を終えたのであとには何も残る物はない。死
後の靈魂などというものは人間が考えたもので、現実
には存在しない。

それでは私が今でも仏壇の位牌に灯明をあげ、供物を
供するのは何のためか、神社や仏閣に参って賽銭をあげ、
合掌し、礼拝するのはどういう訳だと問われよう。私は
人間の死後の靈魂や神や仏がいると思ってそんな行為を
しているのではない。そんなものは存在していないと確
信しているが、自分の満足のために行っているのである。
そういうことをすることで自分の心が安らぎを覚えるか
ら、そのためにするのである。彼岸に菩提寺に行つて墓
石を掃除し、水をかけ、花を供えるのは、この墓石の下
に死者の骨があり、そこに死者の霊があると信じて、そ
れらのことをするのではなくて、そうすることによって、
心の中に安らぎを感じるからである。神社、仏閣で祈る
のも同然である。では何故そうすると心に安らぎを感じ
るのかはわからない。だがその理由を知る必要もない。
要するに死んだ後には何も残りはしない。だから私は
散骨や献体に賛成だし、葬式をだすのは何の意味もない

セカンド・ムーンと大絶滅

山 辺 武 磨

と考えている。が家内はそれに賛成しない。だがそれも家内が自分自身の心の安らぎを得るためにやるのだと、私流に考えれば、私の死後のことだし、放っておくことにしている。

(追記) 先年インド・ボンベイで私が長年親交を結んだビジネスマンのJ氏が、ある日ホテルのロビーで私に向かって「私は昨夜本当に神の存在を確信する証拠を得ました」と、いささか緊張した面持ちで宣言した。その時はそれだけで、その後私が日本へ帰ってしばらくすると、彼が自殺したという報を得て愕然とした。彼は三人の息子を持ち、既に皆成人して仲良く父の海運業を助けていて、事業の先行きも明るかった。夫人はなかなかの美人で、彼と同じヒンズー族、家庭も円満、彼は一身上何ら不平や不満のある生活ではなかった。その彼が自ら命を絶ったのは、神の存在の確信が崩れたことが原因ではなかったかと、訝っている。

一、ある時大異変が起こって、約六千七百万年前から約六千五百万年前の間に、恐竜、翼竜、海生大型爬虫類、熱帯性プランクトンおよびアンモナイト類が、選択的に、完全絶滅したことは、間違いない。この大異変について、いろいろ学説が現れたが、いずれの説明も不十分である。私は、この大異変を解明しようと努力してきたが、この度結論を得たと信じるので、以下「セカンド・ムーン説」を述べることにする。

二、地球が形成されて間もなく、巨大火球が衝突し、地球は壊れてその破片から二つの衛星が生まれた。一つは現存の月である。も一つは、私が「セカンド・ムーン」と名付けるものであり、その後、約六千七百万年前に、火星ぐらいの大きさの天体に衝突され、粉々になって飛

散消滅した。

セカンド・ムーンは、月の二倍の直径を有し、月より遙かに地球に近い軌道上を回り、表面積の九割以上を占める海には、満々たる水をたたえ、太陽から受けた光線と熱エネルギーの一部を反射して地球に送った。そのため、地球には闇夜が少なく、夜間のセカンド・ムーンの光は非常に明るく、野球のナイト・ゲームに使用する照明に匹敵する光度を持っていて、生物、とりわけ、海中生物の光合成に最適のものであった。この状態は、後述のセカンド・ムーンの消滅時まで続いた。

また、セカンド・ムーンは、月と連係して、地球の重力を半分ほどに抑制したので、中生代に出現した恐竜をはじめ、巨大動物は、その体積に比し、著しく軽量であった。このことが、彼らに巨大性、温血性、および敏捷性を与え、容易に他の動物を捕食することを可能ならしめた。その結果、恐竜は出現以来約七千万年前に至るまで、セカンド・ムーンの恩恵を一身に受けて、あらゆる分化、または新種形成に成功し、白亜紀終期においては、空前の繁栄を享受していた。

その繁栄がまだ続いていた約六千七百万年前に大異変が起こった。すなわち、直径が火星のそれと等しい天体が、秒速五十キロメートルの超快速で、地球すれすれに通過し、セカンド・ムーンに大衝突して、これを粉碎消滅させ、自らは太陽系外へと飛び去った。

三、セカンド・ムーンの消滅は、地球上の生物に大きな災害をもたらした。地球上に闇夜が増加したことは、いままで小さくなっていた原始哺乳類に再生の喜びを与えた。彼らは、闇夜を幸い、草食恐竜の巣を襲って、卵を根こそぎさらって行ったので、草食恐竜の個体数は、目に見えて減って行った。

セカンド・ムーンの消滅により地球、月、セカンド・ムーンの間に保たれていた重力のバランスは、一気に消滅し、重力は倍加した。

その結果、大型動物の体重は倍加して、いままでのプラス要因からマイナス要因となった。翼竜は、飛行不能となり墜死絶滅した。海生大型爬虫類も遊泳不能となり溺死絶滅した。大型肉食恐竜は、体重増加のため敏捷性

を失い、また、草食恐竜が減少したため、捕食が困難になり、同じく著しい個体数の減少を見た。

セカンド・ムーンの消滅により、光合成に必要な光源を失った熱帯性プランクトンは、光合成ができず、生存の道を絶たれて絶滅した。同様に、アンモナイト類も、殻を作る光合成を阻害され、生存できず、完全絶滅した。

四、このように、セカンド・ムーンの消滅後、約二百万年経過し、恐竜を除き、翼竜、海生大型爬虫類、熱帯性プランクトンおよびアンモナイト類は、完全絶滅していた。大型草食恐竜は、多数の卵を盗まれた上、体重の増加に伴う食料必要量の大幅増加とセカンド・ムーンの消滅による気候の寒冷化に基づく裸子植物および被子植物の減少がもたらした飢餓に襲われ、著しい個体数の減少に見舞われた。また大型肉食恐竜も、常食とする大型草食恐竜がほとんどいなくなったので、絶滅しかかっていたところへ、約六千五百万年前、ユカタン半島に隕石が落下した。その直接、間接災害の結果、白亜紀から暁新世初期まで生き抜いた一部の小型肉食恐竜（鳥類の

祖先といわれる）を除き、恐竜は絶滅した。

五、セカンド・ムーンの実在と消滅に関する目撃証言は、当時地球上に生存していた原始哺乳類によって、その直系子孫である台湾先住民中のある部族に、「二つの太陽と弓の名人」という伝説の形で残されている。これは、DNA記憶によるものである。

医療受給証（平成十二年）

正 木 豊

平成十二年三月、横浜市保土ヶ谷区役所から「医療受給証送付のお知らせ」の葉書が届いた。中段には敬老特別乗車証を交付するので、誕生日以降に印鑑と健康保険証を持参の上福祉係までお越し下さい、と書かれていた。また、別便で介護保険被保険者証が送られて来た。

四月には、国民健康保険被保険者証と老人保険医療受

給者証と一緒に送付されてきた。それぞれの保険証を眺めながら、自己負担金が増えるだけなんだと、釈然としない気分であった。

インターネット情報化時代らしく、病歴や健康状態等をＩＣカード一枚に、インプットしたものにして欲しかった。病院へ行く度にどの保険証を持参すればよいのか迷ってしまう。結局三通の保険証を持ち込むことになる。

七月になると介護保険料額決定通知書が送付されてきた。無関心ではいられないと思い「横浜市の介護保険料のしくみ」に目を通した。

『六十五歳以上の方』（第一号被保険者）の介護料は、市町村ごとに条例で定めることとされています。横浜市では低所得の方の負担を軽減するため、国の標準割合の五段階ではなく、新たに第六段階を設け、第一段階および第二段階の保険料を軽減しています。

1 所得段階別保険料

基準…年額三七、九八〇円（月額で三、一六五円）

第三段階の保険料額です。

所得段階	対象となる方	保険金額 (年額)	平成12年度 (年額)
第1段階	○生活保護受給者 ○非課税世帯に属する高齢福祉年金受給者	基準額×0.5% 9,490円	2,370円
第2段階	○本人・世帯とも市民税非課税	基準額×0.5% 24,680円	6,170円
第3段階	○本人が市民税非課税（世帯に市民税課税者いる場合）	基準額×0.5% 37,980円	9,490円
第4段階	○本人が市民税課税で「合計所得額」が250万円未満の場合	基準額×1.5% 47,470円	11,860円
第5段階	○本人が市民税課税で「合計所得金額」が250万円以上の場合	基準額×2.5% 56,970円	14,240円
第6段階	○本人が市民税課税で「合計所得金額」が700万円以上の場合	基準額×2.5% 75,960円	18,990円

2 保険料の納め方

保険料の納め方には「特別徴収（年金からの天引）」と「普通徴収（口座振替などによる個別納付）」の二種類があります。（以下省略）

国の標準割合を調べてみた。

次ページ表の『1号保険料の設定のしくみ（厚生省による標準ケース）』と、「横浜市の介護保険料のしくみ（右表）」とを見比べてみると、保険料の軽減どころでは

金額免除の対象になる層 本人が住民税課税で年金収入の場合 年約433万円以上 本人が住民税課税で年金収入の場合 年約433万円未満 本人が住民税非課税 世帯全員が住民税非課税 生活保護受給者 老齢福祉年金受給者で 世帯全員が住民税非課税				
第1段階 基準額 ×0.5	第2段階 基準額 ×0.75	第3段階 基準額	第4段階 基準額 ×1.25	第5段階 基準額 ×1.5
基準額を月額3,000円とした場合 上段10月から1年間 下段来年10月以降				
750円 1,500円	1,125円 2,250円	1,500円 3,000円	1,875円 3,750円	2,250円 4,500円

なく、引き上げていることは歴然としている。
市役所への抗議の電話が殺到しているようだ。近頃では毎日のように新聞紙上に介護保険について論議が掲載されている。

「低所得者の負担が相対的に重い。一部の低所得者に対して金額免除を打ち出す自治体が相次いでいる。」

あわてた政府は介護保険制度を見直すと発表したが、はたしてその行方は？

同じ七月に、国民健康保険料の納付書が、七月期、八

月期、九月期の三か月分が一冊になって送られてきた。どうせ払うなら一緒に払うことにして八月九日、郵便局に行き支払いを済ませた。ところが、一週間後に、「督促状納付書」が送られて来た。七月分を払いなさい、という。赤字財政再建を目指している行政側の姿勢に疑問を持った次第。

十月には介護保険料が年金から特別徴収され、年金生活一年目から、国民健康保険料だ、介護保険料だと負担がかかってくるのに驚いた。徴収された保険料がどう使われているかなどと詮索することは、専門家や市民団体にまかせておくしかあるまい。

そんなことより、三通の保険証を手にながら、そろそろ死への旅立ちの準備をしておかないとと、考えた。

一、死んだら一体、いくらかかるのだろうか。葬儀屋に尋ねたところ、「その家の宗旨によって違ってきますが、普通、最低でも二百万円以上はかかります」

一、葬儀等で家族や親族、知人等に迷惑をかけたくな
く、派手なことはご免蒙りたい。医科・歯科大学病院に

登録する「献体」という方法もある。

一、病気で何時倒れるかわからない。入院させられ、スパゲッティ症候群は嫌だ。単なる延命治療は拒否したい。死ぬ時ぐらい自分の意志で子供のように死んで行きたい。そういう人には尊厳死協会に入会登録する方法もある。

死ぬこともままならぬ世の中のような。

市民権

岸 本 義 生

それは十月末のこと。三鷹駅で声をかけられたので、振り向くとS君だった。彼は私の勤めていた会社の後輩で、人懐っこい顔は変わっていない。

「会社はリストラで大変なようだが元気ですか」

「元気です。しかし会社をやめました。実は変わったことを始めました」

くれた名刺には〇〇エージェンシー武蔵野代表とあったが、パソコンがらみのベンチャーかと思った。

「いや。じつは一月から探偵になりました」

彼は会社の広報室長をしていたが、リストラの動きを機に、前年九月に五十五歳で自主退職したという。商社マンから探偵とは愉快な話なので昼飯に誘った。

「ところで変装などしますか。明智小五郎みたいに」

「話が古いですね。そんな大袈裟ではなくても、張り込みに相手と場所を考えて不似合いな格好はしません。カメレオンをはじめ、動物・鳥にも保護色があるでしょう」

「風景に融けこむということだろうか。忍びの世界だね」
「その通りです。住宅街、団地、丸の内、池袋、渋谷それぞれ違いますからね。とにかく目立つことは禁物です」
「それにしても面白いことを始めたね」

「いい年をして、と言われることもあります、エキサイティングな仕事を結構楽しんでます」

数年前に企業の危機管理セミナーで、アメリカでも著名な〇〇探偵会社の話を聞いたのが転身のきっかけ。彼

は人事部十六年、広報九年と常に人間相手の仕事をしたので、自分でも私立探偵が最適だとひらめいたという。

広報関係で知り合いになった新聞記者たちも、応援するということで探偵会社の門をたたいた。基礎訓練をうけた後、会社を設立して、全国に百五十拠点を持つ〇〇会社のチェーン組織に入った。今では探偵学校を出た若い男子二人を採用して結構忙しいらしい。

「ところでどんな仕事が多いの」

「定番の浮気や従業員の素行調査、行方調査、婚約前の身上調査、ストーカー調査、盗聴器発見などが主なものです」

「浮気調査は女性から旦那がおかしいから、調べて欲しいというのと、男性からワイフの調査とどちらが多いのかな」

「男からもありますが、大多数は女性からです。機器がハイテクになって証拠固めは簡単になりました。昔はずいぶん苦心したですよ」

「女の直感は男よりはるかに鋭いから、男の浮気がばれやすいのかな。逆に男は知らぬは亭主ばかりなりか」

「いい言葉があります。浮気のことを業界では『愛に不信を感じた時』と言います。電話帳をみるとわかります。男性は財布をカミさんに握られて、浮気代もないはずですが、皆さん結構お盛んですよ」

「ところで行方不明だが、警察には毎年八万人もの失踪届が出ているという記事を見たことがあるが、調査依頼はありますか」

「実に多いです。警察は犯罪に巻き込まれたという証拠がない限り動いてくれない。だから家族は自力で探すか探偵に頼むしかないのが実情で、結構仕事になります」

彼によると、最も探偵らしい仕事は推理の醍醐味が味わえる行方調査という。五十年もの間、行方のしれなかつた親子の対面を果たした時は充実感をおぼえたという。たしかに最近の不祥事をみても、日本の警察は発生主義だから、もっと情報や市民の声に耳を傾ければ、防止できた事件もあるはずと思われる。

「探偵の看板は誰でもあげられるの。許認可はどう？」

「それが問題なのです。誰でもなれます。所轄官庁はありません。税務署へ行っても職業欄は『その他』です。

日本には千五百社ほどの探偵事務所がありますが、ややこしいのがありますから、うさん臭い仕事にみられます。本当は人間の影の部分に絶対必要な機能ですよ。早く市民権が欲しいものです」

アメリカの探偵は州法によって、審査をうけ素行もチェックされ、筆記試験をパスして「探偵」としての資格がもらえるので、勝手に看板をあげることは出来ない。何時だったか、アメリカでは人生に必要なものは、よい医者、弁護士、探偵とあるのを見たような気がする。日本でも、先進国の常として、近い将来には訴訟が日常化するだろうから、証拠や資料収集に探偵の仕事は増えるに違いないし、彼もそれを確信している。

彼は続けた。

「探偵のタブーは事後の詮索をしないこと。要はクライアंटの依頼だけを忠実にこなし、資料を渡して金をもらって終わり。後の判断は当事者が決めることで、探偵はコンサルタントでは無いということです。しかし会社の人事部育ちの癖がでて、ついつい深入りするから本当は失格なのでしょう。だから私はこの仕事で金を儲ける

ことはないと思います」

たしかに人事部は役員、社員をとりまく社内外のさまざまな人間模様や、人の悩みを見聞きして、仲介役や潤滑油の役目をしているから、彼の言うことはその通りだろう。「私は人間が好きなのです。少しでも人の役にたてば」との彼の言葉が頭に残った。探偵一年生に拍手を贈りたい。

湖東三山

遠藤 俊也

「湖東三山」とは、琵琶湖の東部にある三つの天台宗寺院をいう。百済寺ひやくさいじ、金剛輪寺、西明寺がそれだ。

かつては大寺院として隆盛を極めていたが、戦国時代末期兵火により大きな損害を受け衰微した。しかし、堂塔をすっかり焼かれてしまった百済寺は別として、他の二寺には山門、本堂、三重塔が昔のまま残っている。

何とかして一度訪ねてみたいと思っていたところ、地の近江鉄道バスがこの三山を巡る日帰りバス・ツアーを催行していることを知り早速予約して参加した。十一月三十日のことだ。遅れている紅葉がここではまだ楽しめるのではとの淡い期待もあった。

当日午前十時十分、新幹線の米原駅西口で私を待っていてくれたバスに乗った。予約客ですでに満席だ。彦根市を過ぎて間もなく西明寺に着いた。

案内書によれば、この寺は承和元（八二四）年に創建され、織田信長の軍が焼き討ちする前は諸堂十七、僧房三百だったとある。

みな一緒に長い参道を登っていった。道の両側は杉や檜の太木が茂り、その合間合間に黄と紅のカエデとモミジが見頃で美しい。とくに本堂付近の紅葉は見事だった。兵火を逃れた本堂と三重塔は共に鎌倉時代の建築で国宝だ。檜皮葺きのゆつたりとした勾配の屋根は古式の雅びを漂わせている。本尊は秘仏で本堂の中にあるが拝観できない。本堂の裏手にある重文（重要文化財）の木造釈

迦如来立像は拝観できた。鎌倉時代の作で、嵯峨清涼寺様式の立派な像だ。

しかし、ここでは、何と言っても国宝三重塔の内部を見なければならぬ。

大勢の観光客と共に、追加の特別観覧料を払ってなかに入る。須弥壇の中央には、鎌倉時代の傑作といえる大日如来座像があった。それを取り囲むように、四本の柱に八菩薩ずつ、全部で三重に菩薩が肉肌色もなまめかしく綺麗に描かれている。長押には、極楽鳥、宝相華などの花鳥が色鮮やかに浄土の雰囲気を醸し出している。天井は花文で飾られ、板壁には法華経の変相図が広がる。ここに立っていると、まるで浄土にいるようだ。

西明寺を去ったバスは国道を三キロメートルほど走って金剛輪寺へ着く。門前で昼食をとったあと、この寺の名だたる長い参道を休み休み登ったが、私のような高齢者にはきつかった。何しろ本堂まで六百メートルほどあるのだ。

道の両側は鬱蒼とした杉立ちで日はほとんど当たらな

い。そのうち石畳の上り坂となり、両側にこの名物の千体地藏が延々と続き出した。小さな石の地藏さんで、どの花入れにもセルロイド製と思われる真っ赤な色の可愛げな風車が差し込んである。そのうちの幾つかが、風もないのにゆっくりと回っている。どこからか微かに線香の匂いが漂ってきた。

あとで和尚に尋ねたら、今現在千八百体になったところだそうだ。わが子が冥土で幸せになれるよう石地藏を供養し、それに子たちが喜ぶと思い赤い風車を添えたのだらう。ゆっくりと歩きながらこれらの風車を見ていくと、人の世のはかなさがひとしお身に沁みてくる。

やがて参道は石段になって鉄の手摺が付き、それを登り切ったところに重文の二天門があった。すぐ向こうには国宝の本堂大悲閣がその優美な姿を見せていた。屋根は檜皮葺き、鎌倉時代の純和風建築である。その横にこれも檜皮葺きの重文三重塔がある。ここにも真っ赤に色づいたモミジが麗らかな午後の陽射しを一杯に浴びていた。

この寺の創建は天平十三（七四一）年行基によるもの

で、当時は松尾寺と呼ばれていたらしい。室町時代にはたくさん僧坊を持った大伽藍となったが、元龜年間兵火により大部分を焼失した。本堂、三重塔、二天門と仏像とが辛うじて残った。本尊は今秘仏となっている。

最後に、三山のうち一番南にある百済寺を訪れた。金剛輪寺からの距離は十キロメートル。

ここも参道が長いが、前の金剛輪寺ほどのことはない。半分ぐらいだろうか。ただ、石畳は自然石で組まれているから、階段状のところは歩きづらい。途中、立ち木の少ない空き地はみな昔の僧坊の跡だという。

ここの開山は三山のなかでも一番古く、推古十四（六〇六）年、当時湖東地方に多くいた朝鮮半島からの渡来人のために、百済国竜雲寺を模して創建されたと伝えられる。そのためか、初めは「くだらじ」と呼ばれていた。その後平安時代に天台宗の寺院として栄え、室町時代には僧坊に千二百人がすんでいたらしい。

しかし、室町時代末期には度重なる兵火に遭い、あまつさえ天正元（一五七三）年、三山のうち最初に信長軍

中国への技術ボランティア

吉 寄 清 巳

の攻撃を受け、金山ほぼ焼きつくされてしまった。本尊と、ほかに僅かな仏像、経巻が残っただけだ。

本尊は秘仏で拝観できない。ほかに残った仏像のなかでひととき私の興味を惹いたのは、高さ二三・四センチの小さな金銅製の弥勒菩薩半跏思惟像である。明らかに白鳳時代のもものと見られるのだが、全身に火を浴びていて、右肩は溶け落ちて痛ましい。あどけない顔、ほころびかけた唇が印象的だった。

参道の途中にある本坊喜見院^{きみいん}に戻り、美しく整った庭園を回遊したのち見晴し台に立った。眼下に湖東平野が一望でき、湖の遙か彼方比良の山なみの奥に、富士山のように比叡山の頂きがくっきりと浮かんで見える。私と並んでこの景色を眺めていたバスガイド嬢が言った。「何年もここへ来ていますが、比叡山がこんなにはっきり見えたのは初めてですわ」。

(平成十二年十二月八日)

私の専門は塗料技術である。定年退職後、財団法人・シルバーボランティアズ(JSV)に登録してから十五年になる。中国からJSVにくる専門家派遣の要請は年間四百件以上に達するが、最近は、塗料生産のようないわゆる工業分野については少なく、率では二〇%以下になった。農業の技能指導、日本語教師の要請が多い。

工業製品を生産している国有企業の多くは、外資と合弁会社を設立して、外国の技術を吸収しようと積極的である。また、市場開放政策の進展は、工業製品の輸出入の増加をもたらし、先進工業国とのビジネスチャンスを拡大した。このような市場の変化は、現役時代の技術経験のみを頼りにする定年退職者にとって、出番がますます少なく、また、やりにくくなった。

中国政府・対外科技交流中心とJ S Vの本年度派遣計画打ち合わせは、例年通り三月に行われた。塗料は三件の要請があった。私は三件の赴任を希望したが、そのうちの二件は、国有企業の経営悪化を理由に取り消しとなり、甘肅省・蘭州市にある西北化工だけが残った。

私はこれまで何回も中国に行ったが、渡航費は日本側のJ I C Aが負担してくれた。今回の西北化工は、国際運賃を含め滞在費一切を中国側が支払うという。これは今までになかったやる気のある要請である。

西北化工は半官半民の公司。五八%の株は国家が、残り個人が所有している。従業員は千百名、工場内に幼稚園・診療所・大きな招待所を持つ塗料大手である。すでに建築塗料についてはドイツ、イタリアの塗料会社と技術交流を進めている。

この会社は当初、私の赴任通知に色好い返事をしてこなかった。それはそうだろう。費用の一切を支払って、J S Vの専門家を招いても、赴任してくるのは七十五歳になる老人だ（私のこと）、日進月歩の技術に役に立つ

のかと、工程師（技術員）たちは思ってもおかしくはない。

私は自己宣伝のためノウハウの概要を甘肅省・対外科技交流中心を経由、西北化工に連絡した。ノウハウは、河北省、湖北省、河南省にある油漆廠の工程師たちと、長い間試作実験をして、できたものである。ある時は、私が工程師たちの休日出勤手当を支払って、実験計画を強引に進めてきた。この日中の合作ノウハウは中国の塗料会社に役立つものと自負している。

果たせるかな、歓迎するから来てくれとEメールが入った。発信者は董事・総工程師（技術長）であった。彼は三十五歳、一九八〇年代大卒の新エリートと言われる指導者である。五十二歳の董事長（社長）は、西北化工の生産量は九五年をピークに、昨年は半減してしまった。競合他社が増え、売れなくなったからと説明する。私は、市場経済になった今は、利益の出ない会社は生き残れないだろう。売り上げと利益が期待できる水溶性缶用塗料を開発したらどうか、については大学でホヤホヤの技

術を学び、英語で仕事ができる若いエンジニアたちと共同研究をしたいと提案した。覚書は総エンジニアがサインしてくれた。私とリモート実験をするエンジニアたちの月給は、八百〜一千元（二元〓十三円）、ボーナスは少額という。労費は値上がりしたといってもまだ安いのである。

ついこの間まで、私は国营工場の親方日の丸、いや五星紅旗のやる気のない雰囲気とうんざりしてきた。しかし、西北加工はぬるま湯に浸っている余裕は感じられなかった。弱肉強食の嵐は容赦なく襲ってくるからである。董事長は費用を負担するから来年五月に来てくれと言う。私は快く承諾した。

甘肅省の省都・蘭州市は北京の西千五百キロ、標高千六百メートルの高地にある。この町を横切って黄河は流れる。川幅は八百メートル、水量は多く、流れは速い。この泥水は二百七十万の市民を養う。人々は黄河に崇拜の念を抱く。雨の少ない華北を流れる黄河は流域各地で取水され、河口から一千キロ上流まで、河原が干上がっているという。

甘肅の山は植林しても木の育ちは悪い。褐色の山膚は陽光に輝き、谷間にのみわずかに緑が見られる。土だけの乾いた風景である。

M君の生き甲斐

折戸 常司

M君は旧制五年制の県立中学以来、五十七年間友人として交際してきた。しかし、M君は『友人』の存在を認めない信念を固持しているようだから、私は彼にとって利用し易い知人の一人に過ぎないと思われる。彼は人間は動物の一種で、同年代の輩は支配しなければ嘯み殺されるとの信念を中学時代から持っていた。

教室での授業でも教科書に沿った教育には納得せず、あの軍国主義時代に陸士、海兵を志願する生徒は「相手も武器を持って自分を殺しにくる戦場へ出て行くのだ」という認識不足の自信過剰者だ」と、軍事教練の場で配属

将校の進学指導に抵抗して往復ビンタを食らった。その際、配属将校も余程頭にきたのか、M君と私の名前を間違え《非国民》のレッテルを名簿上、私の名に印したため、私は校長に呼び出される羽目となったが、間違ひと分かり放免された。M君は校長と長時間やり合い、最後まで自説を曲げなかったのが彼の自慢で、半ば強制的に軍関係の学校へ入学させられることを恐れて四修で満洲にあった旅順工大付属高校を受験し合格した。中学の授業が終わると一秒を惜しんで自転車飛ばして図書館に走り込み、受験勉強をしていたM君の姿は今でも思い出される。

この配属将校の人違い事件が契機となって、私は彼の生き甲斐に特別な関心を示すようになった。彼の個性は極端な負けず嫌いで、他人の存在は自分の利益に貢献するのでなければ完全に無視するばかりか、自分より有利な立場にあると思われる同期生は蹴落さなければ気のすまない面があり、それが彼の『生き甲斐』のようであった。しかも《非国民》事件で彼に間違えられた私は、私の思いすごしかも知れないが、彼の《目の上のタン瘤》

だったような気がする。この二年後に日本は敗戦となり、旅順工大は千葉の私立千葉工大に衣替えし、M君も移籍したが、私が旧制四高から東北大経済に入ったことを知り、彼も東北大の工学部へ一年遅れて入学、卒業して日曹製鋼に入社した。しかし彼は「こんな田舎の会社では本多光太郎の後継者になれるような研究材料が得られない。金属工学など敗戦後の平和日本では金にならない」と、入社四年目で退職して東大経済学部を目指して二年間の受験勉強の後、学士入学し、私の三井物産と同業の、鉄鋼問屋の岩井産業(株)に中途採用された。

勿論、彼は鉄鋼問屋の口銭商いに不満で、海外のバイヤーと言いなりの価格で勝手な取引をして幹部の指示でマニラに転勤、鉄鋼に関係ない通訳を担当させられた。しかし彼はこの左遷を好機と捕らえ、比国駐在の米軍将校との交流を深め、米会話に堪能となり、退役後の米経済界の大物と、米国の先端技術の日本での特許申請に個人的に協力して大金を得たというのが彼の自慢の種であった。

M君は他人の情感は全く理解出来ないし、理解しよう

ともしなかった。特に青年時代は堅物か？変人？と同期生に思われるくらい若い女性を無視したので、彼の前では色気話は禁句だった。その彼から目黒雅叙園の結婚披露宴の招待状を受け取った時は我が目を疑った。お相手は彼の故郷の大手ゼネコンのオーナーの一人娘で学習院卒の上品なお嬢さんで、新居はすべて花嫁側で用意したとのこと。ところが、新婚五年目に奥さまから『是非お会いしたい』と涙声で電話があった。離婚仲介の依頼だった。「彼は実家の相続権の放棄の代償にアパートを買い、これを大奥にして側室を住ませ家庭を顧みない」というのが奥様の離婚決意の理由だったが、すでに二人の息子もあることだし、勤務先への影響も大きいと、思ひ止まるよう説得した。しかし、彼は上司の指示には無関心で、独断で不動産の売買を決済し、裁判沙汰になると二年以上も渡米して行方を暗ます行動に出たため、定年三年前に諭旨免職になったようだ。「大企業は牢屋みたいなどころだ。俺が先見の明で企業を儲けさせようとしても規則に反するとして潰してしまう」と嘆き、「お前は何時まで囚人をやっているのだ？」と定年退職後も事

業団に通勤していた私を軽蔑した。彼の生き方は現在の若者にはよく見られるタイプの一つかもしれないが、組織で高度経済成長に邁進していた当時では気遣い沙汰としか評価されなかった。

父親に奴隷扱いされている母親に同情的だった息子たちは父親の非常識な行動に転居、転職で雲隠れした。一方、そのころ奥様は肺がんに冒され、七か月の入院後、平成七年子供たちに高額の遺産の相続手続きが終わると同時に他界された。彼は社会の現実を徹底的に無視し、さながら源氏物語の主人公を人生の生き甲斐と夢見ていたが、側室の際限ない金銭要求に過労から脳梗塞に倒れ、左半身不随となった。そして、いまや『生き甲斐のすべて』を失い、老人介護施設で一人寂しく人生の終焉を待っている。

シベリア鉄道と日本（三）

大塚 滋

極東ウラジオストクと首都モスクワを結ぶソ連の大動脈シベリア鉄道は、昭和のはじめアジア・ヨーロッパに戦雲がたれこめてくると二つの戦略的弱点がクローズアップされてきた。一つはアムール河の鉄橋で、これについては前稿で述べた。

残る一つは全線の東側約三分の一の線路が中国との国境に近接しているため冷戦状態にあった中国からの攻撃の危険にさらされていることであった。この軍事的弱点をカバーするため計画されたのが、シベリア鉄道のさらに北側を走る第二シベリア鉄道（両端の地名からバイカル・アムール鉄道、略してバム鉄道とも呼ばれる）である。

シベリア鉄道のほぼ中間、バイカル湖に近いタイシエツトで分岐し、広大な永久凍土のタイガ（針葉樹林）地帯を東進しアムール河を越え、樺太の対岸ワニノ・ソフ

ガバニに至る延長四、三〇〇キロの鉄道で、中国に対する軍事目的のほかにも森林・鉱物など天然資源の宝庫である北部シベリアの開発と、ソ連太平洋艦隊の基地が新設された間宮海峡にのぞむ不凍港ソヴェツカヤ・ガバナへの補給路としても重要で昭和十二年（一九三七年）建設が開始された。

建設工事は難行を極め、永久凍土地帯では線路の凍上と、列車の通過による温度上昇で凍土がゆるみ逆に線路が沈下することを避けるため地表構造物ながら深い基礎をいれて橋梁構造として工事が進められた。アムール河の西岸コムソムルスク・ナ・アムールとタイシエツトの区間で工事が始められたが、折から独ソ戦が激化し一旦敷設したレールをはがして欧州戦線へ転用、工事は中断された。さらにコムソムルスク・ナ・アムールと終点ソフガバニ間約五〇〇キロは大戦末期、対日戦に備えて急造したお粗末な線路であり、改良工事が急務であった。

この中断した工事と、改良工事に従事させられたのが戦後満州から強制連行された日本人捕虜と抑留者である。終戦直後にスターリンが出したと言われる秘密命令

によると強制労働の内容は、バム鉄道の建設が最優先で、続いて沿海州の開発、ハバロフスク地方の建設工事などで、遠く中央アジアにも送るよう指示されていた。これらは明らかに武装解除後は祖国に帰還させることが明記されたボツダム宣言違反であるが、これによってかの悪名高い悲惨な「収容所群島」がはじまるのである。

最も多くの捕虜が投入されたバム鉄道建設、改良工事のうち、コムソムルスク・ナ・アムールから東への工事は、アムール河を渡って無人のタイガ地帯を進み、やがて急峻な分水嶺シホテアリニ山脈にさしかかる。この山越えは急カーブ、急勾配の連続で、人里遠く離れ酷寒零下三〇度、シベリアタイガーや熊も出没するなど想像を絶する過酷な環境のなか「枕木一本につき日本人一人の犠牲者」と言われるほど悲惨な工事であった。しかしこの苦役に対してはソ連からもロシアからも今日まで一切の補償は行われていない。最近になって当時の関係者がようやく労働に対する補償と、この鉄道に「日本」の名を冠して欲しいなどの要求をしようと言う動きが新聞に報じられていた。たとえ要求はしてもそれに応えてくれ

るような相手とはとても考えられない。

遠く中央アジアのウズベキスタンへ送られた捕虜たちが首都タシケントに建てたナヴァイ劇場が大地震でも損害を受けず日本の建築技術の優秀さが認められたが、その劇場の壁にソ連時代は「日本人捕虜によって建てられた」と言う銘板があったが、ソ連が崩壊しウズベキスタンが独立国になるや、カリモフ大統領は「我が国が日本と戦ったのではない」として銘板を「日本人によって」と書き換えさせたと言う嬉しい事実もある。

極東から中央アジアまで、往時の日ソをめぐる戦前、戦中、戦後の数多くの足跡がシベリア鉄道のいたる所に残っている。シベリア鉄道の旅はそれらを尋ねる旅でもある。

数年前、コムソムルスク・ナ・アムールから東へ、快適な一等寝台でシホテアリニ山脈を越えたが、その急峻な線形に驚き、ここに蟻の如く群がって、人力のみを頼りに苦役に従事した五十数年前の日本人の光景を思い浮かべ、窓から目がはなせず感無量、胸が熱くなったのを忘れることができない。

「シベリア鉄道と日本」、外国の鉄道でありながら我が国とこんなに長期にわたり、深い関係を持った鉄道はほかに例を知らない。

アメリカの憲政——大統領選挙に思う——

岡 政 昭

アメリカの大統領選挙が混迷した。民主、共和両党による大接戦は、フロリダ州疑問票の再集計をめぐる連邦最高裁を巻き込んだ法廷闘争にまで発展し、投票後三十六日を経た十二月十三日、ようやくブッシュ共和党候補の当選が確定した。選挙戦で先鋭化した両党の対立と議会勢力の拮抗は、いきおい内政、外交面における次期大統領の舵取りを難しくするであろう。

いわゆる「えくぼ」票の発生に啞然とし、手作業による数え直しの二転三転にうんざりしながらも集計がアマのボランティアを中心とする郡の選管に任されたこと、

州と連邦の裁判所が異議申し立てに対し迅速な審理を行ったことと、逆転の望みを断たれた連邦最高裁の判決をゴア民主党候補が「同意しないが受け入れた」ことは、地方分権による自治の尊重、連邦最高裁を憲法の番人とする法の支配、敗北宣言による選挙の政治的幕引きというアメリカ民主主義の特質を内外に印象づけた。

一般票と選挙人票とのねじれが異状なうえ、開票結果の確定に司法判断をもとめ延引したことをアメリカ訴訟社会の制度疲労と冷笑する声も聞かれる。たしかに国の威信は失墜し、政治の亀裂は深まった。しかし政策綱領に差がなく医療、年金、教育など内政重視型のどんぐりの背比べに終始した今回の大統領選にアメリカの憲政はしぶとく立ち向かったといえる。DNAの進化と発展になぞらえれば、二世紀にわたる三権分立・連邦制による共和政で行政権を担う大統領の選挙に関し、憲政の自浄作用として政党政治に違憲審査の洗礼を受けさせた。

イギリスから独立（一七七六年）した十三の州連合体「合州国」から、連邦憲法の制定を経て大統領選挙人制度による建国の父・ワシントンの全員一致による初代大

統領への選出（一七八九年）——「合衆国」の誕生へ、入植以来「はじめに州ありき」の連邦化である。それから七十余、奴隸制をめぐる連邦分裂の危機は南北戦争により回避された。一方、奴隸解放（一八六五年）の父・リンカーンが歌い上げた「人民の、人民による、人民のため」の政府は、建国以来内政と外交をめぐる対立から次第に党派化し、現在みられる二大政党による政権交代が常となった。他方、非ワスプ系の移民も増え、社会は多民族化してメルティングポットからサラダ・ボウルとなった。有権者の政党離れが指摘される今日、政党政治は若干の修正条項を加えて存続する建国時の連邦憲法を守り、時代の動きに適應する「多様からの統一」、「法の下における自由と平等」に基づく社会契約の履行を使命とする。今回台頭の新党・緑の党も同様であった。

振り返って、憲法に規定された大統領選挙制度は「人民からの直接投票——全国ベース」と「議会からの選出——各州ベース」を折衷した妥協案（州ごとに、過半数を得票した候補者が人口の比例配分によりあらかじめ割り当てられた大統領選挙人の全票を獲得する）であったが、

大統領が「（各州二名からなる）上院の助言と同意」を得て任命する連邦最高裁判事が違憲立法審査権をもったのは、一八〇三年マリーベリ対マディソンの判例によってであり、規定によるものではなかった。アメリカの憲政史はまさに独立宣言による人民主権の社会契約化——州と連邦に対する分権、成文と判例に基づく委任、政府権限の抑制と均衡による民主社会の進展に彩られる。

二十一世紀を展望するとき、議員内閣制下の首長公選も論じられる中、結局は密室型の「永田町派閥政治」から抜け出せず無党派による地方からの風穴開けを期待する日本、また統一通貨ユーロの導入後「ブラッセル官僚」による蒸留水型の思考を越えた政治統合を模索する欧州連合に対し、ガラス張りに開かれたアメリカ民主政治の試行錯誤は先訓となり、他山の石となるに違いない。

今回フロリダ州疑問票の手集計による数え直しについては、「投票者の明白な意図を判断しうる統一基準」と「連邦法で定められた期限内における手集計の完了」が争点となったが、「選挙人選出に関する州議会の権限」と「選挙に関する争いの解決は投票日前に制定された法

我がルーツは大湊

黒崎 昭二

律に従うとした規定」との抵触も問題視された。そして慣例的に州法に関する州最高裁の判断を尊重してきた連邦最高裁が「連邦憲法上の問題あり」として介入した。間接選挙制度そのものは憲法上当然との大前提にたつ。「何らかの形で郡の選管に共通の判断基準が見出されれば、期限は大統領選挙人の任命日を越えて投票日に延ばしてもよい」とした拡大解釈は少数意見にとどまった。判決は五対四に割れた。多数意見は司法の判断による期限の延長を立法権への介入として回避した。「連邦最高裁までも判事の政治任命による党派色に分かれた」と騒がれたが、法の手続きに従った公平と平等の秤は、結果的にブッシュ候補に向こう四年間大統領職の正統性を与えた。アメリカ憲政史上二回目の親子大統領となる。

Y2K問題で揺れた去年の正月。生まれて半年いたただけで何の記憶もない生誕の地に、二十世紀のうちにやってみようという本能的な衝動が起こった。平成十二年度の目標のトップに「大湊訪問」と手帳に書きこんだ。

昭和二年七月二日。その海軍病院で呱呱の声をあげた私である。父、黒崎林蔵は少佐で、当時大湊防備隊の分隊長を務めていた。その後間もなく横須賀鎮守府に転勤し、続いて呉、佐世保、馬公（台湾など）と異動したが、主として艦船勤務が多かった。後年大東亜戦争が勃発した時は、大湊を基地とする北洋監視艇隊の司令だった。戦局がきびしさを増すにつれて南洋に転じた末、昭和十九年二月トラック島付近で戦死した。五十八歳だった。

その父の供養として亡くなって半世紀を経た先年、江田島に行き父の母校の海軍兵学校（現幹部候補生学校）

を訪問した。島の主峰古鷹山にも登り、山頂で冥福を祈り詩吟をした。父は予備役の頃、趣味として詩吟に傾注した。次代を担う青少年の訓育にはこれが一番と信じ、しばしば講演に行った先々で吟じていた。当然その倅は、小学校の頃から有無を言わず仕込まれたのである。

詩吟供養で倅が次に思い立ったのが今回の大湊である。ほんの僅かだが、大湊の頃の写真が我が家のアルバムの中に残っていた。それに詳しいはずの母も既にこの世にはいない。氏名と経歴を名乗って海上自衛隊大湊地方総監部へ見学を願ひ出た。有り難いことに程なく許可がおりた。喜び勇んで出向いたのが十月二十日。前日夜遅く着いて駅前のホテルに泊まった。翌朝はやばやと起きる。折から天気晴朗。なんと眼前にかなりの高さの山が聳えている。釜臥山八七九メートルである。この地のシンボルであり守り神のように映った。海の男たちはこの山をしかと目におさめて母港の懷を出入りしていたに違いない。

海上自衛隊広報の担当官佐藤さんが迎えに来て下さった。なだらかな斜面に自衛隊の諸施設があり芦崎湾には

護衛艦が停泊していた。ドックなどの諸施設を案内頂いた後、護衛艦「いしかり」に乗艦。しかるべく説明を受けた。小さい艦だが、コンピュータ制御の塊である。爽やかな風を受けて艦尾に翩翻と翻る旭日旗を仰ぎ見て、得も言われず目頭が熱くなった。

昭和初頭、不惑の歳を迎えた父はここで猛訓練の先頭に立っていたはずである。その倅の私は昭和二十七年社会人になった当初室蘭の製鉄所に赴任した。海を隔ててはいるものの生まれた土地大湊に一番近い所だ。開けば明治の中頃この両方の地は、日本の北の守りの軍港の設置で、共に候補にあがったという。私は長い製鉄生活の間にもっと早く訪問すべきだったかとちよつと悔いが残った。

さして大湊の歴史がわかる北洋館なる建物に案内された。館長の村田さんと懇談し、古い我が家のアルバムをお見せしているうちに、村田さんが父と兄の写っている写真一葉を見て「ここじゃないですか」と。つまり北洋館そのもので、その昔の海軍の社交施設である水交社であることがわかった。石造りの玄関の車寄せが石の色

も形も七十年前の写真そのままなのである。

北洋館の展示には山本五十六元帥ほか有名な海軍の将星の揮毫や遺品が沢山あった。見学を終わってから感謝の詩吟を講堂でさせて頂く。題は広瀬武夫の「正気の歌」。次に構外の官舎群を見て回った。父の住んでいた即ち赤ん坊の私が育てられた石造りの建家も昔のままに残っていた。むつ市歴史資料保存館になっている。海軍病院も新築されてはいたが、昔の場所の高台に。ここからは軍港が一望のもとに見える。私は無量の感慨をもって眺めていた。

最後は釜臥山の脇を通って車で霊山「恐山」へ。先ず本堂に拝礼。昔から死者の魂と残った肉親とがイタコの仲介で話し合えるという所。水蒸気が噴き出ており硫黄も臭う荒涼とした大地。賽の河原の一隅にある地藏堂に赴き、父の軍服姿の写真を納めて合掌。清澄な水を湛えた宇曽利湖を前にして、倅はここで満腔の思いを込め父の句を声高く吟詠して供養する。

〈沖はるか黒潮吼ゆる波の上 秋津島根の垣根守り人〉

かくして、大湊で海軍の壮年士官として活動した父を

偲ぶ供養と、その倅のルーツ探訪の行事は恙無く終わった。

一両日自衛隊内部を見学して「国を守る気概」を肌でひしひしと感じた。ほかに街のそこそこを見て歩いた。食堂にも立ち寄ったし本屋も覗いた。パン屋もスーパーも。大湊の人はよく働くし親切そのもの。ちよつとした対話の中に思いやりが溢れている。朴訥な訛りの言葉を聞きつつ下北地方の純粋な風土に接し、ミレニアムの記念すべき最高の思い出ができた。

むつ市大湊。キラリと光る北の街。海上自衛隊と共にとわに栄あれ！

名 刺

都 甲 昌 利

私をはじめて名刺を持ったのは、当時三千人ほどの会社就職したときだ。入社式を終えて配属先が決まると、

会社が名刺を作ってくれた。いよいよ社会人になったという感慨があった。新入社員の私の名刺は、会社名、部、課、係名、氏名、それに左下に会社の住所と電話番号が何行にもわたって書かれてあった。百枚入りの箱が二つ渡された。最初はこんなに多くの名刺が必要なのかと疑問に思った。だが、半年ほどでなくなってしまった。商売で人に会うのが仕事だったので、代理店、メーカー、官庁、マスコミ関係を上司と一緒に歩き回り配りまくったからだ。

「君が接する人はみな大切なお客様なのだから、頭を低く。それに君はペーペーなんだから……。まあ、係りの名が取れるのは十数年先だな」彼は偉そうに言った。名刺はまったく便利なものと思った。おおよそその人間がどんな仕事をしているかがわかる。しかし、便利さだけで、こういう人物かを表さない。悪人かもしれないし、善人かも知れない。ここに名刺の持つ恐ろしさがある。日本の企業風土はどうも名刺によって動いているようだ。それも名刺に書かれている肩書や企業名によってだ。

名刺が簡単なほど偉いという説がある。会長や社長のは肩書、社名と氏名だけだ。私の名刺が簡単になったのは支店長として海外に赴任したときである。会社名、支店名、肩書、それに氏名だけになった。外国での生活は、大使を頂点として、銀行、商社、メーカー航空会社などの駐在員が身分を競い合う不思議な社会である。大使の名刺は、『特命全権大使』という肩書と氏名だけだ。

もっと簡素な名刺にめぐり合ったのは、日本の著名な作家がこの国に來られた時だった。文壇でも大家と言われたが、「お世話になります」と言って丁寧挨拶され、和紙に氏名だけの上品な名刺を頂いたときには恐縮したものだ。この時、名刺は単に身分を明らかにするだけでなく、その人の人格をも表すものだということを私は知った。名刺はもはや紙切れではなく、人そのもののものだ。だから、役人が知事の名刺を折り曲げると、無礼だと話題になるのだ。

このことがあってから、私は名刺を通して、持っている人と、その名刺を持つことを強要している企業なり会

社の品位というものを観察するようになった。小さな紙面に、所狭しと美的感覚もなく、支店名や商品名を載せているのもあれば、会社や自分を目立つようにサイズを大きめにしているものもある。

ところで、超有名人でテレビや新聞に毎日出てくるような人物は、名刺を持っているのだろうか。巨人軍の長島監督は名刺を持っているのだろうか。世界的に有名な指揮者は名刺を持っていないという。名刺を持っていない階層は一般的にいつて、子供、学生、主婦、失業者や定年退職者のような社会的弱者だろう。超著名人と社会的弱者が名刺を持たないというのは興味ある皮肉な現象だ。

定年退職者の私は退職した時、会社生活と決別するために名刺を持つことを拒否した。だが、最近では他人と会う機会が多くなったので名刺を作った。名刺の肩書をどうしようかと迷った。適当なものがない。「無職」「定年退職者」「年金生活者」いろいろ考えたが、氏名と住所、電話番号だけにした。

定年退職者で、会社時代の「常務取締役」とか「専務

取締役」とか書いてある、余った名刺を出す人がいる。過去の栄光を引きずっているようで哀れだ。最近見た映画『ストリート・ストーリー』の中で、「老人の一番つらいことは、人生の最高のときを覚えていることだよ」という台詞があった。老害を撒き散らして、醜さを感じない老人の気持ちにはわからないでもないが、老人は最高のときを忘れる潔さが必要だろう。

最近の世の中の変化は凄い。一流と言われた大企業がどんどん倒産している。こうした風潮のなか、大学卒業生の就職が大企業志向でなくなっているという。自分の能力と個性が活かせる職業に就きたいと希望しているためだ。将来は、肩書も会社への帰属を示すに過ぎなかった名刺から「メディア・アナリスト」「CGデザイナー」とか「デバイスソフト・エンジニア」などに変わってゆくだろう。いや、それとも、名刺などはなくなり、個人はあらゆる情報を書き込んだ小さなチップを持ち歩き、それを交換する時代が来るかも知れない。

熟年離婚の火種

新山 章一郎

「糟糠の妻」を亡くして十余年、当時高三だった息子が社会人になり、独立するまでの一時期、ほんの真似事ながら食事の世話などをしてきた。その中で経験したことを、親父と息子ではなく、食事を「作る人」と「食べる人」即ち妻と夫に振り替え、考えてみた。

朝、いつもの出勤時間に合わせ、眠いのと寒いのを我慢して温かい寢床から起きだし、朝食を作る。料理をしながら一階から何度か怒鳴る。なかなか起きてこない。二階に行ったらたき起こすと「今日は現場直行だから一時間遅くてよかった」と迷惑顔。それなら一言いっておいてくれればもう少し寢坊できたものを。こっちのことなど全く頭にならない。

帰宅時間は全く不規則。まあ九時頃とふんで、その頃に温かい夕食をと用意しておく。帰ってこない。料理はさめてしまう。一日働いて、腹を空かせ、寒いなかを帰

ってくるのだと思うから、料理を二度も三度も温め直す。そのうちにせっかく作ったものが煮くずれて、味も形もおかしくなってしまう。出せば大抵黙って食うが、出す方の心の問題だ。こちらの善意と努力が水泡に帰している。

毎日誰かに食事を出さなければならないということは大変な負担だ。その責任感は重い束縛として常に心に引っかかっている。ある共働きの新妻が言っていた「職場にいても午後三時頃になると夕食のことを考え、仕事どころではなくなる」と。またある放送局の女性アナウンサーは、「また食事を作らなくてはならないと思うと朝、起きたくなくなる」とも言っていた。彼女には中学生の子供さんがいるというから、中年の熟練主婦にとっても食事作りは大きなストレスらしい。

僕も毎朝、目が覚めたとき「さて今日は何を食わせようか」と思い、夜寝るときには「明日は何にしようか」と悩んだ。だから主婦たちは夫から「今晩は飯はいらない」と言われるとほっとするという。「亭主元気で留守がよい」とは妻にとって正に至言であろう。

この義務感は「食事を作る人たち」の社会行動も大きく制約する。サークル活動などでも、食事の準備をする時間になると、講義中でも先生に深く礼をしてそっと教室を出ていたり、またダンスパーティー等でせっかく楽しい最中を、そそくさと逃げるように帰っていく女性も少なくない。食事を出すという文字通りの茶飯事が、その裏には妻側の大きな犠牲と忍耐とが毎回払われているといえよう。

別の面もある。多くの女性は食事を愛情とからめるようだ。彼女たちにすれば食事こそ日常の愛の表現の場であり、食事をするということは愛を確かめる行為でもあるらしい。日本の普通の夫婦は、アメリカのように毎日「アイ・ラブ・ユウ」を連発し、のべつまくなしでチュウ、チュウやって、互いの愛を確か合うような生活を送っているわけではない。そんな乾いた日々の中で、夫婦が面と向き合い、妻が愛情を込めて作った料理を間に、じかに話が出来るのは食事時ぐらいかもしれない。そこに愛の交換を期待するのは愛に生きる彼女らにとって当然のことだ。

このことの重大性がいま熟年の夫族には全く分かっていない。彼らにとって飯を食うということは単に生理的飢えを満たすだけのことだ。そこで時に新聞を読みながら、またテレビを見ながら、この不断の努力と忍耐と犠牲の、そして愛の賜物を、ただもぐもぐと胃袋にほうり込んでしまう。多くの場合、一言の感謝も、愛とねぎらいの言葉もないままに。

これは妻たちにとって許せないことだろう。彼女らの献身と愛情がないがしろにされているのだ。しかもそんな「犠牲と忍耐のみで生き甲斐のない毎日」がこれからも、どちらかが死ぬまで続く。そんな中で自らを消耗し尽くし、あげくの果てに、その張本人の夫のおしめを取り替えながら年老いていく。統計的に女性の方が長生きだからそのリスクは高い。「私の人生ってそんなものなの」そう考えたなら、彼女らにとって事態は絶望的だろう。問題はこのような妻の立場と心のゆらぎに対する夫のあきれるような認識不足と無関心さだ。人は自分の悩みが相手に通じていると思うだけで、かなり癒されるという。無理解な夫からはその癒しさえもが与えられていな

い。

夫族が当然の権利として無意識に享受している平穩無事な三食付の毎日。それが離婚の火種の一つになっていくのを彼らは知らない。毎日の食事だけでもこんな具合だ。日本の熟年亭主らは、夫に一生を賭けた妻の献身とリスクに対し、経済的な扶養をもって事足れりとし、彼女らに「生き甲斐、愛し甲斐、サービスし甲斐」そして「癒し」のある毎日を、人としてのリターンを与えない者が多い。

以上亡妻への陳謝を込めた懺悔の一文であるが、夫の側になんの心当たりもないのに、何かの節目に突然離婚を言い出す熟年妻たちの気持ちが少し分かったような気がした。



コーチがすべて

八木 大介

正月休みにオーストラリアへ旅行した。アデレードのホテルで、プロゴルフを教える日本人のコーチとサウナで一緒になった。ちょうどオーストラリア人の若い女性がサウナを出て行ったところだった。

「可哀相にね。色白でなかなかの美人なのに……」

背は私と同じくらいだが、体重は百キロを超え、ウエストは三段腹、相撲取りのようにのしのしと、ドアを突き放して行った。

「あれはやはりDNAですかね」

「DNAは半分で、食生活が半分でしょう」

「あれでも誰かがダイエットのコーチをしてやれば何とかになりますかね」

「アマチュアはあれでも済みますが、プロとなると、ボクシングやレスリングをはじめすべての競技で、ダイエットできないと生きて行かれませんからね」

「減量もコーチングの問題ですか」

「ボクシングやレスリング以外にも、減量させてフラフラのまま下のクラスで戦わせた方がよいか、ウエイト的には不利でも体力を充実させて上のクラスでやらせた方がよいか。その辺は選手の総合力を見抜くコーチの能力です」

「シドニー五輪のマラソンで金メダルを取った高橋尚子も小出コーチの功績だと言いますね」

「最近では日本のスポーツもコーチングやトレーナー制度が発達して、水泳や陸上などの個人競技でも金メダルが取れるようになりました。昔は旧軍隊の名残でシゴキや猛訓練が練習だと思っていましたからね。猛訓練では強くはなっても上手くはなりません…」

団体競技では体力と頑張りがあれば、ある程度は勝つたので、日本も比較的活躍できたが、それでも限度があった。最近サッカーや女子ソフトが強いのは合理的な練習方法の成果である、とのこと。

「それでも基礎体力は必要でしょう？」

「相撲や柔道、あるいはスキーなど倒されたり転んだ

りするスポーツは、怪我防止のために体全体の筋肉を鍛えておく必要があります。しかし余分な筋肉は技術向上に役立たないだけでなくマイナスになることもあります。マラソンの選手がカール・ルイスのような体格になったら、到底42キロは走れませんからね」

「ゴルフ選手はジョギングや屋内トレーニングはやらないんですか」

「上手くなるためにはゴルフの練習だけです。クラブの素振りも意味がありません」

選手が素振りをするのはメンタルなリズム感を得るだけで、ショット力の向上は実際にボールを打つしかない。

「野球の投手の野球肘も練習の後は直ぐ冷やし、炎症や痛みを翌日に引きずらないことが第一です。投球力を上げるにはピッチング量よりも腕の破壊限度ぎりぎりまで切り上げ、早急に腕の疲労を回復させる方が重要です。スポーツは全般的に練習よりも疲労回復や休養です。逆に言えば、故障が恐くて十分な練習をできないところにプロの悩みがあるんです」

「日本は全般的に監督やマネジャーの選手育成、コー

六十四年ぶりの金メダル

西島 力

チやトレーナーの技術指導、スポーツマッサージやスポーツ医療などの遅れが目立つようですね」

「スポーツはアメフトから始まって、頭脳の勝負になりました。頭の悪い監督やコーチでは勝てません。サッカーのトルシェが良い例です。日本のプロ野球も監督やコーチ中心に変えたら繁盛しますよ。パ・リーグなど早速やってみたらどうですかね」

「と言うと、具体的には……」

「年初めに監督が球団から選手強化費を含めた年間勝敗の請負契約をします。コーチは固定給五百万円で二十人以上抱えます。選手はコーチと個人契約しますが、コーチが三割打者など名プレイヤーを育てたら、何億円ものボーナスを払うわけです。すべての契約内容を公開すれば、ファンも各選手の活躍に熱狂しますよ」

「一本足打法の王選手を育てた荒川コーチのようなものですね」

それだけ言うとうと頭がふらふらして、サウナをさまよい出た。プロ・コーチは平気な顔をして汗をばたばた流し続けていた。

二〇〇〇年、シドニー・オリンピック女子マラソンにおいて、日本の高橋尚子選手が金メダルに輝いた。オリンピックの陸上競技で日本が金メダルを取ったのは実に六十四年ぶりだと、テレビのアナウンサーが何度も強調した。

つまり、一九三六年ベルリン大会の男子マラソンにおいて、と言っても当時は女子マラソンなどというものはこの世に存在しなかったのだが、「日本の」孫基禎選手が優勝して以来の快挙ということである。

当時、小学一年生の私は学校で先生から、そもそもマラソンとは何ぞやという話から、「ソんキテイ」というその選手の日本式の呼び名を教わったことを鮮明に覚えている。

それ以後、日本の金メダルのほとんどは柔道であった。世の柔道族には悪いが、柔道が日本のお家芸である限り、

オリンピックでの金メダルはいささか割引きされてもいたし方ない。しかし、嘉納治五郎先生の理想通りジュウドウのグローバリゼーションがますます進めば、それだけ日本の金メダルは難しくなり、従ってその価値も高まるうというわけである。何といってもオリンピックの本道は陸上競技、なかならず「駆けっこ」であろう。面白いことに日本の金メダルは六十四年前も今度もマラソンである。近年、短・中距離はアメリカを主とするアフリカ系つまり黒人選手の独壇場になっている。何故かアメリカはマラソンにはほとんど興味を見せていない。しかしアメリカ国民は何でも世界一にならないと納まらないという奇妙な性癖を持っているから、ある日一念発起して、その黒人パワーをマラソンにも投入すれば、日本は二十一世紀を通じて金メダルから見放されるだろう。

さて、六十四年前に戻る。孫選手の快挙はすなわち国威の発揚であると信じた国民は一斉にバンザイを唱えたが、表彰台上がって日の丸を仰ぎ君が代を聞いている孫選手の心は屈辱で張り裂けんばかりであった。民族の誇りが許さなかったのである。その晴れ姿の写真の胸の

日の丸を墨で黒々と塗り潰して新聞に掲載した東亜日報は、大日本帝国朝鮮総督府から発行禁止の処分を受けた。それから五十六年、バルセロナ・オリンピックの男子マラソンで、韓国の黄選手が日本の森下選手を振りきって優勝を飾った。白髪の孫基禎老はマラソンゲート前で涙を流して韓国旗を打ち振った。ソウルは興奮の坩堝と化した。ついに恨（ハン）は晴らされたのだ。そして今シドニー。六十四年前の金メダルに関わる私の想いはどういうわけか高橋尚子を素通りして地元オーストラリアの国民的ヒロインたるキャシー・フリーマンに重なる。

女子四百メートルの優勝テープを切ったキャシーは、嵐のような歓声の中で、しばらくトラックに跪いていたが、やがてオーストラリア国旗と、赤と黒地に黄色の日の丸を染め抜いたアボリジニの旗を握り締めてウイニングランに移った。このアボリジニの旗はふだん公の場で掲げることを禁じられているものだが、この時ばかりは格別の計らいで「黙認」するむね事前に政府から内示があったという。何と恩着せがましい話だろうか。

たかだか二百年前にこの大陸に渡って来て、のちに

う「建国」なるものを行ったイギリス人たちは、すでに四万年前からここに住みついているアボリジニを人間とは認めず邪魔物として絶滅させる方針をたてた。そしてゴキブリよろしく砒素入り団子で毒殺したり、あるいはゲーム感覚でカンガルと一一緒に鉄砲でポンポンと撃ち殺したりした。こうした「合法的民族浄化」の結果、十九世紀はじめには三十数万人いたアボリジニが、第二次大戦末期には実に六分の一に激減していたのである。その後、政府は保護と融和に転じたが、生々しい虐殺の記憶は消えず実社会での差別と抑圧はいまだに解消していない。

オリンピックの開会式でアボリジニ復権の活動家でもあるキャシーを最終聖火ランナーに起用したり、多民族融和の大ページェントを繰り広げたり、主催者の懸命の工夫にもかかわらず「しらじらしさ」は拭い去れない。

私はオリンピックの勝者でキャシーほど暗い複雑な表情を見せた選手を知らない。それは、日本のヒロイン高橋尚子の、その実年齢より十五歳は若く見えるあどけない顔に、こぼれんばかりの笑みを浮かべて金メダルを齧

って見せる仕草とは極端な対比をなしている。
六十四年の歳月を隔てて孫基禎とキャシー・フリーマンの二人の金メダリストの間に類似点を見出だすとすれば、表彰台でのそれぞれの「国籍」がいずれも括弧つきであったということだろうか。

小雨にけむる京都での集い

中洲 靖雄

秋とはいえ紅葉にはいまだ少し早い十月下旬、ささやかな京都・嵯峨野巡りを楽しむことが出来た。きっかけは、福岡在住でパソコン通信仲間の一人I夫人である。十月中旬、京都の紅葉狩を兼ねて当地へお出かけになりました。まず、急に都合がついたからと上洛してきたのである。

慌てて京阪神地区在住の通信仲間と連絡をとったところ、急な集いの呼びかけだったこともあり、集まった顔

ぶれは私自身を含めて計四名。このほか夕食時には、埼玉県在住ながら常時滋賀県の両親宅を訪れている仲間の一人が、駆けつけて参加してくれることになった。しかしそこは日頃、通信上で気心を知る面々ばかりであるだけに小人数ながらも結構楽しい集いとなったのである。

小雨が降ったり止んだりの当日昼過ぎ、京都駅に降り立ったI夫人を出迎えた私たちは、日暮れが早くなってきた時期と雨模様の天候を考え合わせ、駅前の個人タクシーを貸り切って目的の嵯峨野巡りをする事となった。

嵐山と言えば渡月橋とともにやはり天龍寺ということになる。運転士がガイド役も兼ねてくれたのだが、ここで霧雨に煙る嵯峨野のえも言われぬ、さながら墨絵を見るが如き光景に思わず見とれてしまった。天龍寺の裏庭から見る借景は、いにしえから美しいものとされ、多くの人が引きもきらずに訪れるところである。が、背後の岩田山にはけむるが如く「もや」がたち込め、これほどまでに趣の深い光景をকাশし出すとは想像をはるかに超えるものがあつた。そばふる小雨がもたらした天からの

贈り物だったとも言えようか。

次いで運転手が、三々五々と観光客が歩く細道を縫うように案内してくれた所、それが野宮の竹林であつた。もともと昼なお薄暗いほどに生え揃う見事な竹林。そこへお天気は小雨模様ときたから、まさに夕闇迫るが如き霽開気の中で観る野宮の竹林は絶景というべきか。京都ならではのまことに結構な景観だった。

車は嵯峨野の霽開気をいっぱい秘めた小道を進み、常寂光寺を経由して小倉山麓は尼寺の祇王寺を訪れたのである。竹と楓に囲まれた小さな尼寺、平家物語ゆかりの庵とかで、清盛と四女性の木像が安置されている。苔が小さいながらも庭一面に生え揃い、秋は紅葉が美しくうだが、その美しい紅葉には少し時期が早すぎたのである。

私たち一行は、次なる目的地の奥嵯峨野・化野の念仏寺へと向かう。この寺は約千百年前、弘法大師が付近に野ざらしの死者を弔うために建てた寺だとか。境内に八千体を数える無縁の石仏・石塔を配列したとされる様子は、思わず息を呑むような光景である。聞けば、地藏盆

の夕刻に行われるこれら無縁仏の靈にローソクを供する千灯供養は、多くの参詣客を呼ぶとのこと。

仕上げは大覚寺の大沢池とし、ここで嵯峨野探索にビリオドを打つこととした。夕食の予定場所―二条の「二条苑」に向かう時間が迫ってきたからである。この料亭、高瀬川源流庭苑を持ち、加茂川の岸辺で素晴らしい庭園を持つということから夕食会の会場として選んだのである。なるほど、庭園が素晴らしいこともあってか外国人客が随分と多かったようだ。

京都の懷石料理は京ならではの手の込んだ郷土料理。しかし、そんな料理などそっちのけで盛り上がるのはなんと说着ても―お喋り―である。話題はパソコン関連になるのは当然のこと、わいわいがやがやかしましく、時間の経つのを忘れてしまうのである。かくして時は午後の八時、別れを惜しみつつ、近いうちに再会を約して別れたのであった。

ところで、奥嵯峨野・念仏寺で心ばかりの喜捨をし、貰ってきたチラシには、次ぎのような含蓄のある『俗世間 つもりちがい十ヶ条』が記されていた。

- 一、高いつもりで 低いのは 教養
- 二、低いつもりで 高いのが 氣位
- 三、深いつもりで 浅いのは 知識
- 四、浅いつもりで 深いのが 欲
- 五、厚いつもりで 薄いのが 人情
- 六、薄いつもりで 厚いのが 面の皮
- 七、強いつもりで 弱いのは 根性
- 八、弱いつもりで 強いのが 我
- 九、多いつもりで 少ないのは 分別
- 十、少ないつもりで 多いのが 無駄

初秋の京都、最も京都らしさが溢れる嵯峨野を訪れ、しかも時期と天候がもたらしてくれた光景と雰囲気には、今更ながらの感慨に浸らせてもらった。その上訪問したお寺で貰い上げたチラシに盛られた格言、寸言の数々もまた、意義の深いものであった。そんなこんなで、久しぶりに京都の良さを満喫させてもらった有意義な集いであった。

交換日記

西川 永幹

夏に胃の摘出手術を受け、十一月にまた、腸閉塞のため、もう一度開腹手術をした。娘は十一月の手術の時は一週間勤めている会社を休み、私にずっと付き添ってくれた。夏に、仕事のやりくりをして私の身の回りの世話をしてくれた時と較べ、意気込みが違うように感じられた。

手術があったのは十一月二十日(月)、少し経つと私に「何かして欲しいことはあるか」と聞く、例えばどんな食事を作って欲しいとか、家で介護ベッドが欲しいとかあれば手紙に書いてくれと言う。自分は編集の仕事で忙しくパパとあまり話す機会がない。手紙に書いてくれればできるだけパパのやって欲しいことをしてあげるようにすると、彼女は言った。私は一日ほっておいた。すると娘は市販の「無印良品」のノートを買ってきて「これで交換日記を書こう」と言う。「でもパパは日記はつ

けているし」と言うと「あれは他人に見せないパパの自分のことを書くところ。交換日記は私とかお兄ちゃんとかが読むことを前提として、書くものだ」という。

私は夏の手術のあと、十キロも体重が減り、そのやせ身体で二回目の手術を受けた。この先どうなるのだろうか。私の心は割と平静だったが、娘は居ても立ってもいられぬ気持ちだったのだろう。私の娘は二十七歳である。娘の母親は十年前に他界した。この十年間、私なりに若い娘の父親として子供をどうやって育てたら良いか、苦労したつもりであるが、娘はそれをどう感じてくれたか、直接話したりする機会はなかった。

ママが亡くなってから、娘は料理を分担し、家族四人の食事を作った。どこで憶えたか色々工夫して飽きない料理を作ってくれた。娘の料理で大変だったのは、時として私の勤めの関係で急な用が入り、食事を済ませて家に帰ることがあることだった。サラリーマンの娘であった亡妻は「今日は会社で食事を済ませた」という私の言葉に対して理解があり、許してくれた。中・高校時代の教育を現地校で受け、「合理性」とか「自己主張」を身

につけたせいか、娘はサラリーマンの娘でありながら「会社で食事を済ませた」という私の言い分を一切認められなかった。「家で食べられないのだったら、あらかじめ連絡して」と言う。「急に食事が入り」ということは、私の場合はその日のうちという意味であった。その日になって家に電話をかけても娘はもう学校に出たあと、仕方なしに食事を済ませてから家に帰っても娘は許してくれなかった。「食事が用意してあるのに食べて帰るのは作った人に対して一番失礼なんだよ」と言っても聞かない。結局、私は満腹のお腹に娘の作った冷めた食事をもう一度食べるにより解決せざる得なかった。妻は何かと言って結局は他人である。だからある程度のところ夫との間の「社会的関係」に思いを馳せ、妥協する。しかし、娘とは血を分けており他人ではない。だから娘は父親との妥協など考えたこともないのだろう、と私は思った。他の学生だったら、家の面倒など見ずに遊んだり、勉強したりしていられるだろうに、そう思うと私も娘に対して、ついつい甘くなってしまう、あまり強い態度では挑めなかった。

娘の私に対する接し方にちょっとした変化の兆しが現れたのは、大学を卒業し、就職してからである。ご多分に洩れず、娘は就職すると自分の勤めている会社に不満を持つようになり、そんな会社に勤めている人たちの多くは「社会人として尊敬できない」と感じるようになった。それまで「尊敬できない社会人」と考えていた人物――即ち社会人としての父親――の相対的評価が上がったのかとも思う。自分の職務でこういうことがあったけれどもどう考えるか、英文の手紙を頼まれたが、日本人の書く英語として目を通してくれないか、そういったことを頼まれると、「父親としての私」は嬉しかった。

そして、それから数年経つての娘からの「交換日記」の申し出である。娘が「交換日記」を書く理由として挙げてきた「本音」の部分、つまり、改めて書いておかないと娘との正確なコミュニケーションができないという部分に加えて、私が娘についての記憶で娘に知らせておきたいと考えること、を伝えることもできるかと思った。この中には、娘が小さいころのことで、もしかしたら娘がもう憶えていないと思われる頃の記憶とか、「夕食を

二度食べさせられた」といった娘の当時の考えを聞いてみたいといった類の思い出と、二つ含まれる。それと、現在の入院生活の中で、私がどう感じているかということとを私も娘とシェアしたいという気持ちもあった。そう考えた時には、茶の表紙の「無印良品」ノートが私のベツドの書き物机の上にすでに置かれていた。

2000. 11.25 袖ちゃんへ ……パパより

2000. 11.26 パパへ ……袖ちゃんより

かくして、私の二冊目の日記帳「交換日記」は自分の「日記帳」から遅れること四十五年余にして出発したのである。

(筆者は二〇〇一年一月二十四日逝去されました)

ほおけた事件

藤井 長治

やれミレニアムだ、IT革命だと、騒々しかった平成

十二年、僕は今までにないような頓馬な事を三つもしてかした。これらの頓馬をまあお聞きください。

五月下旬のある朝、毎日のついている田園都市線たまプラーザ駅の改札口で、いつものように名刺入れから定期券を取り出そうとしたが、ない。いくら探してもない。途中で落としたか、家に忘れてきたか。物がなくなる時は、その前後はまず覚えていない。仕方なく田町駅までの切符を買って、駅員に定期紛失の旨を届けた。「一、二日後にまた来てみて下さい。出てくるかも知れませんよ」と駅員は丁重に応じた。

水天宮行きの電車に乗って、いつもの通り二子玉川―大井町―田町まで乗り継いで、芝浦の勤務先に入ったが、一日中定期券のことが頭にこびりついて落ち着かない。夕方、田町駅で切符を買ったが、たまプラーザ行きの切符は売っていない。ちよつとろたえたが、途中までの切符で乗り越すより手はなさそうだ。自販機で切符を買う煩わしさを味わってたまプラーザについた。改札口の駅員室に立ち寄ると、拾得名簿に僕の名前はのっていない

いと、冷たい返事だ。

翌朝また改札口で尋ねると、僕の定期券が拾得簿にあるという。あった！　すぐ捺印し、定期券を受け取った。落とし物が出てくると、人間はこうも気分が晴ればれるものか？

駅員曰く「改札口を出るとき、取り忘れたようです。以後お気をつけて下さい」

僕「ありがとう、ありがとう」

八月十一日―二十日までJRはジパング倶楽部の三割引き切符を受け付けない。それなのに甥のやつ、よりによってこの割引のきかない時に結婚式をあげるとは、と恨んだものの、こっちのそんなことにまで気を回す暇がないのは当たり前のことか。結婚式は八月十九日、その前日の十八日豊橋に下車、墓参り、九十七歳の義母と中学の同級生に会い、その翌朝名古屋の結婚式場に入る予定をたてた。

十八日朝、式服を携え、いそいそと新横浜駅に向かった。新幹線の待合室でコーヒーでもすすろうかと、改札

口で洋服のポケットに手をやった。

昨日買った切符をいれた小袋がない！　どのポケットにもない。さては家に置き忘れたかと、地下鉄にかけおり、あざみ野行きにとびのった。たまプラーザから車で家に急進、書類や財布などをいつも置く寝室の小箆箆や机の上を、目を皿のようにして探すが、ない。洋服ダンスの背広のポケット、リビングルームのテーブルと探しまわるが、出てこない。

時間はどんどんすぎる。豊橋の待ち人のことも気にかかる。『ごだま』も一、二本はもう見逃した。よし、もう一度切符を買おうと腹を決め、新横浜で名古屋往復の新幹線切符を買って豊橋に向かった。車中、なくした切符の所在をあれこれ考えた。前の晩、寝室の机の上で、切符代金を出納簿に書き入れた。その時切符を手にしていたような気がするが、そのあと、どこに置いたか思い出せない。朝家を出る時切符をたしかに持っていたか、はつきりしない。

それゆえ、家から新横浜までの途中で落とすことも考

えにくい。いつの間にか「こだま」は豊橋駅についた。

翌日、いささか長たらしい結婚式も終わって、名古屋から「ひかり」で新横浜についた時は、すでに夜の帳が降りていた。駅員に切符をなくし二度も買った旨を話すと、駅員は切符になにやらゴム印を押し、「来年の八月十七日までに、なくした切符が出てきたら払い戻しをしますよ」と、一縷の望みを持たせてくれた。

九月の末、定期券の期限切れとなり、十月一日に六か月の定期券を会社から貰い、これで三月末まで通勤できるなと思ったが、それから二週間もたった頃だったか、ある朝たまプラーザの駅に入ろうと、名刺入れを出したところ、中に定期券がない。今朝洋服を替えてきたから、昨日の服のポケットにでも置き忘れたのかな、それにしても、春に続いてまた定期券をなくすとは。たまプラーザ駅の改札口に紛失届を出し、田町駅までの切符を買って、芝浦の勤め先に入った。夕方帰宅をする時も、前と同じく乗り越し切符でたまプラーザに着いた。駅に吉報はなかった。

翌朝また駅員に尋ねると「藤井さん、ありました、改札口で取り忘れたのを届けてくれたのです」有り難い。拾ってくれた人に感謝する。

それにしても、おめおめと一年に三回も、ほおけた事件を起こしたこの僕は、ぼけ、痴呆の仲間にもう入れなかったのだろうか？

それとも八十歳を超すと、こんなことは当たり前で、まだぼけの仲間には入れてもらえないのだろうか？賢明なる諸兄弟よ、切にご教示を頂きたい。

ロング・ロング・ステイ

莊 司 忠 志

近頃、新聞・雑誌に「老後はハワイで」とか「ロング・ステイ」と題した、定年後や老後の生活を海外で楽しむ経験談や夢物語を読むことがある。私の場合は、

「ロング」ではなくもつと長期の「ロング・ロング・ステイ」を計画している。六年前ニューヨークで長男とアメリカ娘との結婚式に妻と出席した。そのときから毎年、二か月から最長七か月までアメリカに滞在してきた。そしてついに去年の夏、アメリカの永住権、いわゆる「グリーン・カード」も手にいれた。

アメリカでの夫婦二人の生活費はどのくらいだろう。ニューヨーク市の長男のアパートとその北百六十キロにある彼の別荘、さらに北百キロにある州都オルバニーの次男の家に居候なので、住居費や光熱費などは不要、とさおりのゴルフ代、日用品、地方へのドライブの際のモーター代や食事代などなど、生活費は日本の年金で十分カバーできそうだ。アメリカの物価は日本より安い。やや高いのは医療費だが、これも日本出国から三か月までは日本のクレジット・カードで払ってくれる。永住権を得たのでアメリカの医療保険にも加入できるらしいが、これは目下詳細研究中だ。大病となったら日本の国民保険を頼りに日本に舞い戻ることになるかもしれない。老後の海外「ロング・ステイ」についてはほかの国

を考えたこともあった。

オーストラリアのメルボルンにいる三男のアパートに三か月世話になったこともある。そこでは、老後をゴルフ三昧で暮している日本人夫婦のロング・ステイ組とブレイしたり飲談し、かれらを羨んだ。引退した友人夫婦が息子夫婦といっしょに牛を飼っているブリスベン西部の牧場まで、十三時間も列車にゆられて泊りにいった。飛行機でも行けたのだが、オーストラリアの広大さを実感するため、わざわざ寝台車にしたのだった。

学生時代からの友人の多いインドネシアのジャカルタ郊外の涼しい高原やバリ島の田舎も「ロング・ステイ」の候補地であった。言葉も分かるし、四十年も前から親しんできた第二の故郷でもある。十一年も住んだギリシヤ、二度にわたって駐在したシンガポールや隣のマレーシアも捨て難い。ただしシンガポールは物価が高いい年中高温多湿なことも難点だ。こうした国々ではできれば時に訪問してみたいが、「ロング・ステイ」には向かないかもしれない。

ニューヨークの田舎では早朝自転車で近くのコンビニ

に走り、ニューヨーク・タイムズを買う。インターネットで日本語で日本のニュースを読み、晴れた日は自転車で周囲五キロ半の湖を二、三周する。五十坪ほどの畑で野菜を育て、別荘の周りの花々やハーブへの散水、週末は町からやってくる孫たちと一日中遊び暮らす。アメリカ流のシンプルな食事、森や山の清浄な空気に恵まれた環境のおかげで体調も上々だ。こうした日々で寂しく物足りないのは無駄話の相手が少ないことである。ニューヨーク・イングランドの美しい四季の移り変わりを満喫しながら散歩したり自転車走らせると、こちらとおなじような老夫婦と出会う。「ハーイ」といって立ち止まり話し始める。お互いに人が恋しいのだ。田舎にも相当なインテリがいる。雑誌や新聞に書評を書く人、金融マン、元大学教授、ドキュメンタリー・カメラマンとその夫人でテレビ・プロデューサーなど。かれらは引退したり、都会の喧騒を避けて静かに暮らしながらも、全く遊んでいるわけではないようだ。コンピュータさえあれば田舎に住んでいても仕事ができるらしい。

子供たち三人を、小さい時からイギリスやアメリカで

教育したのは私の無駄砲な挑戦だったが、中国で生まれ育った妻も賛成してくれたからであった。日本語や日本の文化・歴史を学ぶことなく成人した子供たちは日本では通用しそうもない。彼らも、日本人なのに日本とはほとんど関係なく外国で生きていることについて、両親を恨んではないようである。アメリカでの「ロング・ロング・ステイ」は私たち夫婦にとって自然の成り行きなのだ。それでも日本とのつながりがなければ寂しい気がする。そのためにも「企業OBペンクラブ」の海外会員にしてみらい、趣味である「アメリカの教育」「日米の文化比較」「日本におけるキリシタンの歴史」などについて資料を集め研究したり書いてみよう。望むらくは毎年二、三か月は帰国してペンクラブの月例会にも出席したいものである。

私的文化的な旅

宇野 存

国際線パイロット時代、自分が地上で観たところを、翌日、運よく空から見ることが出来ることもあった。これとは反対に、飛行中コックピットから見て好奇心に駆られ、後日、地上を歩きその場所を観ることもよくあった。その一つが、ドーバー海峡を挟む白亜の崖壁(White Cliff)である。

ドーバー海峡

ロンドン―パリ間の往復フライトをしていると、ドーバー海峡を挟んで相面する英国・イングランド側の海岸線とフランス・北ノルマンディ側の海岸線が、とても似ているのに気付いた。高い上空からではあるがコックピット越しに、海から切り立った白い崖で出来た海岸線がはっきり見えた。

中学が高校で教わったことを思い出した。アフリカ大陸の西海岸線と南アメリカ大陸の東海岸線が、地図上一

致することから、両大陸は元は一つだったこと。身近には、発掘古生物が証明するように、太古には日本列島はユーラシア大陸と陸続きだったらしい。

地質学・地理学には全く縁のない私だったが、もしかしたら、西のブリテン島も大昔にはユーラシア大陸と地続きだったのではなからうか。素朴な疑問が頭をよぎった。

コックピットから見えたのは、飛行コースからみて、イングランドのEastbourneとフランスのDieppeあたりということだけで、それ以上のことは知る由もなかった。この一例だけでは、偶然の一致に過ぎないかもしれない。両国に他にも白亜の海岸線があるのかどうか、と思いついて日本に帰った。

旅の本や関連の専門書を調べると、他にも同じようなWhite Cliffの海岸線があった。

ブリテン島側 Dover, Eastbourne, Isle of Wight
フランス側 Etretat, Fecamp, Dieppe

地上・海上からこれらを見、地質学・地理学的な痕跡を自分の目で確かめなくなった。ドーバー海峡、イギリ

ス海峡を挟むこれらの海岸を、フライトで宿泊の度にロンドンとパリから何回にも分けて訪れた。

これらの海岸は、海から高く切り立った、石灰石の白亜の崖(White Cliff)で出来ていて、どれもが数キロも連なっている。クローズアップ写真だけを見れば、どこものか分からないぐらい酷似している。

大陸移動説

専門書を読み、地球生成史の諸説に初めて接した。

Sir Francis Bacon (英国の科学者・政治家)が、一六二〇年に南米東海岸線とアフリカ西海岸線が一致することを指摘したが、その理由を説明できず永くそのままになっていた。

その後、Alfred Wegener (ドイツ気象学者)が、有名な「大陸移動説」(一九一五年)を発表した。この時代はまだ海底のことは分らず説得力を欠き、当時、彼は気狂い扱いされた。しかし、死後、目の目をみるようになった。

第二次大戦中に海底測深機が発明されたことにより、海嶺において繋がっていた大陸が移動し分離していつ

た、という「海洋底拡大説」が生まれた。これが、「大陸移動説」を支えた。最新の説としては、「プレート・テクトニクス理論」、さらに、「プリューム・テクトニクス仮説」がある。

このように、後世の諸説により、ウエゲナーの説はより科学的に証明されてきた。

「大陸移動説」によると、三億年前の石炭紀には、地球の陸地はPANGAEA (パンゲア)という一つの大陸だった。それが、テチス海(現在の地中海、黒海、カスピ海、アラル海)が東から入り込んだために南北に分断され、北のLAURASIAと南のGONDWANALANDに分かれた。北のLAURASIAは、更に、LAURENTICA (北米)とEURASIA (ヨーロッパとアジア)に分かれた。南のGONDWANALANDは、今日の南極、オーストラリア、アフリカ、南米、インドにまで分化した。

インドは、後に北に移動し、ユーラシア大陸とぶつかり合体した。その時起こったプレートの地殻変動により、ヒマラヤの造山運動が起こったということである。

遊び心・学び心のある旅

始めに戻り、ブリテン島がユーラシア大陸と地続きであったのかどうか。私の素朴な疑問と同じ論を説いている専門書に接したときには、心が躍った。しかし、門外漢の私にはその当否云々より、地球の生成という壮大なロマンに浸れたことの方が嬉しかった。

あの日の、ふとした好奇心が湧かなかったら、地球生成史に興味を持つことも、ウエゲナーの名も大陸移動説をも知ることはなかったであろう。好奇心は、私的文化をつくる旅の源泉である。

遊び心・学び心のある旅。旅は、レジャーであると同時に、教養を積む恰好の場でもある。

年頭空談

水谷 汎

除夜の鐘を聞きながら回想にふけり夜半にいたると、毎年、左の歌を想起する。

何をして身のいたづらに老いぬらん

歳の思はむ事ぞやさしき（『古今集』）

この歌の意味を『古語雑談』（佐竹昭広）は次のように解説している。

『本居宣長の口語訳に「オレハマア何ヲシテ此ヤウニ
年ヨツタ事ヤラ。何シニモセズ二年バツカリヨツテ、身
ニツモツタ齡ノ思フトコロガサ、ハヅカシイ」（『古今集
遠鏡』）とある。歌の末尾の「やさしき」は「ハヅカシ
イ」と訳されているが、決して誤りではない。

「やさし」の古義は『万葉集』以来、まさにこの通り
だったのである。』（以下、同書にある、その説明は省略

する。)

旧臘以来、「世紀末」「新世紀」「二十一世紀」なる語が喧伝されてきたが、過去百年間の世界史をどう認識するか、将来の百年間にいかなる歴史を形成して行くのかの問題の論議が尽くされずにいる現状に対して、私は底知れぬ不安を感じている。

ところで、溝口雄三氏の調査によると、明治七、八年頃には、世紀という語はまだ存在していなくて十八世紀なら「千七百年代」の語が多く使われていた。centuryの訳語に「一世紀」を当てた字書が刊行されたのは明治十五年で、その頃から「世紀」の語が使われ始めたとのことである。(『図書』本年一月号)

「世紀」の本来の語意は古代から中国で「……帝王世紀」のように帝王の歴史を記録したもののことである。その故に明治の頃、漢学の素養の深い人たちにとって、centuryの訳語をあてることが妥当でないと考えていたのではないか。

年頭に落掌した年賀状の日付は「平成十三年元旦」となっているものばかりであって、「二十一世紀」「二〇〇一年」は一通もなかった。この現象をどう見るか、考現学の課題となろう。

言論不自由な時代を体験している私には、二〇〇一年の二と一との間の〇〇が伏字を連想させる。

暦は数多くあり、参考までにその一部を記してみよう。

平成13年	
7509年	創世記暦
5761年	ユダヤ暦
4334年	檀君暦
2661年	皇紀暦
2001年	西暦
7001年	エジプト暦
5120年	マヤ暦
辛巳	干支暦 (殷代から)
2543年	佛暦
1421年	イスラム暦

以上のほかにギリシャ、ローマ、インド、バビロニア、ペルシャ、中華民国などもそれぞれの暦をもっている。

前掲の「皇紀」は明治五年に神武天皇即位の年を紀元元

年とすることを政府が定めたことによる。この皇紀元年は『日本書紀』を典拠とする神話に基づいて西暦紀元前六六〇年に当たるとの明治政府の見解であった。

この神武天皇即位日は最初、一月二十九日とし、のち二月十一日に改定された。なお、同年十一月九日、太陽暦採用を布告、同年十二月三日を明治元年一月一日とした。

ちなみに昭和十五年十一月十日、紀元二千六百年記念式典が皇居前で挙行され「……紀元は二千六百年……」の奉祝歌が制定され、軍国主義と超国家主義に拍車がかけられた。

神話を歴史的事実として教育されてきた国民の大多数は、この年が紀元二千六百年と思い込み、誤れる日本民族優越の非常識に溺れる動機となったと思う。

今年は干支では辛巳（かのとみ）で巳年、十二支第六番目の巳は蛇の略で昔はヘビといわずヘミといってた。巳の字は蛇の象形文字に由来するのだという。

宮地伝三郎博士の『宮地伝三郎動物記』から蛇のこと

を、少しノートしてみよう。

日本で最も大きくなる蛇はアオダイショウで、体長三メートルくらいになる。信仰の対象になったりする白蛇はアオダイショウの白化型で山口県では天然記念物になっている。

アオダイショウは「ネズミトリ」の異称があるほどで、野ネズミの制御に役立つ有益動物である。

蛇は肉食動物で捕食の対象はミミズ、昆虫、甲殻類、魚類、鳥類、哺乳類である。ニシキヘビは鹿、羊、豚まで丸呑みにし、ヒトの子供もやられる。

肉食動物は草食動物にくらべて餌にありつける機会が少ない。特に大型哺乳類を食うヘビ類は食物の欠乏に耐える能力が大で、ニシキヘビは二年半絶食して体重五十キロから二十七キロまでやせた例がある。

宮地博士のこの書には蛇の話がたくさんあるが割愛する。

（平成十三年正月）

日本も森林不足の国

森 田 茂

主要国の国土に占める森林面積をみると、アメリカは二三パーセント、ドイツ三〇、フランス二四、イギリス九、イタリア二七など欧州平均は二七パーセントである。日本は六六パーセントを占め一位にランクされるが、それにもかかわらず森林不足であることにはちがいない。

申すまでもなく、木材の供給元は森林である。森林は木材を供給するだけでなく、自然環境にとってなくてはならない。土壌保護、保水と水質保持、海洋保全、大気浄化や自然環境維持など、あらゆる生命体の循環の源ともいえよう。

ここでは、地球環境対策としての温暖化ガスの吸収の視点から考えてみたい。

地球環境対策については、すでに一九九二年六月のリオ・デ・ジャネイロの地球サミットから十年近く経ている。その間に、C O P 3（京都）、C O P 4（ブエノス

アイレス）、C O P 5（ボン）、昨年十一月C O P 6（ハグ）が開かれた。そして温暖化防止対策としては、温暖化ガス排出量取引、共同実施、クリーン開発メカニズム（C D M）などの推進策が検討されてきているが、各国の思惑や南北問題が絡んで、残念ながら具体的な結論は出ていない。しかし、地球環境保護により持続可能な発展を期するには、先進国・途上国ともに環境循環型社会の実現に努力しなければならない。

さて、日本の二酸化炭素排出量は年間約三・三億トン（炭素換算）で、アメリカ、中国、ロシアに次ぐ四位の大量排出国である。一人当たりでは六位であるが、世界平均の三倍にもなっている。

そこで、森林が二酸化炭素をどれほど吸収するかを考えてみよう。まず林野庁の資料によると、一ヘクタール当たり年間六トン（炭素換算）、石川県のある高校の樹木の実測では二百六十本で百トン、これを換算すると同じ面積で約八トンであるから、平均六―八トンと推定できよう。これを日本の森林面積の約二千四百六十万ヘクタールに掛けると、年間の吸収量は一億五千万から二億

タクシー料金に物申す

亀井 弘次

トンとなる。森林以外に公園や住宅などの樹木を若干計算に入れても、二億トン強ぐらいであろう。これは二酸化炭素排出量の七割弱に相当する程度と思われる。この二酸化炭素の吸収のことからみると、極めて単純換算だが、約七百四十万ヘクタールの森林が不足していると予測される。

その上、紀伊半島の例でも分かるように、温暖化が進むと大きな樹木に隠れる低木の成長を妨げるために、温暖地帯の樹木の生育は悪くなる。そのために温暖化ガスの吸収力が低下する。

温暖化ガス対策での国際的な取引や行動支援も大事ではあるが、日本は自国の足元の実情をしつかりと認識して、適切な対策を遂行すべきであろう。

JRの駅前や空港で、昼間あくびをしている運転手が大勢いるのは、皆様ご承知の通り。

私がよく利用する横浜の桜木町の駅前では、特にその感がつよい。公共の広場を占拠し、自家用車が入って来るのを拒んでいる。

昼間、居眠りをして、夜だけ働く。これではいかにも不自然である。

そこで提案。

昼間、朝の十時から夕方五時までは料金を半額とする。こと。

随分暴論かと思われようが、日本のタクシー料金はバリの三倍だと、報じた新聞があった。

恐らく居眠りをしていた運転手は働き出すだろう。バーゲンの効果が出てくるはずだ。

昼間外出することの多い老人。乳幼児づれのご婦人た

ち。この人たちの地下鉄の“階段苦”を思うと、半額なら、そして、そこそこの距離ならタクシーを利用するのではなかろうか。

ビジネスマンも、乗り換えにバス停の二つ分くらい歩かされる地下鉄をやめて、タクシーを利用することも考えられる。経営の厳しい企業サイドも、その効率を考えるとタクシー利用を認めるケースも出てこよう。

そこでタクシー会社の経営はどうなるか。これは見ものだが、エンジンを空吹かせて、居眠りをしていた運転手が、安くても稼いでくれれば恐らく好転するものと思う。

京都にMKタクシーという会社がある。その車はほとんど“流し”をしていない。電話で呼んでも

『誠に申し訳ありません。只今、全車出払っております』と言う答えを受けることもあった。

つまりお客をのせて走っている状態、いわゆる実車率が極めて高いのだ。

その理由は、運転手が非常に礼儀正しいことによる。真夏でもユニホーム姿をびっしり決めている。

そして車内には、次の三か条が客の目につく場所に張られており、この三か条を守らない運転手がいた場合には、料金を払わないで下さいと大書してある。

三か条とは（やや記憶が薄れているが）次の通り。

一、ご乗車ありがとうございます。

二、どちらへ参りますか。

三、（目的地について）料金はこれでございます。

ありがとうございます。

このタクシー会社は経営も充実しており、運転手の待遇も極めて良いと聞いている。

この会社がかつて東京進出を計画し、独自の低料金策を打ち出したが、運輸省は即座にこれを拒否したという。それ以来タクシー料金のバーゲンは聞いたことがない。

航空業界はもちろん、お堅いJRもまた通信業界も価格競争に入っている今日、タクシーだけは例外というのは、いかにも頂けない。

お役所も頭を切り換え、タクシー業者もお客様に喜んで乗ってもらい、そして儲けをあげるには、どうするか

を真剣に考える時機だと思う。

自分史づくりの楽しみ方

竹内 京一

自分史づくりが、ひそかなブームとなっている。あまり目立たないのは、自費出版が多いため書店に並ぶことがないからだ。しかし、自分史づくり講座が開かれると、かなりの盛況ぶりとなることが、人気の証となっている。かく申す私も、近隣自治体が主催する講座に講師として招かれることがある。私自身、いささか毛色が変わった自分史を出したからだ。平成二年（一九九〇）に自費出版した『アメリカ人への薄謝』がそれである。タイトルが示すように、青春時代の八年に及ぶアメリカ留学生活と、帰国してから就職した企業の駐在員としてケンタッキー州で過ごした数々の経験を基に、日米両国の「懸け橋」になりたいと念願して書きつづったものだった。

これが望外の好評を博し、B5判でわずか二十六ページであったにもかかわらず、ある企業人の目にとまり、そこに再就職を果たすことができた。つまり、このときの私の「自分史」は履歴書代わりにもなったのである。その後、さらに書き足して七十ページとなったものを平成六年（一九九四）にまとめた。

そうした経験が、再就職先でさらに効果を発揮した。勤務会社が主催する海外クルーズの中に「自分史講座」が設けられ、そこで講師となった。受講者は、航海中に人生の思い出を振り返った文章を書き、文集にまとめて下船するときに配布するという手法をとったところ、ずいぶん喜ばれたものだ。

さて、一般的な自分史は、人生全体を振り返ることが多い。そのため、大体は高齢者が手がけることになる。私自身の経験から、自分史づくりの「楽しみ方」を披露したい。

かつて、原稿は「書く作業」であったが、現在は「打つ作業」に移行している。どうせ手がけるなら、ぜひともワープロを活用したい。それも、十本の指を駆使して

キーボードをタッチしたい。指を使うことで脳が刺激され、血流をよくして集中力・記憶力を高めることは医学的にも証明されており、何よりの「ボケ防止」になるからだ。

それに、ワープロを利用して原稿を仕上げるのは、訂正や挿入、文章全体の移動などにすこぶる便利であり、原稿用紙で手直しをする煩雑さに比べれば、はるかに楽である。さらに、できればワープロ専用機ではなく、パソコンワープロを活用したい。インターネット上でのホームページに利用できるからだ。これについては後述しよう。

何事もそうだが、「これをしたい」と思い立つと、すぐのめり込んでしまいがちである。しかし、文章づくりだけは「気長」に取り組む必要がある。周到な準備と、息の長い作業が結果的に「いい自分史」になるわけだ。

文章を書く前の準備作業で大事なものは「自分史ツリー」の作成と、「素材」の収集である。これが整えば、自分史は半分以上は出来たものと考えてもいいくらいである。文章などは、あとからいくらでもついてくる。

「自分史ツリー」とは、たどってきた長い人生をいくつかの節目に分け、それに枝葉を付けていく作業である。節目とは、例えば幼児期、勉学期、青春期、壮年期、熟年期、現在……といった具合で、それぞれの時期に特徴的な事柄を枝葉にする。つまり、枝葉とは小項目と考えればいい。

素材の収集とは、過去の写真、日記、文書類などを可能な限り集めることだ。未整理のまま段ボールに詰め込まれたままのことが多いはずなので、この際、整理するつもりで時間をかければいい。収集には家族や知人などを頼ることもあるから、改めて旧交を温める機会ともなる。

こうした事前準備が終わってから、いよいよ執筆作業に入るわけだ。小項目ごとに書き進めればいいのだが、年代順にこだわることはない。初めは書きやすい項目に手を染めたほうがいいかもしれない。ただ、勢いのまま書いていると膨大な量になってしまうため、あらかじめ全体量を決めておき、小項目の数によって平均分量を按分したほうがいい。実際に製本することを想定すれば、

全体量は四百字詰め原稿用紙に換算して、長くても五百枚、できれば三百枚程度に抑えるべきだろう。パソコンの基本設定はA4判で千六百字（原稿用紙四枚相当）だから、八十〜百三十ページと考えればいい。

書き方は、それこそ個人の自由であるが、文体（である調か、です・ます調か）は統一したほうがいい。だらだらした文章だと、読み続けてもらえないから、なるべく短文の積み重ねを心がける。段落を多くすることも大事だ。それと、第三者のことに触れる場合は、プライバシーに配慮する必要がある。

自らのことを書きつづるため、時として独りよがりの内容になることがある。それを防ぐには、過去の経験を冷静に「他人の目」で振り返りながら書きつづけることも大事だ。加えて、書き終えたあとの推敲作業で、実際にアカの他人に目を通してもらうことも必要である。厳しい指摘があるかもしれないが、いずれは多くの人々の目に触れるわけだから、素直に受け止めなければならぬ。内容だけでなく、間違っただけでいた勘違い表現も指摘してもらえよう。

講座で必ず出てくる質問に「制作費用」がある。これも千差万別で、ハードカバーの本格的なものになれば一ページ当たり一万円が目安になる。しかし、ワープロで編集していれば、印刷したものを原版として簡易印刷機にかけることもできるし、少数数なら印刷したものを簡易製本すれば安価に出来上がる。

今後、広まると考えられるのが、インターネットを使っている「電子版自分史」である。ホームページ作成ソフト（一万円程度）の購入程度で済むため、パソコンを持つていけば自分史を容易に公開できる。カラー写真も多く使えるので、印刷版以上に普及していく可能性がある。インターネットをも楽しめば、趣味の世界も大いに広がること請け合いだ。



イタリアでの入院、手術の体験

今川 確郎

ミラノ赴任後一年半の一九六五年七月中旬のことだった。ただ一人オフィスに残り本社への報告書を書いていた夕方八時頃、突然右下腹部に激痛を覚えた。

急いでトイレに駆け込んだが、食あたりではなく、痛みだけが激しい。てっきり盲腸炎と判断した。痛みが弱まった頃を見計らって、タクシーを呼び、居住していたマンションに帰った。救急病院に行かなくてはと、管理人に事情を話したところ「貴方の家のすぐ上に住んでいる医者が、つい先ほど帰宅しましたよ。連絡してあげますから、御自宅で休んでいるように」とのこと。

家族は三か月ほど前に来伊したので、オロオロするばかりだった。幸いにも階上の医者がすぐ来てくれ、「この症状は腎臓結石に間違いないが、あした病院で精密検査をする必要がある。痛み止めの注射を打っておくから、今夜はゆっくり休むように」と診断、処置してくれた。

知っている限りのイタリア語を使ってお礼を言い、「病院については、オフィスのローカル・スタッフと相談して決めたい」と述べた。

スタッフに電話したところ「大学病院のクリニックと、優秀な専門教授を知っている。あす一番にクリニックに連絡した上、貴方のマンションへ迎えに行くから」との有り難い返事で、当初の不安は幾分治まった。

彼の素早い手配で、翌日午前中に一人部屋に入院し、早速レントゲン検査を受けた。やはり腎臓結石、石は親指の先程の大きさなので、「手術による摘出が必要」との診断。ただし「専門の教授は海外出張中で、その後はすぐ夏期休暇をとる。教授の手術を受けるには九月になるが、それまで待つてくれるか」と至ってイタリア的悠長な話。自分は小規模ながらもミラノ店の責任者なので早急に手術を受け、一日も早く職場に戻る必要があった。

「教授を待てないのなら、すぐ手術の出来る、腕のよい助教授もいる」とのこと。「とにかく急ぐので助教授

にお願いしたい」と申し出た。誰でも、ましてイタリア人は特に、手術は出来る限り避けたい、延ばしたい、と思ふのは当然だ。しかし術後の痛さも、入院日数も同じわけだから、早く済ました方が術前の不安も、治療期間も短いはず。何より仕事の面での支障が少なくなるので、いち早く決断した。イタリア人一般には信じ難いような、手術に対する早急、果敢な挑戦だったので、皆半ば驚いていた。

手術は全身麻酔で行われていたが、術後の痛さは、それなりに感じたのは当然。しかし、自分は十数年前に、肺結核治療のため、右肺上葉、並びに肋骨六本切除の大手術を受けている。それに比べるとはるかに軽い。

術後一週間は毎日注射を打たれたが、慣れていたせいもあり、特別な痛みは感じなかった。従って医者、看護婦とも「貴方は模範的な患者ですね。このような患者ばかりだと有り難いんですね。イタリア人は大の男でも、注射を打つだけで、痛い痛いと大声でわめくのですからね。もしかしたら日本人は痛みに対する神経が鈍いので

すかね」とも言っていた。「冗談じゃないよ。痛いのは当然だが、イタリア人と違って我々は我慢強いんだ」と言いたいくらいだった。

もちろん、全員がイタリア語で話しかけてくれるので、医学用語が多く含まれていることでもあり、伊和、和伊、伊英、英和の四冊の辞書を持ち込んでの入院治療だった。難しい用語は理解しかねたが、日本での大手術の経験に基づいてなんとか推測して対処した。

二年後の一九六七年六月には、軽い盲腸炎が発生した。たまたま十日間ほどの一時帰朝が予定されていたので、この点も含め医者に相談した。「今すぐ手術が必要という状態ではなく、夏休みの二、三か月後に行ってもよい。その前に日本へ出張したらどうか」とのこと。しかし、時限爆弾を抱えての出張は危険なので「どうせやるなら一日でも早い手術を」と要請。二日後には設備の良いクリニックに入院し、翌日手術を受けて一週間後には退院できた。お陰で七月中には、なんら心配もなく日本出張が実現できた。今回も「誰でも手術は一日でも遅く、出

アイヌの貞操帯

斉藤 勁

来れば手術無しで治療したいと望むのは当然。貴方は自ら進んで一日も早い手術を申し出るとは、イタリア人には到底考え及ばない勇気の持ち主ですね」と感嘆していた。ある者は「さすが神風特攻隊の日本人」と、冷やかに半分言っていた。

なお、当時日本の盲腸手術は部分麻酔が通常だったが、イタリアでは全身麻酔が一般的だった。手術中に、わめき騒ぐ患者がいるためとも聞いたが、全く意外だった。その上、切り口の長さは、日本で行う場合の三―四倍。「日本人外科医の腕、器用さは世界」と聞いていたことを直感した次第である。

昔アイヌの若い女性は、貞操帯と呼ばれるものを着ける習俗があった。私は現物を見たことがあるが、貞操帯という名称から連想される、ヨーロッパ中世のまがまがしいものとは異なり、単なる紐であり、あまりの相違に驚いたことがあった。恐らく、アイヌ語から日本語への翻訳の際、翻訳者がジャーナリスト的感覚の持ち主であったための誤訳と思われる、小膚帯（紐）とするのが、正当と思われる。

この貞操帯と称せられるものは、アイヌ語でウブソル、ラウング、メーコテバ、ボング等、地域により異なる名前と呼ばれている。

年頃の娘を持つ家では、母または祖母が他人に絶対に見られないように、蔓梅擬ツルウメモドキという木の蔓の繊維をなつて縄にして作り上げ、娘の腰にじかに結ぶ。かつては、こ

れを肌に残っていないと、恋人も得られず、嫁ぐことも出来ず、たとえ嫁しても実家へ戻されたと言われていた。この帯は三十歳ぐらいになると肌から外され、その女性の宝物として奥深く秘蔵され、死亡の際には、遺体に添えられて埋葬された。

この習俗は、十九世紀末頃までには無くなり、腰巻きに替えられた。その後は魔除けとして、あるいは山行きの際の熊除けとして使われたとも報告されている。

ところで、アイヌのこの習俗は、同じ縄文人の子孫である本土の人々に見られないことから、アイヌの人々に強い影響を与えた外来文化、すなわち四―八世紀に道東に栄えたオホーツク文化に求めざるを得ない。

オホーツク文化とは、北海道の利尻島、礼文島より、オホーツク海沿岸を経て釧路地方に至る、北海道東部の海岸地帯に残る外来文化である。この文化を持つ人々は、サハリン島から南下し、造船技術にすぐれ、捕鯨に見られる統率力を持つ狩猟民で、周辺諸民族を圧倒する勢力を持っていたようである。

この文化は、約十―三十人（一チームの人員と推定）が住んだ五角形の巨大家屋を住居とし、かつその住居の一隅に、熊の頭蓋骨を集めた骨塚をもつことが特徴で、彫刻技術にすぐれ、シャーマニズム信仰をもっていた。また現在エスキモー人が使用している離頭鋸と同じものを、骨製のものでつくっていたこともわかった。また、東北北部から北海道西南部と、大陸の間の交易にも積極的に関与していたことが遺物からうかがえる。

何分文字をもたない人々なので、現在のどの民族にあてはるか難しいが、ギリヤーク、オロチョン等、サハリン島の少数民族の祖ではないかと推定されている。

何故このような民族移動が起こったかについては不明であるが、その始まりは、中国の五胡十六国の大乱による余波が沿海州、ウスリー地帯、サハリン島に及んだためと推定される。またその終わりは、ツングース系民族の建てた遼朝の成立に基づく大陸秩序の回復によるものと思われる。

なお、アイヌの口承文芸のなかの英雄詞曲ユーカラに

登場するレブンクル（沖の人）とヤウンクル（内陸の人）との闘争伝承は、オホーツク人との接触の話がモデルであるとの説が有力であり、後のアイヌ文化に大きな影響を与えたとされている。従って貞操帯の習俗も、この文化よりもたらされたものと考えられる。北方民族の遺物から貞操帯が見出されることが、私の説のミッシングリングの発見につながる事となる。

昨年五月末、私は道東のサロマ湖畔より釧路に至る地域の、オホーツク文化を中心とした古代遺跡をめぐる旅を、古代史愛好家仲間と、バス一台をチャーターして行った。

サロマ湖畔常呂の数千に達する大墳墓群を見学した翌日、網走河口の左岸の海岸砂丘にモヨロ貝塚を訪問した。この貝塚は、一九一三年、在野の考古学者で理容師であった米村喜男衛が発見し、オホーツク文化を初めて世に出した有名な貝塚である。その旧地に建ったモヨロ貝塚館には、貝塚の断面と、熊の頭蓋骨を集めた骨塚を含む巨大な五角形の住居をリアルに復元している。そしてそ

の隣の遺物展示場の一隅に、北方民族の貞操帯が展示してあるのを見つけた。これにより、オホーツク人の習俗がアイヌ人に取り込まれたとする私の思考の連鎖が完成し、実り多き今回の旅となった。

貞操帯はかつては博物館、資料館などに展示されていたが、ものがものに最近ほとんど展示されなくなつた。このため「言霊の国」日本ではこの名称だけが一人歩きし、アイヌコーカソイド説などに援用される悪影響が出ている。名称を変えるなどして展示した方が、秘すよりは良いのではないかと思われる。

オホーツク文化に関する書物としては、司馬遼太郎「オホーツク街道」が第一である。オホーツク文化の発見者、米村氏の戦前から戦後にかけての苦労話をはじめ、北方少数民族の言語に至る、多くのエピソードをちりばめた名作であり、ぜひ御一読をおすすめする。

瞬時に夫を語る妻百態

吉 葉 芳 彦

何度も同じ話をすると嫌がる家内がこの話だけはいつも笑いながら聞いてくれる。いや、身につまされて聞き入っているのだろう。娘たちにも伝わっているようだ。

私はいわゆる転勤族。四十年間に十五回も動いて回ってきた。それもほとんどが地方ばかり。クラス会・同期会の幹事や名簿係泣かせの、無断欠席常習者。果ては住所不明欄に明記され、年賀状も仲間の動静通知もなし。それを寂しいと思うゆとりさえなく走り続けてきた馬車馬。「あなたにはお友達がいないのね」、家内のあわれみの声も馬耳東風。退職してから、いままでの罪滅ぼしをさせてもらおうと一念発起した。

数十年もご無沙汰していた集まりに、おそろおそろ出掛けてみた。当然、敷居は高い、と思ったのも束の間、すぐに、「俺」「お前」のあの頃に戻ってしまった。時

間・境遇を超えて、友はありがたい。煽てられるままに幹事を引き受けた。そんな繰り返しで、生来のお人好しに後ろめたさも加わって、小・中・高・大・部と相次いで「使い走り係」を拝受した。二年のうちに五つも。

それぞれの幹事たちとの連絡は、年間合計二百数十回。手紙やFAXのこともあるが、そのほとんどが電話である。電話をかけまくっているうちに、大変な、恐ろしい【公理もどき】が浮かび上がってきた。「妻は、瞬時にして率直に、夫を語る。彼の、家庭における居心地、〈友人〉への夫妻の思いの隔たりが推量される」。幻聴であってほしいと願うこと、しばしばである。

『もしもし。私はご主人様と〇〇学校で一緒に、たいへんお世話になりました同輩の××でございます。ご主人様ご在宅でしょうか、いらっしゃいましたらお願いします』が、私。

わが友の奥さんの応答。盗み聞きするわけではないが、聞こえてしまう。以下、百態。

「ハイハイ、あなた（あーた）。電話」

「ハイハイ、あなた、電話。友達だつてさ、どうする」

「ハイ、ちょっとお待ちください。すみません、出掛け
ているヨウです」

こんなケースはこのくらいにしておこう。類は類を呼
ぶとか、こちらのお里が知れる。

もつとも、昨今よくある友人を装う性悪な勧誘への警
戒心もわからないではない。【あいつ、だいじょうぶか
な。居心地がわるいんじゃないかな。〈友人〉も大事に
されていらないようだ】

「ハイ、ちょっとお待ちください。お友達からですよ」

「ハイ、いつもお世話になっております（ちょっとお待
ちください）。あなた、お友達」

「ハイハイ、お世話になっております。あなた、お友達、
お友達、ネーエッお友達」。【お前もまあまあ、ほどほど
に扱われているな。〈友人〉も大事にしている】

「お世話になっております、ちょっとお待ちください。
あなた。早く、早く、お友達」

「たいへんお世話になっております。今ちょっと外出し
ております。すぐ戻りますので、こちらからお電話させ

ていただきます。恐れ入りますが、お電話番号は」「ま
あ、いつも主人がたいへんお世話になっております、あ
りがとうございます。少々お待ちくださいませ。あなた、
〇〇小学校の××さんからですよ」。【おさまっているよ
うだ、すぎた奥さんのようだな、大切にしろよ】

罪滅ぼし・お礼奉公のつもりで買って出た幹事なの
に、見たくない知りたくない、いろいろを垣間見てしま
った思いがする。数十年もご無沙汰してしまったのに、
友人たちは皆、時間・境遇を超えて普通に私を扱って
くれる。私もあの頃のままの友情と接したい。なのに、
奥さん方がその思いを遮ってしまうことしばしばであ
る。

私の早とちり、思い過ごしとして聞き流し、忘れ去っ
てしまふべきことなのか。妻百態よりもむしろ、もつと
ヒドい「夫百態」があるに違いない。

代表幹事の職掌柄、ある女性幹事に事務連絡したおり
に旦那が電話に出た。「ウンウン、待つて」。なんたる無
礼、許しがたし。往年の美少女、いまもなお円熟した色
香を漂わせ、立ち居振る舞いも爽やかな彼女が、いとも

名曲「箱根の山」替歌の巻

関谷 裕彦

哀れに思われた。「ごめんなさい、主人は無愛想なものですから」。さすがに、「無愛想と無礼とは違う」とは言えなかった。

老妻への異性からの便りに嫉妬しての失言なら、微笑ましくて許せるのだが。妻を、友を、〈妻の友〉を、なんと心得ているのか。彼も、出るところへ出れば、相應の人物だろうに。

冗談なら笑えるが、冗談ではないから「冗談じゃねえんだ」。妻も夫も、これ（こんな応答）で、それ（そんな受け取られ方）でいいのかな。

もつとも、こんな話に「ハッとする」組より、「おおきなお世話だ。夫婦はさまざま、瞬時なんかでは分からない深いモノがあるんだ」組が多ければ、私の【公理もどき】は取り下げなければならない。

(11001・1・15)

三十年ぶりに九州を訪れた。熊本で一人の女性、春子女史に会うためである。

女史と私の因縁は一九九一年に溯る。当時私はある会社の人事を担当していた。たまたま採用した女性、熊本出身のS女が女史のお孫さんだった。

「祖母が一度部長にお芝居のお話を伺いたって申しております」S女が言った。「祖母は東京生まれなんですよ」

その翌年私は定年になり、S女の祖母君のことを忘れてたわけでは無かったのだが、別の仕事に就いた故もあり、熊本行きはお蔵のままで六年が経過した。

一九九七年四月半ば、久方ぶりにS女と一杯やったおり、その飲み屋からS女が実家へ電話した。近々休暇で帰るというわけである。「祖母が何時おいでいただける

のか？ですって」「うーん」と私はうなつた。新しい職場もそこそこ忙しかったのである。

「ところで君のおばあさまってお幾つ？」

「今年九十七です」S女が眼をくりくりさせて答えた。

近ごろこんなびくりしたことは無い。これは大変、人間は老少不定というものの、そのお年では！

急遽二泊三日で熊本、大分あたりの古城遍歴プランを組み、その途上でのご対面となった。

春子女史は一九〇〇年、東京は麻布のお生まれ。お育ちは湯島。熊本に嫁した。歌舞伎に詳しく、先年物故した我が母より八歳のご年長である。

懐かしい東京言葉が鉄砲玉のように出てくる。快足のTBが密集を抜けるようなもので周囲はまったくついて行けない。辛うじて私が母の言葉のペースを思いだしつつフォローして行く。

「本郷座（さあ大変、この小屋は本郷春木町にあつて市川左団次（二世）一座や、新派が使っていたそうだが

震災で焼けて翌年復興、大劇場が復活するまで結構良い役者が出ていたらしい。その後映画館になって戦災で焼けてしまった。もちろん私は行つてない）へはよく行きましたよ。脇役の左升（二世）とか荒次郎（二世）が良かったわね」（やれ助かった。当方荒次郎は何度か見ている。あの長い顎は印象的だったからな）。

「当時ですと、修禪寺物語では左団次（二世）の夜叉王、頼家は羽左衛門（十五世）か寿美藏（六世、後三世寿海）。左升が修禪寺の僧で荒次郎が金窪兵衛ですね」

「よくご存じなこと」（ところが後で調べてみると本郷座最後の修禪寺物語公演の大正十三年三月の舞台では左升がなんと夜叉王の娘婿春彦をやっていたのだ！昭和二年以降は、彼はずっと僧の役だったが）。

「私のみたのは、昭和十八年四月の演舞場、前進座の公演で夜叉王が河原崎長十郎、頼家が中村翫右衛門、僧が中村鶴藏（四世）、金窪は坂東調右衛門でした。喜多

村緑郎の弟子でよしきり音彦という新派の役者が新橋の地下街で飲み屋をやってましてね、よく芝居の話をしたんですが、なぜか金窪兵衛のせりふをカウンターの中であんなんです。「上、これに御座遊ばされましたか」（誰じゃ）「金窪行親でござりまする」（おお兵衛か。鎌倉表より何しに参った）「北条殿の御使いに」なんてね」（よしよし大分調子が出てきたぞ）。

それから羽左衛門（十五世）、六代目（菊五郎）、幸四郎（七世）、吉右衛門と当方のお馴染みの役者衆の話になり、ほっと一息。やれやれ。

芝居の話が一段落し、昼間案内してもらった豊後武田の名城、岡城の話になった。頂に瀧廉太郎の像がある。彼の名曲「箱根の山」には替歌が二つある。一般に知られているのは例の「名高き都の須田町を 朝の四時ごろ眺めたら」で始まる零落した武士のエレジーである。

当時神田須田町は東京屈指の盛り場で、後には交通博物館の側に移された軍神広瀬中佐の銅像が交差点の角に建っていたという。もう一つの方も父が歌ってくれたのだが、最後の一小節以外はうろおぼえである。

「私おぼえているかもね」と女史が歌い出した。

「なんだかんだの神田橋 朝の五時頃見渡せば

今は昔武蔵が原の 面影何処ベルの音高く

走る電車の割引乗らんと 喧嘩ごしの労働者

田舎の田子作親父が 赤いけつとをぐるぐる巻いて

オラの行くとこどこダンベー

全兵衛さんよ早く来なっせ ぶん乗りばぐると大変

だ」あら、このあと出て来ないわ。

最後は

「おらハーぶっ魂消ただよ 二十二型の時計が無え」

でしたよね。電車の中ですられちゃったのよ」

「ぞろっぺ」とか「ゾロビータ」（いずれもだらしのない意）、「お台場の土かつぎ 芝でままだ喰って二百五十文

こりやまたなんのこったい」なんてのも飛び出して、その夜の歓談は午前二時近くまで続いた。

女史は今年百一歳、ご健在である。今一度お訪ねしてあの菌切れの良い東京弁でのお芝居の話や、「箱根の山」

の替歌を伺いたいものである。

二〇〇〇年十二月二十六日

アブドルカーダー 栄子

二〇〇〇年十二月二十六日、この日は「企業OBペンクラブ」の忘年会の日だ。今年こそは出席してみようと思いい立ち、宿泊のホテルの予約もとった。

私は、クラブ発足と同時の一九八九年十一月だったか、あるいはその数か月後だったか、いずれにせよ最初からの会員である。朝日新聞の会員募集記事に目がとまった。「企業を退職したOB有志の集まりである。会員の多くが海外駐在経験をもつ国際性豊かなグループであり、その豊富な人生経験と知識を、ペンを通じて世の中に提供したい……」。そんな意味のことが書かれていたように思う。私は、企業OBとは無縁で、ただの日本語教師に過ぎなかったけれど、(マレーシアとオーストラリアで)

ダメでもともと応募した。

もちろん「海外駐在員」ということばに抵抗感があった。私の彼らへのイメージは残念ながらあまり好ましいものではなかった。現地の人たちの上に君臨し、日本のモノサシや、肩書をふりかざし、奢り高ぶっていた彼ら……。

彼らは、しかも日本の企業以外で働いている日本人や、現地の人と結婚した私のような者をも見下げていた。そのような奢りがもろに出てくるのは、彼らの妻たちからだった。彼女たちと呼ばれたり、私が呼んだりしたティーパーティーの席でだった。「あなた、国際結婚してるのに、お茶の入れ方が上手ねえ」「国際結婚してるのによく豪日協会などに出席なさって……」などと。

だから、駐在員妻やその家族に私は親しみをもてずにきていた。(もちろん大勢のすばらしい方にも出会え、家族ぐるみでの交際はいまでも続いている)。しかし、と、私は思い直していた。あのころはあんな時代だったのだ。同じ人間なのに肩書にモノ言わせて差別する。それは何も海外駐在員にかぎったことではなかった。朝鮮人を、

中国人を、アジア人を、アフリカ人を日本人の誰もが平気で差別の眼で見ていた。そんな時代だったのだ。まして企業サマサマの時代だったのだから……。

というわけで、私は、企業OBベンクラブの会員募集に、ほんの少しちゅうちょしただけだった。それよりも募集記事の中の「海外経験」、「国際性」、「ペンを通じて」などの言葉に吸い寄せられてしまったのだ。そのころ私は二十四年ぶりに帰ってきた（一九八九年五月）日本にひどく失望、精神的に閉塞状態にあった。

私たち夫婦は、実は、国際化を進めていた町から半ばその推進役として迎えられたのだった。そこは郷里の秋田県横手市に近い、人口一万人足らずの大森町。国際化時代の中で、二十一世紀を担う子供たちに海外研修を通して国際感覚を育んでもらおう―が町のねらい。実際は町の中学生たちにオーストラリアでホームステイ体験をさせ、向こうからも来てもらおう、というものだった。他にもう一つ私たちに課された仕事があった。それは、中学生たちの英会話指導。私たちははりきって、たくさん

の指導書の中から選んだのは、オックスフォード大学出版の「Streamline English」。

しかし、肝心の中学校からの声は一向にかからないのだ。いざシドニーに出发となって、やおら出前の声がかかるぐらいで。つまり、学校は「受験英語」一点張りで、英会話には見向きもしなかった。そして世を挙げての「偏差値」社会。学校の名誉のために個人の希望も何もみな犠牲を強いられて……。

さて、私の勤め先はといえば、だ。役場のオフィス「ブルーの窓口OL」では、一日中テレビががんがんなっていた。立ち寄ってくれる住民たちの話題はもっぱら山菜やきのこ、薬草の話だけ、年がら年中。いちばん驚いたのは、裏口から入るべからず事件だった。近道なので裏口から「おはようございます」と出勤すると、「裏口から入るのは銀行員と郵便局員だけだ」そう言って元学校長は譲らない。わざと通せんぼの椅子を並べられたこともあった。かくもバカらしい裏口事件（？）などの閉鎖性は、何も大森町に限ったことではない。また、ヤル気を育てるところか、ヤル気を殺ぐ社会、これも日本

社会の現実なのだ。

私は、二十四年ぶりの故郷で、震いつきたくなるようなやさしい自然に抱かれ、言葉を言葉として意識せずにも暮らせる母国語の安らぎの中にいた。帰国早々職が与えられ、住む家も町から用意されていて、感謝していた。だが、精神的な安らぎは全くといっていいほど得られずにいたのである。何十年経っても変わらぬ、いや、かえって悪化しつつある因襲的で、拝金主義的社会への怒りと悲しみ。しかも、そのはげぐちの無さに打ちのめされていたのだった。そんな日々の中で、企業OBペンクラブ会員募集の記事。私はわらをもつかむ思いで応募したのだった。

企業OBペンクラブの活動はめざましい。月例会、なんでも書こう会、IT勉強会、俳句・短歌の教室などなど。私はそのどれにもまだ出席できないでいる。あまりにも遠方にマイホームを建ててしまったからだ。そのうかつさ、悔んでも悔みきれない。知識の集団・会員たちに会いたい。メールなんかじゃなく、直接会ってみたい

と、このごろ特に思う……。忘年会だ。さあ、出掛けてみよう。新幹線の切符を買った。

(二〇〇一・一・一八)

「共に生きる物語」を家族で作ろう

芦刈 克

ミレニアム・イヤーが幕を閉じ、新しい世紀の扉が開こうとする暮れの夜、懐かしい友人で年忘れの宴を馴染みの料亭に設けた。

時折、軽妙なジョークを飛ばしその場の雰囲気盛り上げる男が今回は、妙に極く生真面目に語りだした。

「お父さん、お元気！」と、娘が母親と座敷に立ったまま、縁側で日向ぼっこをしている父親を見やって母親に語りかける。画面が変わり、今度は父親に「お父さん〇〇飲んで」と、問いかけると、父親は「おお、来て

たのか！」と返す。再び画面が変わり、父親と娘が二人並んで柔らかな陽が照り注ぐ縁側に腰かけている。

父親が娘に「よし、なにかうまいものでも食いに行くか」と、元気の証しを表現すると、母親が背後から、「うん、行く行く！」と分け入って、三人それぞれ顔を見合わせ満面の笑みという具合のCMを意味あり気に開陳した。

それを受けて対面の男が口を挟んだ。「人は人との持ちつつ持たれつの関係の中で、初めて人としての自分の在りようや存在の意味を見い出していく。誰かにとって、自分が必要とされている、自分がかげがえのないものとして、存在していると実感するとき、人は人との『絆』を心のよりどころにして、生きる力を高めていくんだ。意識するとしなやかにかかわらず『生きる力』とは、そのようにして膨らんでいくものだと思うよ」と、囁みしめながら言った。

人は、人と人との絆や自然との結びつきが、人の心にみずみずしい感情の潤いと呼び起こすものだ。本当の意

味での充実感・幸福感はこのような「結びつき」を通じてしか得られないという語りが映し出す風景は人の心が仕組んだ一つの物語である。

人間ほど多様性・多面性をもった生き物はない。しかも、見かけと中身がかけ離れていることが多いのも人間の特色だ。近年はことに知恵が発達し、本心を隠し、外面を繕うことが少なくない。そうした人間の特質を踏まえて、人を知るとは、をじっと考えてみた。

それは端的にいうと時間をかけて観察し、対話すること以外にはない。互いの気持ちを知り、呼吸をつかみ、相手との一つの関係を育てていくには、毎日の一つ一つの言動や反応にピリピリ一喜一憂するのではなく、ゆるやかにつながれた互いの時間を味わうところから出発した方が得策だ。人間は周囲が見えない暗みや、自分の声に反応が返ってこない環境下では不安を感じる動物である。

ところが、人間はある意味では本当に不自由な生き物だ。言葉でどんな説明をされても、それだけで相手の立場が理解できるとは言い切れないものだ。相手の立場が

本当にわかるのは、同じ環境に身を置いて見ることが一番なのだが、そうできるとは限らない。だからこそ相手の立場と心に思いを馳せてみるのが大切だと思う。

人が顔突き合わせて表情や声音まで交換する魅力は、時代がどんなに変化したって変わらない。気構えた論理の言葉より、虚心に語った自らの体験の方が人の心を動かす。素朴な言葉は語る人の思いが心をとらえるのだ。このように人と人との信頼関係を築く英知は、すべて日常繰り返される家庭生活の中で育まれるものだ。その家庭が今揺らいでいる、それを皆が憂えている。

離婚などの原因を性格の不一致と表現する時、それは相手の立場と心に想像力を抱けなかったということではなからうか。友人の弁護士が離婚だの慰謝料だのの相談に明け暮れる日々「お陰で女房を大事にするようになった」と、自戒していた。また彼は「夫婦は二人三脚だ。男女同権、ジェンダーの問題などの視点で家庭を考える」と、ごく当たり前の思いやりや他者の心への想像力がギスギスと角張った寂しいものになるから好きではない」

と。家庭を築くコア(核)であるペア(夫婦)もいまま心許ない。

仲間の集まりでの語らいや離婚問題にかかわる友人の話から、私は今の時代の情けとか思いやりについて理で説かなくてはならないことへの寂しさ情けなさをイヤというほど感じる。せめて家庭には理屈拔きの深い親和力が欲しいと思う。

かつては社会を支える末端の組織として家庭があった。人は家族や地域社会、学校や会社や組織などに属して生きていた。さまざまな集団などに属し気苦労はあっただろうが、そこには理解し合えるゆつたりとした時間が流れ、居場所のない不安定さはなかった。

ところが今、家庭も地域社会も崩壊寸前だ。その一方で、昨年末からBSデジタル放送が開始、やがてはCSデジタル放送に地上波デジタル放送とメディアはさらに人々を分散化する方向で進化する。だから「結びつき」へ向かう豊かな経験の物語は、自ら味わった人生からの贈り物である。若者との語らいでは思いを託す言葉とな

り、実年との対話は、現実の厳しさを知っての力強いメッセージとなり、高齢者との話は共感の温かさとなるからだ。

このような心は、ゆったりとした家庭での日常生活を通じ、そこに点在する風景、生じた出来事など、どんな小さなことでも伝え合い、噛みしめ合い、共感の場をつくっていくことから芽生えるものだ。「共に生きる」体験の物語で、時代に相応しい価値観を育てることこそが二十一世紀の急務であると思う。

大至急ですよ

木下 洋介

人事部にいたときのことである。

いつものように出社して席につくと電話が鳴った。「〇〇病院からです」と交換手の取り次ぎがあつて声が替わる。「Sさんが外来に来られましたが、容体が気に

なりますのでICUに入ってくださいます。自宅に電話しても留守なので、そちらで至急連絡して下さい、いいですね、大至急ですよ」といい終わらないうちに電話は切れた。

Sは血圧が異常に高いと聞いたことがある。「SがICUだって、至急家族に知らせてやってくれ」と部長にいうと、女子社員は顔を見合わせた。「どうした」というと「ご存知ないんですか」といいながら、一人が席に寄ってきて「Sさんはだいぶ前から奥さんと別居して、女の人と暮らしているという噂ですよ」といった。「じゃ、その彼女に連絡するにはどうすればいいんだ」というと、「さあ」という返事。

まごまごしているうちにも、万一の事があつたらどうする、と気になる。病院は容体が心配だからICUに入れるといっている。しかも「大至急」といっていた。どうすればいいのか。社内のあちこち聞いてもSの今の連絡先を知っている者はいないようだ。今わかつているのは、別居前の住所と電話番号だけ。その住所と電話番号を書いたメモ用紙をさっきの女子社員が私のデスクに置

く。いつのまにか私がこの件を措置する役になってしまったようだ。いよいよになったら細君に電話することが頭をかすめる。

別居を知っていながら、……飛び出したご主人は今病院です。家族に至急連絡してくれと病院に頼まれました……と細君にいうことになるが、聞かされた細君は困るだろうな、と思う一方で、では他に手があるのかと自問自答する。「なんかいい方法はないかねエ」と声を大きくしていつてみるが、誰も顔を見合わせているだけ。万一の時、誰もいなかったとあつては……。会社は家族に連絡しなかったのか、あんなに頼んだのに冷たい会社だ、と病院は思うだろうな。気がせて来る。何をどうしたらいいのか。

えいと腹をきめ、声を張り上げて「電話するぞ」と誰にいうともなく宣言し、別居前の電話番号をダイヤル。部員は「えっ」といった顔で注目する。私も緊張する。リーン、リーン、何度目かの呼び出し音の後『カチャ』受話器を外す音が伝わってくる。「モシモシ、Sですが」

「こちらは……」と名乗ってから「Tさんですか」、Tとは人事部が保管しているパーソナルカードのSの細君の名前である。「いいえ、Tは出かけております」「S君のことでTさんに至急伝えたいことがあるのですが、連絡とれますか」「夕方戻ります」電話の向こうはTの母親らしい。「夕方ですか」「はい」「実は……」と用件を話すと「そうですか、戻ったら伝えましょう」、なんと冷静なことか。それでも受話器をおいてホッとする。同時にこれでいいのか、という思いも残る。が、外に方法はなかったではないかと、自分に言いきかせる。

Sはどうしているだろうか。ICUのベッドで点滴を受けながら、心細そうに天井を見ている姿が浮かぶ。自業自得だ。これ以上のことはできない。どうしようもないのではないか。君の本意ではないだろうが、奥さんの母親に話してしまったよ。会社としてはこれが精一杯だったよ、と胸の中のもやもやを整理する。

少なくとも、細君の親には伝えただからと、責任の半分は果たしたような気持ちになり、あとはSの生命力と幸運を祈るだけ。

ベル・バラの日々

児玉 忠雄

「戻ったら伝えるんだって」という電話の結果を聞いて、人事部は日常業務に戻り、ひとまずこの件は落ち着いた形になった。

何十分か経ち昼近くなったとき「すいません、すみません」といいながら、当の本人Sがひょっこり現れた。みなは呆氣にとられた。「ICUではなかったのか、大丈夫か」「大丈夫です」「血圧か」「はあ」「どうなの」「大丈夫です」。

Sには詳しく説明したくないなにかがあるようで、それ以上のことは語りたがらない。やむなく「二度とこんなことがないようにしてくれよ」ですませたものの、病院の手違いだったのか、私の聞きちがいであったのか。なにかキツネにつままれた思いだった。

あの夫婦、その後どうなっただろうか。

二十一世紀を迎えた。キーワードは「成熟」だという。「人生は短く芸術は長し」「少年老い易く学成り難し」というが、人生五十年と謳った信長の時代と異なり、人生八十年時代では「人生は長く時代は短い」と思わなければならない。少し前までの人生設計といえば、まず「学び」と「働き」の時が中心でその後は短い「余生」しかなかった。しかし余生が二十年以上ともなると到底おまけの隠居というわけにはいかない。定年退職は誰にでも訪れる人生の通過儀式である。なのに老後の生活不安、成人病の不安、社会的地位低下・生存目標喪失など三つの不安による退職ショック症候群に悩まされる。なかなか「悠遊」自適の暮らしになじめない。しかし不完全燃焼の過去の夢・願望を発掘し自身の再生・ルネッサンスを図り、「成熟」した人生を過ごしたいと考えている。

わが家には、「ベル」という名の六歳雌の愛犬ビーグルがいる。人と犬の縁は不思議な奇縁・愛縁で人間の出会い以上に感動的なものがある。四半世紀も前、サンフランシスコ駐在の頃、小学生の長男がスヌーピーの大ファンでビーグルを飼いたがった。しかし当時は次男のアレルギーもあり親の反対で希望はかなえられなかった。その後息子たちは大学を卒業し社会人になって再びビーグルを飼う話が出た。依然として親たちは反対した。私は庭の芝生や樹木が荒らされるのが嫌だった。妻は少女時代愛犬の死に遭った時の哀しさ辛さが忘れられない思い出だった。その時、突然稲妻のように別の考えが閃いた。やがて子供たちが結婚などで家を出る時が来る。そうすれば家族四人の団欒や共通の思い出も少なくなる。そう思った途端、一転して犬を飼おうと思った。衆議一決の翌日だったか鷺沼のペットショップに家族で出掛け、たまたまいた数匹の中から電光石火、一瞬の出会いで長男が選んだのが生後三か月の愛犬ベルであった。

ベルという名は漫画スヌーピーの妹ベル (BELLE)に

因んで長男がつけた。ビーグルは家族への愛情がとても深く順応性に富み好奇心も強いタフな犬種である。自立心が強く気ままに漫画に描かれているように茶目っ気たっぷりなユーモラスな家庭犬だ。原産国は英国で十六世紀エリザベス女王時代に貴族によってセント・ハウンドが改良され小型種がケルト語・フランス語の「ベルグ(小さい)」をとって名がつけられた。

最近では核家族化・少子化が進み子供が自立・独立すると中高年の夫婦の暮らしては一日一緒に居ても話すことは案外少ない。阿吽の呼吸で済んでしまうことも多い。犬などペットを飼うと、それをきっかけに夫婦の会話が生まれ弾むし生活の中に若々しい生命の躍動リズムが生じる。毎日微笑を誘う新しい発見や触れ合いがあり、俄然老いの日常が生きてきたものに変わってくる。やはり人にはどうしたって愛さずにはいられなくなる対象が必要らしい。二葉亭四迷の「平凡」ではないが、「愛犬」というものは犬は犬でなくなり互の熱情熱愛に人畜の差別をなくして渾然として一如となるのである。相談

役として会社をセミ退職して、ここ二年、犬の食事、身の回りの世話の他、毎日一時間くらい犬の散歩が日課となった。近隣の住宅街の庭や公園の緑を眺め季節の変化を肌で感じカラオケを口ずさんだり俳句をひねったりする。散歩という快適な生活習慣の故で犬の散歩仲間もでき生活の幅や潤いも増えた。

ベルは飼い始めの二年ほどは庭先の白い犬小屋を住処としていたが、健康長命を願ってキッチン隅の専用ベッドに寝る家内犬になった。最近では二階の寝室に押し掛け夫婦のツインベッドの間に置いた犬用ベッドに川の字になって眠ることが多い。時折はエスカレートして人間様の掛布団の上で寝たがる。いささか窮屈な寝相となるが犬との添い寝で、寝息・寝言が聞こえ慰安「癒し」が感じられ、むげには排せないものがあり共存共栄を楽しんでいる。

我が家の庭先に苗木から手作りの二十年余の薔薇が数株ある。春から秋にかけ淡紅色や純白の花が見事に咲く。時折切り取って花瓶に挿して眺めると色々な思い出が浮

かんで楽しい。愛犬ベルとの散歩コースに数軒の花屋がある。興にのると深紅や黄、大小の薔薇を買って帰り、「ベルちゃんのプレゼント」と称して妻に渡す。妻は「また!」とか言いながら、満更でもない。日本人は庭いじり、大げさに言えばガーデニングが好きである。私も田舎育ちの故か人後に落ちず花木が好きで昨年は玉川のガーデニング・セミナーに通った。「植物の宝庫」といわれる日本の植物に日本人の感性を生かし人と自然の調和・共生を楽しむことが二十一世紀の生活を成熟・充実したものにしてくれる。

かつて宝塚の「ベルサイユの薔薇」が人気を博した。これにあやかり私は今のライフスタイルを「ベル・バラの日々」と呼んで独り密かに楽しんでいる。一方、IT革命に乗り遅れデジタル・デバイドに悩まされている。

愛犬タロの死

中村 爽

元日の午後、わが家の愛犬タロが死んだ。中型の紀州と柴犬の雑種で、ぴんと立った耳にはうっすらと茶がかり、毛並みの白い犬だった。十六歳を超えて後足が弱り、散歩には出かけなくなっていたが、つい数日前までは、はねるような足どりで庭先を元気に歩き回っていた。年から見ても、この日がいずれくるとは覚悟していたものの、あまりに突然だった。

年末二十七日の夕暮れ、いつも餌を食べる時間なのに、タロは暗くなった玄関の前で動かずに丸くなっていた。ときどき体を震わせている。呼ぶと前足で立ち上がりとうするが、腰が定まらない。どうかしたのかと思い、餌の入ったボウルを鼻先まで持っていつてやると、なんとか食べたので安心した。

ところが、もう次の日には立てずに、ただ座り込んでいた。それでも、妻がふる場で体を洗ってやると、気持

ちよさそうだった。好物の卵かけ飯を少しだけ食べた。食欲はあっても、食べにくそうに見えた。寒くなってきたので家の中に入れ、玄関のたたきに寝場所を作った。夜中に体を扉にぶつけるらしく、ドンドンと音を立てるので、何度か目を覚まされた。歩けないのに、外に出たかったにちがいない。

翌朝には急におとろえたようすで、頭も上げず、横になったままとなった。手足をけいれんさせるので、体をなでて声をかけると、落ち着いてくる。牛乳に浸したパン切れを、はしでつまんで口に入れてやると、ピチャピチャと食べる。水もスポイトで飲んだ。その後は、スーッと深い息をしながら、静かに眠り続けるようになった。呼びかける声には反応するが、動きが次第に小さくなってきた。これほど早く容態が変わるとは思ってもしなかった。

三十日も寝たままで、パン切れをほんの少し食べた。口に入れてやったはしをかまれると、引きぬくの苦勞するほど、まだ強い力が残っている。だが、もう目を開けない。死期が近いのだろうか。急変した姿を見て、思

わず涙が出た。大晦日になり、タロはあいかわらず大きな寝息をたてて横たわっていた。水も飲もうとしない。夜になり、離れて住む娘がやってきた。最初にタロを家につれてきたのが彼女で、いわば幼なじみだ。娘が名を呼んで頭をなでると、タロは喜ぶように大きく全身を動かしてこれに答えた。

そして元日、二十一世紀を十五時間生きたタロは、午後のやわらかい日差しを浴びて、雑煮の汁をわずかになめ、しばらくして静かに息を引きとった。安らかな大往生だった。表情は穏やかで、まるで眠っているようだった。

長い間共に暮らしたタロがもういないことを、半月たった今でも時々忘れてしまっている。朝、雨戸を開ける時など、つい犬小屋の辺りに目をやって、タロの姿をさがしてしまふ。そして、ふとわれにかえると、胸の奥に穴があいたような寂しさを感じる。だが、タロは生前、私たちに大きな幸いと喜びをくれたし、良い思い出をたくさん残していった。

十六年前、娘が自転車のかごに入れてタロをつれてき

た。耳が大きく、白兔のような子犬だった。息子がハウスを組み立て、タロはわが家の一員になった。海岸の広い砂浜で、白い弾丸のようになって一直線に全力疾走するタロ、骨折で三か月入院し、杖をついて帰ってきた私を見て、驚いて一瞬後ずさりしたタロ、午前様で、足音をしのばせて帰宅する私を、いつも暗闇からいち早く見つけ、門まで出迎えてくれたタロ、妻といっしょに散歩すると、必ず角ごとに振り返り、ついてくるのを確かめながら歩いたタロ、庭先に座り、首を少しかしげて、じつと月を眺めていたタロ……、そんな時々の姿が忘れがたい。

タロはいつも私たちをいやしてくれもした。夫婦のいさかいから、家の中で冷たい沈黙が続くと、タロが会話を取り戻すきっかけを作ってくれた。娘の生活のことで親子の感情が激しく対立した時にも、タロの存在が暴発を防いでくれた。タロがそばにいただけで、みんなの心がなごんだ。

タロの死を知り、近所の奥さんたちが、庭に咲いた花などを持って、タロに会いにきてくれた。妻あてに、お

悔やみと、慰めの手紙をポストに入れてくれた人もいる。かかりつけの動物病院からは、スタッフ一同として、お悔やみのカードがとどいた。こうして、いろいろな人の優しい人情にふれることができたのも、タロのおかげだった。

一月三日、鎌倉近くの霊園で、タロをだびに付した。まるで別れを告げるように、煙突からゆっくりと立ちのぼる煙にタロの姿を見て、私は心の中で「ありがとう」と告げた。穏やかに晴れた新春の一日だった。

(平成十三年一月)

十年ひと昔

刀祢館 正久

「十年ひと昔」という。古くさい言葉だが、やはり真理である。十年も経てば世の中は様変わりする、と今さらながら痛感する。

かつて、日本で大きな反響を呼んだ『YEN!円がドルを支配する日』（ダニエル・バーンスタイン著）を、最近再読する機会があり、日米の経済関係の激変ぶりに改めて驚嘆した。

本書が出版されたのは、今から約十二年前の一九八八年（日本版は八九年）である。当時は、まだ米国経済は芽えなかった。日本経済はバブル崩壊の直前の絶頂期で、企業は次々とニューヨークのビルを買収し、「日本、マンハッタンに上陸」などとマスコミに騒がれていた。本書は、日米の当時の経済力に裏打ちされた「強い円」と「弱いドル」が克明に分析されている。例えば、序文には次のような表現がある。（抄訳）

「米国の直面している膨大な赤字、産業の競争力の欠如、貪欲と投機で荒れ放題の金融システム、世界経済における地位の低下などの問題は、無視されたままだ」

「二十世紀が終わるまで、米国の覇権は衰え続けるだろう。過去の放蕩三昧のツケを突きつけられる」

「米国が犠牲を払い、経済構造を計画的に改革していけ

ば、話は別だろう。だがそうなる兆しは、まだ認められない」

これが当時、気鋭の米ジャーナリストだった著者の視点である。皮肉なことに、この文の主語を「米国」から「日本」に変えれば、現在の日本の置かれている状態にほぼ当てはまる。

九〇年代に、日米の経済状況は完全に逆転した。日本はバブルの崩壊と共に「失われた十年」に入り、米国は空前の繁栄期を迎えた。著者は、著者バーンスタイン氏の当時の現状認識や見通しが、結果として誤っていたことを、あげつらうつもりは毛頭ない。書かれた本の内容について、後からあれこれ批判するのは易しいことだ。むしろ、この書を著した同氏の鋭い分析力と洞察力には深い敬意を表したい。

ここで強調したいのは、バーンスタイン氏ほどの炯眼でも経済の先行きを読むのは至難のわざであり、経済の動きはそれほど複雑、難解だ、ということである。マルクス、ケインズの卓越した能力をもってしても、一時的にはともかく、長期にわたって経済の発展過程を見通す

ことはできなかったことは、歴史が明示している。

特にここ十年の日米の経済状態の激変を、おおまかにも予測できた人は、筆者の知る限り一人もない。大體、人々は口を開ければ、「日本は不況だ」というが、不況の概念さえ最近ハッキリしなくなってきた。

たしかに二〇〇一年度の国債発行残高は三百八十九兆円で、一般会計予算の八十二兆六千五百二十四億円に対しザッと四・七倍。国家財政はまさにパンク寸前だ。だがその半面、国内総生産（GDP）は依然として世界第二位。貿易黒字の増加で、外貨準備高は十五か月連続で世界第一位だ。消費者物価は安定。失業率は高いとはいえ、路頭に迷う人が急増しているわけでもない。昨年の海外旅行者は約千七百万人で、七人に一人に達している。多くの開発途上国に比べれば、はるかに「好況」といえる。「不況」は絶頂期からの相対的なものだ。今はむしろ「普況」というべきではないか。

一方、米国経済も、九〇年代には史上最高の好況を誇ったものの、昨年秋季ごろから急速に失速し始めた。内需

の三本柱といわれる自動車、住宅、情報技術（ＩＴ）の落ち込みが目立つ。連邦準備制度理事会（ＦＲＢ）は年初に合計１％の利下げに踏み切ったが、株価は低落が続いている。「バブルの崩壊」を懸念する声も多くなってきた。

最近の二十年を振り返ってみると、おおざっぱにいうと、日本経済は一九八〇年代は好調で、九〇年代は低迷。米国経済は逆に八〇年代は低迷したが、九〇年代は飛躍した。「十年」に特別の意義を認めるわけではないが、これくらいの期間で考えると、見えないものが案外見えてくることが多い。

九〇年代の初期、バブルが崩壊して地価や株価が急落したところには「回復には三〇五年はかかるだろう」との意見が圧倒的に多かった。その中で筆者の知る限りただ一人、ある若いエコノミストが「根本的な構造改革が絶対に必要。真の景気回復には二十一世紀初頭までかかる」と断言した声が、今も耳の底に残っている。

日本経済の先行きについても、短い期間での一喜一憂は止めよう。長く広い視点に立って、日本および日本人

の底力に期待したい。案外『人の行く裏に道あり花の山』かも知れない。

二十世紀最後の年を振り返って

三宅 劬

学窓を出てほぼ半世紀、年末年始を自宅で過ごすことはほとんどなかった。四十歳ころまでは毎年志賀高原のスキー宿で、ヨーロッパ勤務を終えて帰国後の数年間はシンガポールで、この十数年は京都のホテルで新年を迎えるのが生活パターンになっていた。

二十一世紀の初日の出は南太平洋の島で、と考えていたが、親戚に九十歳を超えた老人が何人かいて、ホテルの予約をためらっているうちに機会を逃がし、久しぶりに自宅で過ごすことになった。

過去十年近く、年間の時間配分は、二か月前後の旅行、音楽・美術鑑賞、食べ歩き、読書、パソコンなどそれは

ど変わっていないが、書棚を整理していて老いに関する本をたくさん購入しているのを再確認した。

この一年間に、カナダ・ニュージーランド・オーストラリアへ延べ三か月近く旅行して、ほとんど毎日一万歩は歩き、若者に負けないくらい元気なつもりでいたが、精神的にはかなり老化したようだ。

パソコンを使い始めて約十年、購入したり、図書館で借りて読んだ図書の一覧表を作成しているが、昨年度のものは従来のもとは大きく違ってゐるのに気がついた。

過去十年の読書傾向は、

①司馬遼太郎、塩野七生らの歴史もの

②大前研一、立花隆、野口悠紀夫、中谷巖、竹中平蔵らのビジネス関係

③多くの人々の旅行記

④古典的な文学書

が大半を占めていたが、昨年度はこれらに加えて、老後の生き方・介護・ボケなどについての本を二十冊前後も購入していた。

親戚・友人・知人で九十歳代の親の看病のために六、

七十歳代の子供が自分たちの生活を犠牲にしている事例を多く見て、われわれは子供の世話になるべきでないと決心した。

有名人でも例外ではない。医事評論家・行天良雄氏が多忙な日常生活にもかかわらず必ず夕刻には帰宅し、毎日九十過ぎの父親を入浴させている様子が放映され、その親孝行ぶりには感心したが、夫婦の日常生活は旅行が出来ないのもちろん看病のために完全に犠牲になっていた。俵孝太郎氏の「どこまで続くヌカルミぞ」、舩添要一氏の「母に襁褓をあてるとき」などの著書で見た介護の苦勞を知った。

そのため、昨年は相当の時間を割いて数多くの有料老人ホームの調査をした。専門書を何冊も読み、資料を取り寄せ、一定水準以上の施設を見学し、さらに体験入居も試みた。首都圏の場合、五十平方メートル程度の狭い部屋の終身入居権に数千万円を支払い、月々の経費が二十から三十万円と相当な出費になることが判った。

北欧三か国の福祉の良さはよく知られているが、具体的な数字についての知見はない。少し昔の話になるが、

旧西ドイツは度々訪れ、取引先の親しいドイツ人の案内で数か所の有料老人ホームを見学したことがある。いずれも街中の便利な場所にある立派な設備で、一時入居金が三百万円程度と非常に安かった。しかも、このお金は敷金のような性格で、退去する場合全額返還されるようだ。ドイツの場合、月々の経費は平均的な年金の範囲で、現在の日本の有料老人ホームと大きな違いはない。

延べ一年あまり滞在したニュージーランドの場合は、さらに恵まれていて、市内の良い住居地に数多くのすばらしい有料老人ホームがあり、わずかの保証金で入居でき、老後の暮らし方に不安を抱く人は少ないようである。数十回の個人的な海外旅行（仕事での旅を入れると百回前後）で常を感じるのには、わが国の生活費の異常な高さである。食料品・土地家屋・タクシー代などは、政府が発表している数字よりはるかに高い。海外ならば立派な一軒家を買うような数千万円もの有料老人ホームの入居一時金は論外である。バブル崩壊後土地価格の大幅下落で、都心部のマンション価格は三分の一程度に値下がりしているが、有料老人ホームの入居一時金はほとんど

ど値下がりしていないのは、なぜだろうか。ドイツ、ニュージーランド並みは無理としても、一千万円程度の一時入居金公営有料老人ホームが出来ることを期待したい。

数字の上では、わが国は世界有数の長寿国になったが、有料老人ホームで見られる福祉の遅れと老人の生活の活気のなさになるこのごろである。私がメール交換している欧米の十数人の老人たちは、若い頃からの趣味を生かして生活をエンジョイし、ボランティア活動をしている人が多い。長年のサラリーマン生活で、会社中心の生活を送ってきた老人がこの年になってよい趣味というのは無理であるが、多少でも地域に貢献するなど、残された時間を有意義に過ごしたいと思う。

草の髓からアメリカのぞく

小島 博志

A 太平洋の彼方では、新世紀とともに新しい大統領の誕生だね。まずは、おめでとう。

B 新大統領とはいっても、疑問票という十字架を背負っての登場。もうひとつ盛り上がり欠けるよ。疑問票を抱えた大統領なんて、これまであったのかね？

A 疑問票が残ったといっても、あれだけ論議を尽くしたんだし、ゴア候補も敗北宣言を出したんだから、いいではないか。フロリダ州政府発表の得票数をめぐって、共和、民主両陣営が巡回裁判所、州最高裁、連邦最高裁を舞台に繰り広げた訴訟合戦は見応えがあつたよ。でも最後は一本にまとまった。さすがアメリカだ。

B 総理が密室で決まってしまうって、国民にはさっぱりわからない、こちら岸とは大違いだね。でも開票当初の十一月九日、フロリダ州での両候補の得票差が千七百八十四票あったのが、九百三十票（十一月十八日）、五

百三十七票（十一月二十六日）と州政府の発表のたびに縮まっていくのを見てみると、「それ、ホントにホント？」と言いたくなるよ。

A 最後に連邦最高裁判所が五対四というきわどい差で、ブッシュ候補に有利な判決を下し、手作業による疑問票の数え直しの道を閉ざしてしまった。アメリカ全土の一般得票数ではゴアが三十三万票余り上回ってというから、これでは国民に選ばれた大統領なのか、裁判所が決めたのか、どっちかね？と問い返したい気持ちだ。

B IT革命の先進国で疑問票なんて、びっくりしたね。投票が終わったら、コンピューター処理でパッと結果が出るかと思ったら、そう簡単にはいかない。全米で一番多く採用されている投票方法がパンチカードで、三四％だそう。次がマークシートの二七％、最新式のタッチスクリーンはまだ一〇％にもならないんだ。そのパンチが疑問票を生んだわけだ。

A パンチカードといえば、日本では二、三十年も前に統計調査に使われていたあれ？だろ。あれが今もアメリカでは生きていて、選挙に使われていたとはね。

B まったくオドロキだったよ。パンチの仕方が悪くて、穴が貫通しなかったり、くぼんだだけの「えくぼ票」だったり、さらには隣の候補にもかかっていて、どちらに投票したんだか器械では判定できなかったり…。それを選管職員が一票一票、光にかざして、ためつすがめつしていた光景は、どこの国かとわが目を疑ったよ。

A まったく笑っちゃったね。疑問票ばかりか、黒人やヒスパニック系の人への投票妨害もあったようだ。

B マイアミ・デード郡では手作業で再集計を始めたが、とても期限内に数え切れないと、途中でやめてしまった。共和党支持者の抗議というか、脅しの激しかったことも中止の一因だった、とある当局者がもらしていた。中止までに百五十六票のゴア票が積み上げられたが、算入されなかった。一度有効と認められた票を捨てる権限が郡当局にあるのか、民主党が怒ったのも当然だ。

A そんな無茶な！ 国連の選挙監視団をアメリカにも送ってあげたいよ。

B パームビーチ郡では期限までに再集計した部分集計結果を送ったが、州政府で取り上げられなかった…。

こんな混乱ぶりは日本ではとても考えられない。

A それで最後は連邦最高裁での勝負というわけか。判決内容は、一体どういうことなの？

B 六十ページを超える長文で、内容も複雑のようだ。九人の判事のうちレンキスト長官はじめ五人の多数意見は、疑問票の扱いが州内、郡内でバラバラなのは合衆国憲法の平等原則に反する。統一基準をつくり、期限内に数え直すにはすでに時間切れということだ。期限とは、フロリダ州議会が大統領選挙人団（二十五人）を選出する十二月十二日のこと。ところが、判決が出たのはその日の午後十時。これでは、初めに結論ありきさ。

A 一人一票の大原則はどうなったの？

B 選挙の大原則より、選挙日程を優先したわけだ。大統領選挙は、十二月十八日に各州で大統領選挙人団による投票が行われるので、その六日前までに準備を整えるんだそうだ。

A ややこしい間接選挙だね。

B 判決は、保守派三人のほか中間派のケネディ、オコンナー両判事が加わって多数意見となり、これに対し

て、リベラルの四人が反対意見を述べている。

A 七十歳のオコンナー女史はもう引退したいが、ゴア候補が勝つと自分の後継者が民主党大統領によって任命されるので、あと四年間やらねばと、選挙当日言っていたそうだ。こんな話がウォールストリート・ジャーナル紙や二大週刊誌にのっている。これでは、国の内外から政治的判決だと批判されるのも当然だろうね。

B 世界のアメリカなら、もう少し堂々とやってほしいね。アメリカの日はもう西に傾き始めたのか。



短歌会この一年

細川 謙三

昨年の秋は深尾榮助さんが長逝され、松浦武弘さんが新しく入会された。

私がこの歌会に加わって何年になるのか。少し不正確だが、多分六年位前からだっただろう。短歌は俳句と同様、日本人の間ではここに深く沁みこんでいる詩形式だから、当初教養と経歴にとんだ皆さんとの会話や皆さんの作品の批評には大変気疲れがした。

例えば、ある人は私の短歌の素養をテストするような質問を度々繰り返されたが、結局去っていかれたようである。私はこのクラブは企業にながく勤め海外勤務の苦勞をして来た方々の親睦団体だと思っているから、短歌の会などへの去就は自由で、それに拘泥する気などは些かも無いのだが、短歌という詩型式にながく関わって来

た一人としてはやはり、やる以上は本気になってやって欲しい、という気持ちはある。ここに抄出した方々はそういう意味では本気の方々である。

その本気の方々と昨年から『万葉集』を読みはじめたテキストは斎藤茂吉の『万葉秀歌』だ。しかし、これは作品抄出の煩雑さを省く手段で、私が永い間雑読して読みすてて来たさまざまな万葉観を整理しながら皆さんと一緒に勉強しようという試みなのであった。だが日本の古代文化史については皆さんの研究と読書範囲はとてども広く私にとっては大変勉強になった一年であった。

その万葉雑読も今年から巻八に入った。今年一年で終わるつもりだが、ご興味のある方は是非短歌の会にご参加頂きたいと希っている。

病院にて
深尾 榮助

ゆつくりとゆつくりと養生せよという中国帰りの友に謝
謝（シエシエ）という

肉を食え筋力鍛え牛乳飲めとアメリカ帰りの友はポジティブ

瘦せたなとじつと見つめて握手する三年振りの同期の友は

手術などなにするものぞおじいちゃん相撲しようと迫る孫たち

生きてくれともかくにも生きてくれ介護に馴れぬ妻の言葉は

花の裏道

北田 純一

ソロを吹く少女は頬染め高々と力一杯ホルン奏でぬ

「夏は来ぬ」「キヌとはなに」と子ら問うと少女コーラスの先生は言う

幕張のビルの高きはミルク色の霧に隠れて梅雨盛りなり
戦塵日誌に書かざる残虐ありしこと子には語りて老父逝けりと

ヒーローは孤独を背負う一人旅ジョー・デイマディオの花の裏道

草を抜く

藤岡 豊

恙なく母の納骨終えし妻安らぎており香をまといて

包まれて遠く旅立つ雛人形まだ見ぬ孫のひとみを想う

灯の下に茹であがりたるずわいがに地酒もたのし越後の夜は

枯れ草の芽ぶき始めし多摩堤ルーズソックスの少女らが行く

頑なな父に逆らいし若き日を悔いつつ墓地の雑草を抜く

花の命

三枝 亨

街に出て般若心経唱えおり羞恥無縁の齢となりて

馬頭観音にクローバー手向け道端に奈良の草餅妻と分け合う

ゆつくりと坂道登る老農婦丸き背筋に母の偲ばる

昨日は百合今朝顔と移ろいの花の命にひととせ早し
パミール越え再び来るテヘランは吾が商社人生の初旅の町

古代のロマン

松浦 武弘

外房の無人の駅は荒れしまま夏草茂るホームの端に
山頂の夏のみ寺の庭先にはや秋トンボ群れてとびおり

夏の間にうちしおれたるベゴニアは彼岸を過ぎて生き生きとせり

播州の古き商家の白壁にのうぜんかずら咲き乱れおり

古代には興味なかつた此の我にロマン与えし梅原史学

ドイツのわが娘

アブドルカーダー栄子

すすき穂の白くゆれをる駅々を過ぎて列車に灯のともり

初む

水張りしバケツ頭上に載せらるる思ひのしたり手術直後は

ドイツ語のニュースを聞くやそこに住む娘の思われて電話かけたり

大小の形いろいろ風花は妖精のごと陽の中に舞ふ

風花に大小ありて陽の中を漂ふごとく散るがごとくに

過ぎしひと年

西川 知世

孔雀の目鋭く吾を見るごとき円山応挙の絵の前に立つ
金銀の兎を彫りし硯箱小彌太の執務机に置かる

白椿咲きたる庭に出てをればまだ春風といふに冷たし

虫追ひの松明行列進みけり蝙蝠あまた飛び交ふ畦に
虫追ひの松明行列果てし田に雨兆す雲拡がつてをり

冬のうた

細川 謙三

冬枯れの水木の梢にかかりたる十三夜月ひかり澄みたる
冬バラの一つ残りしわが庭に月の光は降りそそぐなり
鈴懸の並木の坂の落葉踏み郵便局へ横切りて行く
あはれなる憶良の人生語りたりわが分身のごとく思ひて
肉一片ながくかかりて嚙みくだす道玄坂をくだりし店に



ペン俳句この一年

その佳句鑑賞

平間 真木子

句会場が丸の内より代々木となり、環境の変化もまた楽しい気分にて、この一年の歩みを続けたのである。

浅野正春さんは体調を崩され途中休詠。上澤準一さんと吉井米三郎さんはお仕事の都合により止むなく欠詠されているが、玉山和夫、本田松魚のお二人の参加を得ることができた。墨堤のさくら吟行、師走の本所に吉良邸跡を尋ねる吟行など、作句の場を広げ、連衆と共にある喜びを味わうことが出来て何よりであった。

京都にて
平間 真木子

二十世紀送る大文字焼の火よ
糺の森おほつごもりの木菟鳴ける
第九合唱京都市役所前広場
冬の花火カウント・ダウン始まりぬ
二条城より暁紅のバイク音
電線の碍子を染めて初日出
新しき世紀を恃む破魔矢もて

春潮の航夕富士をはるかにし
池田 耕治

初恋は蜜柑の花の頃なりし
漫画読む父ゐてプールサイドかな
若き日のパイプを卓に夜の秋
枯れてなほ鶏頭色を失はず

「初恋は蜜柑の花の頃」というこの明るい率直さが好ましい。照れやの半面をよく見せてくださっている。また「若き日のパイプ」というこの自画像を、「夜の秋」の季語で締め括っているのは流石と思う。

初暦ミケランジェロに始まりぬ
蠅叩き手にして少女ためらへる
新羅古都かの日のごとく秋桜
冬帽の少女パソコン膝にせる
熱爛や討ち入りの是非論じ合ひ

石川 正達

初句会における「初暦」の句にみな瞠目した。ここに「ミケランジェロ」の登場は全く意外であつたから。いつもお孫さんである少女の姿を描かれるが、「パソコン膝に」と成長されたことは嬉しい限りである。吟行句の熱爛・討ち入りの是非、とはいかにも正達さんらしい。

グランドの雪となりたる試合かな
何処より来しかと藝に問うてみむ
水泳教室インストラクターの四肢若し
シベリアの土産とくれし冬帽子
紫蘇晶三千院を遠く見て

亀井 弘次

もとラガーマンとして「雪となりたる試合かな」には深い思い出のある由。「インストラクターの四肢若し」の表現は生きいきとして楽しい。紫蘇晶と三千院の取り合せは、京都に長くおられ京都を愛する方の句として、何よりの出来と拝見した。

双鶴の飛来や花の隅田川
墨堤の花の下なる踊りの輪
もてなしの紫蘇ちりめんや夏夕べ
花火師の指黒くして頑固なる
吉良邸に追慕の碑あり冬椿

岸本 義生

昨年より参加であるが、俳句が好きでたまらないという熱意を示しておられる方。だが、掲出句五句のうち、四句まで「双鶴の」というように上五が「の」の字になっている。それぞれ佳句ながら、このパターンの繰返しではまだ勉強が足りない、と言われるところ。

北田 純一

初夢は漠に食はれてしまひけり
水仙の似合ふ少女となりしかな
花に来て雪見の句碑と相対す
真打の当意即妙夜の秋
皇子の血か二上山の烏瓜

このごろ頼に物忘れ、と笑っておられるが、大人の風格から「文人俳句」へと進まれる感じがする。それも一つの在り方であるが、枯淡の境地もさることながら二十一世紀に生きる俳句を作って戴きたい、と思っている。

三枝 亨

白梅の咲く山門に「葦酒」の碑
課題なき身に風鈴のよく鳴れる
千光寺さまの歌碑見て汗拭ふ
雷遠し塾の小窓に灯のともり
一囊に秋風背負ふ阿波の道

中近東の旅より帰国のあと、何故か急に俳句が上手になられたようである。尾道千光寺さま、秋風の阿波の道、いずれも写生・心象ともによく出ていて佳い句。塾の灯と雷遠しの配合は、身辺句のよろしさである。

初詣執銃帯剣の時ありき

玉山 和夫

バーゲンに妻の出かけて春深し
アカシヤの香の濃き街に来てゐたる
秋風の大地に薯の太りゐし
菊贈お国訛りの祝辞かな

執銃帯剣にて「初詣」というご本人の話を伺い、そうした五十余年の前の記憶が鮮明にあることに驚かされた。北海道育ちの方らしく、「アカシヤの香の濃き街」「薯の太りゐし」とは望郷の句として好ましい。妻の句も結構です。

春の潮未来都市めくお台場に

本田 松魚

元禄の顔に戻りし花見かな

ふふみたる団子の甘し花疲れ

泡沫の身を漂はせ夜のプール

秋風や二銭と標す渡しの碑

他の句会にても勉強されているので、どの句もあふなげなく、しつかりとしている。「未来都市めくお台場」とは言い得て妙で、春潮の季語はよく利いている。「元禄の顔」とはどんな顔なのか、これはまた楽しい表現をされていて、作者の手腕のほどが推測される。

種袋振りたる音の乾きあし

西川 知世

照明の芝に延びぬし夜のプール

地下街を出で雷鳴を身近にす

帰らむとしてかなかなのひとしきり

秋風や珈琲の香のカフェテラス

年末には「朝日俳句」の三十句に挑戦されたようで、首尾の待たれるところ。老父母介護の日々とは感じさせぬ強靱な意志と身体に敬意を表したい。それは若さに違いない、と羨望される所以である。今回の作品はそれぞれ情を押さえた句で、この非情のよさを伸ばして戴きたい。

屠蘇汲みて膝にたばこの灰こぼす

浅野 正春

昭和また遠くなりたるなづな粥

体調のご本復をお待ちしております。

深尾 榮助さんを偲ぶ



深尾 榮助（ふかお・えいすけ）二〇〇〇年十月二十日転移性胃がんのため死去。六十九歳。一九三一年京都生まれ。大阪外国語大学英米学科卒。富士銀行入社、ニューヨーク支店、ロンドン駐在エコノミスト、海外経営コンサルティンク室長、国際企画部参事を経てタバイエスベック常務、アクタスコンサルティンク社長に就任。平成十一年関西外国語大学教授（国際貿易論）。

学究肌の知識人

岩崎 洋一郎

深尾さんの逝去を北田会長から伺い、心底驚きました。あの人懐っこい笑顔をもう見られないと思うと寂しさがこみ上げてきました。彼と最初にお会いしたのは、八年前の十一月でした。翌年に定年退職することが決まっていた私は、

その後のことをあれこれ悩んでいました。見かねた大学の同級生が、相談相手として紹介してくれたのが、先にコンサルタントの道を歩んでいらした深尾さんでした。その後は、不案内の私に親切丁寧に種々のアドバイスを頂きました。富士銀行時代の深尾さんは調査部が長く、学究肌の知識人として鳴らしていらしたと漏れ聞きまし

た。また、たいへん世話好きで、彼のおかげで大いに助かった方が多いとか。ニューヨークに駐在していた折には、得意の語学を駆使して、後から着任した先輩後輩が現地の事情がわからずに困っていると、公私にわたり何くれとなく面倒を見ていたという美談が語り継がれているそうです。今回、富士銀行の友人たちに計報をお知らせすると、異口同音に「惜しい方をなくした。自分も大変お世話になった」と言う反応がほとんどでした。

深尾さんと時々お会いしていろいろと情報交換する中で、ある日、私が企業OBベークラブのメンバーであることを披露しました。深尾さんは大変ご興味を持たれ、ジ

ヨインされたいとおっしゃったので、喜んでご紹介させていただきました。以後のご活躍の様子は、皆様もよくご存知のとおりで近年は関西にご活躍のペースを置いてらっしゃいました。

昭和六年生まれということは、未だ満七十歳に達していられっやらない。早過ぎるお別れと残念でなりません。ここに、深尾さんの残された和歌を二首記載します。いかにも彼の人柄がにじみ出ている作品であると感じ入りました。

手術など なにするものぞ
おじいちゃん 相撲しようと 迫
る孫たち

生きてくれ とにかくにも
生きてくれ 介護に馴れぬ 妻の
言葉は

ご冥福をお祈り申し上げます。

感動を与えてくれた人

宇野 存

若いときは、もの（自然・文化）に感銘し、涙することすらあります。しかし、歳と共にそれも薄らいでいきます。人についても、人柄や生き方に惹かれ、その出会いに感激するということも少なくなります。

感動とはエネルギーです。そのエネルギーを、久しぶりに呼び起こして下さったのは深尾さんでした。

出会いは、平成十一年秋の日本

観光学会大会（別府）。深尾さんは入会されてまだ間もなく、会員の方の紹介で、私の大学の五年先輩であることを知りました。

この時は、ご挨拶程度の短い会話を交わただけで、次にお会いしたのは、同学会東京支部の新年懇親会でした。顔が合うや否や、「もう一度是非お会いしたい」と思っていたんですよ」と言って握手を求められました。この時も二人が個人的なお話をする時間はほとんど無く、再会を約束しました。四月になり、初めて個人的にお会いすることになりました。待ち合わせは、JRお茶の水の改札口。私は、目上・目下の人に拘わらず、相手を待たさないように、時間的に余裕をもって行くようにしてい

ます。約束の十分前に駅に着きま
すと、深尾さんは、すでに杖を片
手に改札口に立っておられました。

時間を守ることは、ビジネスの
第一歩であり、人間性の基本です。
最近の日本人の時間のルーズさは、
若者だけではありません。大人も、
自分の用件で会ってもらうような
時でさえ相手を待たす人が多い昨
今、深尾さんのお人柄のすべてを
垣間見たような気がしました。と
つさに、この方となら永くお付き
合いさせていただけるかと直感し
ました。

レストランの席に付きますと、
「先ず自分のことから話します」と
おっしゃり、語り始められました。
大学時代のこと、卒業・就職のい
きさつ、富士銀行時代のエピソード、

ド、定年後の人生、胃の手術、家
庭のことなどを、まずご自分の方
から心の垣根を取り払い、まだ気
心も知れぬ私に熟っぽく語り続け
られました。駅でのことですので
心を開いていた私は、吸い込まれ
るように聞き入り、ますます深尾
ファンになっていきました。

次に私も、同じように自分のこ
とを話しました。他人様に包み隠
さず自分自身のことを話したこと
は、過去にあったでしょうか。

その内、鞆から「企業OBペン
クラブ」の名簿を取り出され、私
に入会を勧めて下さいました。こ
れが私のペンクラブとのご縁のき
っかけでした。

知り合って半年足らず個人的に
会うのは初めてでしたのに、いつ

しか肝胆相照らす仲になっていま
した。これからは四季に一回ぐら
いは、自称「賢人会」なるものを
もとうと約束しました。

夏の再会予定前に、七月一日の
日本観光学会大会（東京）で私が
研究発表をすることになっており、
ご出席下さいました。体調が悪か
ったせいか昼食後直ぐお帰りにな
り、お顔を見るのはこれが最後にな
りました。

大学が夏休みに入ってから電話
しますと、「痩せて脚が弱くなった
ので、近く栄養補給入院をする」
とのことを見ました。いつもの
明るい声でしたので、医学知識の
乏しい私は、入院の理由をそれ以
上疑おうとしませんでした。そ

の内少しは太って退院なさること
と思い、後日、励ましの手紙を添
え、お見舞いの品をお送りするに
とどめました。

と、十月二十日昼前に奥様から、
朝お亡くなりになったとのお電話
がありました。ただ呆然とし、高
雄のお寺でのお通夜に伺いました。
祭壇のご遺影は、私が知っている
術後でお痩せになった深尾さん
とは違い、ふっくらとし、生気に溢
れた現役時代のお顔でした。お写
真を見ていると二つの顔がだぶり、
人の生老病死のはかなさと、大切
な人を失った悲しさで、知らぬ間
に頬が濡れていました。

富士銀行時代の元部下の方が話
し掛けてくれました。深尾さん
は、富士銀行の三本の指に入る英

語通だったこと、また、大変面倒
見のよい上司だったことを、見知
らぬ私に話され、故人を悼んでお
られました。私にとっても、温か
い先輩でした。

深尾さんと私は、大学の同窓、
同じ学会の会員、大学の教員とい
う共通点があります。しかし、そ
れらは、一つのきっかけではあり
ましたが、偶然の重なりではあり
りません。そのような結びつきが
無くても、人生を語り合い、時に
は甘えたくなるような学兄でした。
人の交わりの深淺は、期間の長
さでなく、たとえ短くとも掛け替
えのない存在になることを教えて
いただきました。

忘れかけていた感動を与えて下

さった深尾先輩、有り難うござい
ました。



企業OBペンクラブのあゆみ

平成十二年（二〇〇〇年）

年表（原則として敬称略）

一月例会（二十五日）

- ・入会 児玉 進
- ・会員講演

許斐 義信

「コンサルタントから見た企業経営」

- ・本の紹介

中川路 明 「ニホンゴキトク」

- ・新年度の重要方針発表

- ・退会 佐份利 治 増岡 直二郎 酒井 忠

行

二月例会（二十二日）

- ・入会 鳥海 博
- ・会員講演

年史

一、新役員人事（任期二年）

会長 北田 純一

副会長 中川路 明

理事 多田 修

理事（事務局総括） 藤岡 豊

運営委員長 都甲 昌利

事務局長 中村 爽

運営委員長補佐 大野 晃

監事 児玉 忠雄

二、新年度の重要方針

- ・クラブ創設時の精神「国際感覚の啓蒙」に立ちかえり、わがクラブのアイデンティティを明確に主張する。

- ・商品的見地から本の作り方を勉強しなおす。

中村 爽

「建設コンサルタントと国際事業」

・退会 鳴澤 宏英 園田 秀俊 田中 淳三

三月例会(二十九日)

・会員講演

刀祢館 正久

「記者時代からの文章修業」

・「悠遊」第七号完成、配布

四月例会(二十五日)

・ゲスト講演

川又 昂氏(元松竹撮影監督)

「松竹映画二つの波、小津監督と大島監督」

・退会 木村 昭 定直 正光 千葉 義道

内藤 徹雄

五月例会(二十四日)

・会員講演

岡 政昭

・新しいアウトプット方法の研究―電子出版、ITの技術を深化させる。

・百編方式を少数共著方式に重点移行する。

三、会員数

新入会員は五名、退会者は物故者を含め十三名で

二〇〇〇年末現在の会員数は九十一名となった。

四、出版・プロジェクト

(一) 同人誌「悠遊」第七号が三月二十九日に発行された。(編集世話人 石川正達・小島博志)

(二) K&Kプレス「月刊日本」への投稿を中止。

(プロマネ 北田純一・松浦武弘)

(三) 電子雑誌「ベストライフ・オンライン」への寄稿を開始。「年金生活のツボどころ」、「ホントの話」「真木子俳句教室」等が連載された。同誌のサークル・ホームページの活用も検討中。

(プロマネ 北田純一)

(四) 雑誌「ロゼッタ・ストーン」のコラム「最近腹の立つこと」、特集「私の十七歳」への寄稿。

(プロマネ 大野晃)

(五) 「二十一世紀の商社」今年は出版計画が進まず、

「国際通貨体制の揺らぎと『ドル化』の動き」

六月例会(二十七日)

・入会 宇野 存

・会員講演

島海 博

「今何が起こっているのか証券界」「これからの資産運用」

七月例会(十七日)

・会員講演

大野 昶

「シシリとローマの旅」

・本の紹介

杉浦 右藏 「民族の世界地図」

八月例会(休み)

・入会 西川 武彦

九月例会(二十六日)

新年度には「ベストライフ・オンライン」等、発表メディアを検討する。(プロマネ 大野 昶)

(六) 企業こと始め「募集原稿の掲載形式を再検討し、

「ベストライフ・オンライン」に掲載を計画。

(プロマネ 都甲昌利・黒崎昭二)

(七) 新プロジェクト「私の十七歳」の原稿募集を終

了。「ベストライフ・オンライン」に新年度より掲載する。(プロマネ 小島博志)

(八) 「公募を楽しむ会」は本年度よりプロジェクトとしてスタート。「公募ガイド」誌をベース

として、文筆作品の公募に挑戦を目指す。岸本義生の応募作品が光文社の公募に入選し(会員ニュース参照、その第一歩を飾った。(プロマネ 中川路明)

(九) 「サラリーマン体験録」の原稿募集を開始した。

(プロマネ 中川路明・刀祢館正久・岸本義生)

(十) 同人誌「悠遊」第八号は二〇〇一年三月発行予定。(編集世話人 小島博志・石川正達)

五、ミーティング・勉強会

(一) 小説研究会(マネジャー 八木大介)

・会員講演

宇野 存

「エアライン・パイロットへの道」

・本の紹介

三宅 劭 「ドットコム・ショック」

十月例会（二十三日）

・入会 金京 法一

・会員講演

三宅 劭

「私のパソコンライフ」

・計報

深尾榮助氏が十月二十日逝去

十一月例会（二十七日）

・会員講演

高橋 孝蔵

「テレビが変わる」

・特別ゲスト講演

高木 利弘氏（株式会社カシス社長）

小説により表現の方法を学ぶ勉強会で、会員相互の談論風発を特色として成果をあげた。

（二） 内外情勢勉強会（マネジャー 上澤準一）

内外の主要トピックスをテーマとした勉強会で、「最近の国際情勢と森内閣の課題」につき会合がもたれた。来年度より、中断している「サロン21C」と合併した形で再スタートする。

（三） 何でも書こう会（マネジャー 新山章一郎）

文章修業の場として、会員寄稿の作品をベースに相互に批評、討議をおこない、活況を呈している。会員の文章力向上に成果をあげた。

（四） IT勉強会（マネジャー 多田修）

ITをより広い視野で勉強するため、Eメール勉強会を発展的に解消し、スタートを切った。電子出版、電子雑誌等につき、外部専門家を講師として招き、技術の研究を重ねた。インターネット・Eメールを使用する参加会員数は大きく増加した。また、「ベストライフ・オンライン」プロジェクトへの協力を進めると共に、インターネット博覧会への当クラブの参加を目指す

「電子出版カシス・パブリッシャー」

十二月例会(二十六日)

・入会 泉 洸

・出席会員全員による「この一年を振り返って」のテ

ーマでの発言

・忘年パーティー

恒例の忘年パーティーを新日鐵「代々木倶楽部」

パーティー・ルームで開催

・退会 真野 正 原 信 宮川 政一

正木 豊

・訃報

西川永幹氏が二〇〇一年一月二十四日逝去

して活動した。

(五) 短歌サロン・俳句教室

細川謙三、平間真木子両先生の指導のもとに今年も会員相互の研鑽が続けられた。会員の作品が俳人協会で特選となるなど、その成果は著しい。(会員ニュース参照)

六、会員ニュース

・遠藤俊也が随筆集「旅・人・釣り」を自費出版(九年十二月)

・都甲昌利が光文社による体験談集「人を育てる」(城山三郎監修)の公募に入選、三月発刊の同書に掲載された。

・森田茂が岐阜大学・若井研究室より「アラビア石油の権益失効は問題」と題する論文を発表(四月)

・衛藤甲子郎が随筆集「老いらくのマナー 体験的定年。老化論」を自費出版(七月)

・櫻井清治が輸入食料協議会報に「IT革命とビジネス・モデル」と題する論文を発表(九月)

・西川知世の句が、俳人協会第三十九回全国俳句大会で特選入賞(九月)

・岸本義生が光文社による「今こそ、人を育てる。」
（「人を育てる。」第二回文集）公募に入選。平成十三年二月発刊（十二月）

七、その他

・ビューティフル・エージング協会発行の会誌「ビューティフル・エージング」第十六号に、当クラブが「もの書き集団」として紹介された。

・長年当クラブの活動会場だった「丸の内養和クラブ」が、地域再開発にともない六月末に閉鎖されたため、七月より会場を「新日鐵代々木研修センター」に移転した。

八、まとめ

新ミレニアムの初年度、今年も依然として出版不況といわれ、当クラブを取り巻く環境には厳しいものがあつた。一方、IT革命が叫ばれる中、当クラブは新しいアウトプットの手段として、電子出版、IT技術の研究の深化を重点方針とし、これに向かって活発な活動が続けてきた。その結果、初めて電子雑誌への寄稿、掲載が実現し、IT時代に即した対外発信が可能となった。さらに、Eメール・イン

ターネットの利用者も全会員の半数に近くなり、当クラブの新しい発展に向けた進路が視野に入ってきた年であった。新世紀においては、必ずや当クラブのますますの前進が期待できるものと思われる。

執筆 者 名 簿 (五十音順)

氏 名 (カッコ内は本名)	出 身 会 社	生 年
浅野 正春	日立製作所	1934
芦刈 克	住友生命 ニッコン	1931
アブドルカーダー ー栄子	日本語教師	1933
新井 進	伊藤忠商事	1931
池田 耕治	第一勧業銀行	1927
石川 正達	毎日新聞社	1921
今川 確郎	兼松	1926
今村 亮	京セラインターナショナル	1931
岩崎洋一郎	三菱レイヨン	1929
上原 利夫	住友商事	1934
宇野 存	日本航空	1935
衛藤甲子郎	住友商事	1924
榎本喜三郎	三井物産 三井船舶	1914
遠藤 俊也	東京銀行 丸紅	1924
大塚 滋	国鉄	1929
大野 晃	三井物産	1933
岡 政昭	東京銀行 N B D	1926
折戸 常司	三井物産	1925
上澤 準一	三菱商事	1927
亀井 弘次	キリンビール	1928
岸本 義生	兼松	1927
北田 純一	三菱商事	1928
木下 洋介	文化放送	1933
金京 法一	三菱商事 三菱総研	1933
黒崎 昭二	新日鉄	1927
小島 博志	毎日新聞社	1931
児玉 忠雄	三菱銀行	1932
斉藤 勁	呉羽化学	1925
櫻井 清治	三井物産	1926
荘司 忠志	石川島播磨重工業	1932
杉浦 右藏	N T T 三菱電線工業	1932
関谷 裕彦	ローヤル・ネドロイド・ラインズ	1932

氏 名 (カッコ内は本名)		出 身 会 社	生 年
高橋 孝蔵	たかはし こうぞう	丸紅 松竹	1936
竹内 京一	たけうち きょういち	トープラ	1931
多田 修	ただ おさむ	横河電機	1929
玉山 和夫	たまやま かずお	通産省 日英協会	1919
都甲 昌利	とこう まさとし	日本航空	1933
刀祢館正久	とねだち まさひさ	朝日新聞社	1927
中川路 明	なかかわじ あきら	ダイセル化学工業	1929
中洲 靖雄	なかす やすお	三菱レイヨン	1927
中村 爽	なかむら そう	日本工営	1933
新山章一郎	にいやま しょういちろう	在日米軍海軍基地統合人事	1930
西川 武彦	にしかわ たけひこ	日本航空	1937
西川 永幹	にしかわ ながみき	さくら銀行	1941
西島 力	にしじま つとむ	住友商事	1930
野村 嘉彦	のむら よしひこ	三井物産	1917
平間真木子	ひらま まきこ	日本機械輸入協会	1925
深尾 榮助	ふかお えいすけ	富士銀行	1931
藤井 長治	ふじい ちょうじ	三井物産	1919
藤岡 豊	ふじおか ゆたか	三菱商事	1932
細川 謙三	ほそかわ けんぞう	東京銀行	1924
本田 克夫	ほんだ よしお	毎日新聞社	1927
正木 豊	まさき ゆたか	サマリヤ社	1936
松浦 武弘	まつうら たけひろ	伊藤忠商事	1939
水谷 汎	みずたに ひろし	満鉄 友愛信用組合	1917
三宅 劭	みやけ たかし	信越化学	1927
村田孝四郎	むらた こうしろう	新日鉄	1934
森田 茂	もりた しげる	出光興産	1930
八木 大介	やぎ だいすけ	三菱商事	1926
(木本平八郎・きもと へいはちろう)			
山辺 武磨	やまべ たけまる	伊藤忠商事	1919
吉井米三郎	よしい よねさぶろう	三井物産	1926
吉寄 清巳	よしざき きよみ	関西ペイント	1925
吉葉 芳彦	よしば よしひこ	出光興産	1931
西川 知世	にしかわ ちよ	企業OBペンクラブ事務局	1948

八号執筆者名簿を作成中の一月下旬、事務局からの連絡で西川永幹さんが亡くなられたことを知りました。一週間ほど前に「交換日記」を拝読し、入院中の父親と娘さんとの細やかな愛情交歓に感動した矢先のことでした。これが遺稿に暗転しようとは！病床から見つかった「交換日記」の原稿は、会葬者に配付されたと聞いています。

昨春秋に亡くなられた深尾榮助さんの作品「病床にて」は「短歌会の一年」に収録されています。その率直な作風からお人柄が偲ばれ、岩崎洋一郎、宇野存両氏の追悼文からは、その学識と思いやりの心があますところなく伝わってきます。深尾さんはクラブ中堅の古希、西川さんはようやく還暦という若さ。惜しいお二人を失いました。合掌。

特集二十三、自由三十五、合計五十八編のエッセイと短歌、俳句で八号を飾ることができました。表紙の絵およびカットは新井進さんと吉井米三郎さんの作品です。ありがとうございました。

「編集世話人」 小島 博志

石川 正達

「事務局」 西川 知世

事務局から

西川 知世

新しい世紀が始まりました。会員の方たちの闊達な論陣が再び誌面に展開されるだろうと、八号の発刊を楽しみにしております。インターネット博覧会、通称インパクがスタートしました。わがクラブも多田、杉浦両会員の強力なバックアップ体制のもとに参加。すでに数件のサテライトホームページを従えて堂々の開設です。2年ほど前にはパソコンの買い方から始めた方が多いのに、IT革命より早い進歩だと驚いています。さらなる盛り上がりをもって、一年間の長丁場を乗り切られることを願っています。一年間というのは、あつというまのようでもあり、様々なことが起こる時間でもあります。先年六月には丸の内養和クラブから新日鐵代々木センターに会場を移しましたが、皆様の変わらぬ参加を得て盛会です。私事ですが、昨年三月同居していました九十四歳の舅を見送りました。なにかと用事に追われ、理事、会員の皆様に多大のご迷惑をおかけした一年間をお詫びいたします。世紀を跨いだクラブの発展を祈念申し上げます。